鹿児島県史料

旧記雑録拾遺

伊地知季安著作史料集九

解　題

本巻は『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　伊地知季安著作史料集九』として「漢学紀源」、「諸家調抄」、「総州家御譜雑録」、「忠元譜参證」、「御家古伝秘考」、「秘伝島津譜図」、「栂ヶ尾高山寺什物等忠久公御画像紀考」、「栂尾什宝得仏公御真像来由考」、「得仏公真像及両荘来由」の季安の著作史料を収録した。配列は便宜上五十音順としたが、「御家古伝秘考」以下は季安が最晩年取り組んだ島津家先祖考証の一連の著述として一括「秘伝島津譜図」のもとにほぼ編年順に掲載した。以下その一々について説明しよう。

漢学紀源

本書は日本漢学史の著名な史料として、つとに『続々群書類従』・『薩藩叢書』等で活字化、普及してきたので今回の刊行では当初予定外とされていた。しかしやはり季安の代表的著作として収録すべきではないかとの識者の意見もあり、加えて今迄知られることのなかった季安等の自筆三冊本（現鹿児島大学附属図書館所蔵）が近年東英寿氏により発見、紹介されたこともあって、あらためて諸本を照合、現時点におけるその全体像を紹介するに至った次第である（東英寿『汲古四〇』「新出伊地知季安自筆本『漢学紀源』について」、『同四二』「『漢学紀源』の諸本について」参照）。

前述既刊本の依據本は東京大学史料編纂所所蔵島津家本の五冊本であるが、他に同じころ或はそれより以前に編成されたとみられる三冊本があり、さらにこれと近似している写本に鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫本の四冊本がある。今回は前記新出の自筆三冊本を底本とし、他の諸本によって主要部分について異同を示し、諸本それぞれのみに記載されている季安等の手によると思われる補遺史料、記事を適宜、それぞれの巻末巻初に挿入した。巻一（上）では東大五冊本の「小根占年寄池端君墓誌」等を付加、巻二（中）では底本のみにある後補を

記したあと、同じく東大五冊本から「柳滴水野先生之招魂墓誌」等の史料をあげ、東大三冊本から「島陰漁唱文集」の抄・跋記事等を補い、巻三（下）では同じく東大五冊本から「納環瓊先生耆策記」等の史料を加え、巻四では鹿大玉里文庫本を底本とするが、巻初に山川での連歌、天保四年十月十八日付季安の手になる「伊勢貞昌復前川為善牘標註」をのせる。同本は途中で終わっているので、以降は注を付して東大五冊本を底本としている。

本書については早く西村天囚の『日本宋学史』をはじめとして『鹿児島県史』、近年では前掲の東英寿氏の一連の論稿がある（『鹿児島大学文科報告三二』「伊地知季安の『漢学紀源』について」・『鹿大史学五〇』「伊地知季安における桂菴――『漢学紀源』に着目して――」他）。その中で本書の特色として五山の学僧の功績を明らかにしたこととと、桂庵とその学統を顕彰している点をあげ、前半部分が日本儒学史、後半部分が薩摩の儒学史関連部分、とくに桂庵の業績が中心となっているとしている。先年『伊地知季安著作史料集七』の中でその前稿本ともとれる「西藩儒林伝」と「僧桂菴玄樹和尚伝」をとりあげ、解題で本書との関連についてもふれているが、今回は今少し具体的に知り得たことを述べて参考に供したい。

鹿児島県立図書館所蔵「薩藩学事二」（表記はないが、福島虎嘯輯録、『鹿児島県史料集四一』所収）中に「西藩宋学伝統系図」（伊地知季安編）があり、同書は西村天囚が「漢学紀源編著の準備として作りしもの」とした文政十年十二月草稿本と同種の写本によったものと考えられ、注目すべきはそれに付載して「桂菴第二十八」として「漢学紀源」中の桂庵の項の先稿とみられるものが掲出されていることである。内容は本書の桂庵の履歴を記述した前半部分と比較してみると、大筋においては相違はないが、細部ではかなりの違いが認められる。主たる点を列挙すれば、(1)本文での桂庵の呼称が「樹」から「師」となる。(2)先師惟肖の他に惟正・景召が加わる。(3)伊地知板大学・延徳板大学の註記の詳細化。(4)桂菴和尚家法倭点の説明の付記。(5)桂樹院の寺禄付与記事の追加。(6)「倪士毅四書輯記」・「永楽所進大全」のマスターを入明後から入明前としたこと。(7)桂菴著書目録に新知見の

「島陰（漁唱）文集」を追加等々で、本文註記等からそれぞれの成文化は天保十年、天保十二年であることがわかる。そして二年程の短期間でこれ程の変更がなされたのは季安の不断の新史料発見への努力があったからであろう。即ちさきの桂庵先稿文のあとに附属して次の季安の伊集院兼誼宛書状の写がある。

「別紙弐冊　古書また〳〵見出し、此中紀源ニ載置候文義之事実少々違候哉考有之候間、改正いたし奉備高覽候付、可成今ニ候得共、幸未被成□（ママ）筈と奉存、尊丈様迄如此仕候間、此中拙文ハ被捨置、此傳ニ而御取譔被下候やふ重畳乍憚御願□□□（ママ）左候而、此冊ハ紀源之末ニ御綴せ御返シ可被下候様奉頼候事、

兼誼先生　　季安」

漢学紀源中再考

釋桂菴傳　稿

そしてこれと関係する季安の書状写が本書巻二（中）東大三冊本㈢と思われる。内容は、享保七年の桂庵石塔再建に木村探元等と参加していた四本正蔵の子孫家に、先年造士館所蔵本を借入書写して「漢学紀源」を編述した際見当たらなかった「島陰文集」写が遺存していたのを借写、新知見を得たというのである。一は文集の明応七年の跋、一は文明九年の「衆雲居士四書后」の桂庵の跋で、それらによって改正の必要を感じ、兼誼宛に届け出ているのである。恐らく天保十二年の「漢学紀源」中の桂庵伝再訂本提出前のものと思われる。

本書の巻五は附録とされるもので、「漢学紀源」の本体ではなく、季安が桂庵玄樹顕彰碑の造立を思い立ち、史料を整え、縁故を辿って昌平黌儒官佐藤一斎に「漢学紀源」を提示して碑銘の作成を依頼、その目的を達成する迄の経緯を物語る関係者間の書状等を自ら集成したもので、後年本書の附録史料として一括保存されたものの写であろう。そしてそれらから「延徳板大学」・「桂菴画像」・「桂菴和尚家法倭点」等に加えて、「漢学紀源」の特に「桂菴第二十八」の碑銘作成に果たした役割の大きさに気づかされるのである（東英寿『中国文学論集第二

十五号』「伊地知季安と佐藤一斎―桂菴禅師碑銘作成過程に着目して―」・『汲古三二』「『延徳板大学』について」参照)。そしてその記述の改訂が碑銘の改訂に連動していることが如実に示されるのである。また天保九年、「延徳板大学」の発見が建碑行動の契機となったことについては、次の季安より新納時升宛の長文の書状からもうかがえよう。

東京大学史料編纂所所蔵島津家文書(中箱六十七番、虎嘯輯録　墓碑誌銘部)「伊地知板大學考之儀ニ付愚按并四書新註和点本従御國致流布之次第愚考」中に

「(上略)

此七年計已前段々相糺、儒林之大抵六七冊愚按書述置、且傳統之系圖茂粗仕立置、皆共いまた誠之反古ニて引證可用古書可成渉獵仕候ニ付、伊地知大学之儀茂可成古本直ニ拜見仕度、此中為願上事ニ御座候得共、被為失候との御事誠ニ残多奉存候間、今一往乍憚御尋探之事迄不苦於被思召者御願貰上度、就夫先年綴集六七冊之内より別冊大学考ニ引合候事故、荒増胸ニ浮ひ候成逐一見合茂不仕、任筆書ちらし、不思も長文相成、不束之至御座候得共、乍序右愚見之程も預御正度如此御座候、(下略)

八月十三日　　伊地知小十郎

新納矢太右衛門様

右天保四年已草稿也、」

とある。季安は文政十年頃には「西藩儒林伝」や「宋学伝統系図」を大体まとめていたがなお不十分で、特に証拠史料として重要な「文明板(伊地知板)大学」が一時所在が判明し乍らその後不明となっていることに執心、新納時升に造士館での探索を要請、桂庵の大学章句刊行の意義をあらためて強調しているのである。なお前述し

た本書玉里文庫本巻四の㈡季安の標註が天保四年であることから、本書当初の成立をこの頃とする説もあり、参考となろう。「西藩儒林伝」桂庵伝の内容と本書東大五冊本巻一㈣「桂庵第二十八」の記述がほとんど一致し、後者に惟肖・景徐を惟正・景召の同一人に非ずと註記を付してあるのは、その後の改訂の推移を物語っているものと理解できよう。そして天保九年、季安の子季通により伊地知板の再版延徳板大学が発見されたことで、季安は意を強くして、天保十一年秋行動を開始したのであろう。本書巻一（上）㈡・㈢の季安書状も本書と桂庵顕彰碑銘作成との密接な関係を明示している。一斎は諸史料の提示を受けてはじめて桂庵の存在とその果たした役割の大きさを認識し、「延徳板大学」と「漢学紀源」の借写を申し出、跋文及び碑銘の作成を承諾したのである。「漢学紀源」については季安も度々述べている如く、応急に作成した四冊本で、あくまで未完本であり、尓後訂正増補すべきものとしている。しかし一斎の評価は高く、その中の桂庵伝を基に、天保十三年秋に草稿が季安のもとに送付されてきたのである。季安は劇職の中での一斎の対応に感謝しつつも、桂庵没年の訂正方を即時申し入れ、他に年時、場所の明記方や、前述したその後発見した史料による桂庵伝の訂正と併せて非礼にならぬよう配慮しつつ、慎重に改稿方を造士館教授市来政正や畏友新納時升と協議の上申し出、ほぼ提案通り受け入れられているのである。ただ字数の制約で桂庵以後の学統、月渚・一翁・文之・如竹・喜春についての文言挿入の要請は撤回しているが、季安の願望はその案文からも察知できよう。鹿大玉里文庫には別冊として「桂菴禅師碑銘漢学紀原附録」（後掲）があり、その碑銘は本書草案と改稿案の中間で、改稿試案の一とみてよい。なお同書には関連して享保七年造立の桂庵墓臨写や、桂庵と同名で混同される「霊雲五世桂菴廣禅師傳」等が収録されている。碑銘完成後建碑に至る迄の詳細な経緯は明らかでないが、つとに季安と一斎の連絡の仲介をつとめた伊集院兼誼や松山隆阿弥の懸念通り、琉球の能書家鄭元偉による執筆も終わり、墓地での石彫りも半ば過ぎた時点で差止めとなっている（巻五㈢「桂庵和尚碑石建方之伺並闕里楷抔之一件」（季安の三原藤五郎宛書状）は前出東京大学

史料編纂所所蔵島津家文書中にも載録されており、それによると宛書三原藤五郎の後の季安の二白とある文の前に張紙として「本文板之分□大概文字彫仕舞罷在候間、不苦御都合ニも御座候ハ、石摺ニシテ差上可申、何分ニ茂恐入□(全)文之摺方ハ未仕候、可成者御窺被成候事相叶候ヘハ、別而難有仕合御座候」の記述のあることに気づいたので付記しておく。恐らく同史料も伊地知家所蔵史料を書写したものと思われる)。理由についての明記はないが、「伊地知季安日記秘要」(『伊地知季安著作史料集八』)弘化四年二月十八日条には、世子斉彬の語として「御前江伊集院織衛伺やう不宜候而不都合為相成由」とある(文久元年季安編述の「順聖公年譜」(『斉彬公史料第四巻』所収)にも同様記述あり)が、当時季安は在野の学者であり乍ら評価も高く、天保十二年から十三年にかけては担当者相良甚太夫の依頼をうけて「穆佐悟性寺義天様御石塔一件勘考書」(『伊地知季安著作史料集八』)を執筆して記録所の見解と対立しており、建碑事業については造士館・寺社奉行所その他一般の支援を受けているとはいえ、一斎と季安の関係の目立つ事柄として敬遠されたのではあるまいか。天保十四年六月の大目附による季安の著述物徴収措置も、この問題と連動しているとみてよい。その後建碑の実現がいつか明らかではないが、やがて季安の再仕官、記録奉行就任等の情況変化により記録所との対立は解消、安政三年の悟性寺久豊石塔の追認(『旧記雑録追録八』二三三号島津久宝達書)と同様、むしろそれより早く実現したものと思われる。本書では巻末に桂庵公園に現存の「桂菴禅師碑銘」を掲載して参考に供する。

なお蛇足ながら「漢学紀源」が未完本であることは次の史料からも明らかである。

東京大学史料編纂所所蔵島津家本「薩藩諸記録二」中に、季安が収集書写したとみられる島津綱貴の守役を勤めた北郷佐渡守久加等の関係史料がある。その後書に季安が田中源五左衛門に宛てた下記の内容の書状が付されており、その日付は「子二月朔日」となっている。田中源五左衛門は安政六年の鹿児島城下絵図に新屋敷居住士としてみえており、この子年は恐らく嘉永五年とみてよいであろう。この書状は、文意からみて桂庵学統の如竹、

及びその後の漢学の状況について記述すべく史料を収集書写、一部佐藤一斎にも見せたが、前述天保十四年、全著作史料提出の藩命により、中途で未完に終わった次第を記している。書状の終わりには「何之世茂佐渡殿またハ諏訪兼利・伊集院俊矩如き人物者寔ニ相少きものニ御座候半、先年漢學紀原書述候時分段々綴掛置、半途ニシテ捨置、于今遺憾御座候」とあり、付記として「日新公御以来之御学問御師匠者専桂庵傳統之御國儒ニて、　黄門様者文之、光久様者如竹、　綱久様者兼利、又ハ竹内助市なと申茂、皆本ハ如竹より流候心述と見及候まゝ、某々相紀四五冊綴置、佐藤一斎まても被見候茂御座候へとも御用相成、半途ニシテ成就不仕候、此段ハ御他洩被下間敷候、何分ニ茂此反古ハ御火中可被下候」とある。

また本書底本の巻一（上）から巻三（下）までのうち、一・三が季安の自筆本、二が伊東祐之（「餘姚学苑」の作者）が季安の依嘱をうけ急遽書写したもので、或は前記天保十四年の差出時の際の控本作成かともみられるが明らかでない。また天保十三年、一斎から返還された四冊本は、当時「三國名勝圖會」作成中の五代直左衛門（秀堯）のもとに参考史料としてそのまま托されたとある（東英寿『鹿児島大学人文学科論集第56号』「明治期の日本儒学史研究に与えた『漢学紀源』の影響三」参照）。したがって本書が複数作成され遺存していたことがうかがえる。しかし改訂されたのは主としてその中の桂庵伝であろう。また四巻本の後半分（目次「正龍第三十七」まで次の「如竹翁傳」以降）は一斎のもとから返還された後の増補分ではあるまいか。

終わりに、巻五の末尾に付載されている「栗原氏真跡写」は元治元年来鹿した著名な有職故実家栗原信充との交流を示した小史料で、季安がまとめたものの写であろう。直接「漢学紀源」の内容とは関係ないが、季安が信充に提示した著作の中で、信充は特に同書を激賞している。生涯藩領外に出たことのなかった季安であるが、信充といい、佐藤一斎といい、中央の碩学との間でその学識を認めあっていたことが注目される。本史料は尚古集成館にも写本があり、それによって既に丹羽謙治氏が詳しく解説されていることを付記しておく（『国語国文薩

摩路第四十四号』「栗原信充来鹿資料二種――『高千穂行記』・『栗原氏真跡写』――」)。

なお本項執筆にあたっては一部上園正人氏の助力をいただいた。記して謝意を表する。

諸家調抄

東京大学史料編纂所所蔵島津家本中にあり、写本で上下二冊からなる。「上」の巻首に「此書郡山遜志之調也、末ニ伊地知季安之跋文有之」とある如く、郡山遜志の調書の写本を基に季安が加筆集成、家蔵としたものとみられる。その経緯については調書文末、季安増補調書抄の前の跋文に記述がある。郡山遜志（明和六年～天明元年）は記録奉行在任中の安永二年、藩主重豪の命をうけ、藩史「島津世家」を編述している。季安は同人の手になる小番士をはじめとする府士の家筋、進上物等に関する調書に着目。文化十四年、自身は「不暇傭工」として甥の伊勢貞顕に依頼して書写、共同で校正成稿したのである。目録はいろは順で、上巻にはい～な二五九人、下巻にはな～す二二二人、計四八一人分を掲げ、その一々について記載しているが、府士すべてを網羅したわけではないので「諸家調抄」と名付けたのであろう。季安跋文のあとに季通の筆で「以下伊地知季安増補」とあり、そこでは異色の家筋で附衆中や外城衆中から養子入りして府士となったもの、医師・包丁人・細工人等として府士になったもの等八〇余氏の調書略系をあげている。なお本項執筆後、新たに都城島津家所蔵本中に同名のほぼ同内容の写本のあるのを知り得た。その上巻の末尾には「嘉永七年甲寅四月鹿府史官伊地知季安老ヨリ致借用写之焉」として小杉丹兵衛他四名の写者の記載がある。それは恐らく底本の原本、季安らの書写本を借写したことを示すもので、目録・番号の不載、配列順の変動、収載史料の増減等、底本との相違は主としてその後の底本の成立迄の加除訂正によるものと思われる。例えば、五四伊地知伊右衛門と五五伊集院三郎の間に都城本では伊地知杢右衛門（季安の家祖系）の条が付載されているが、底本にはその記載がない等、なお検討すべき点が残されている。そのため、同箇所等主たる相違箇所については本文中にその旨注記、補筆していることをおことわりしておく。

また本文中、三五伊地知千左衛門については東京大学史料編纂所所蔵島津家本中「島津家国老并用人記」に季伴の名をあげ、寛延四年依願御免とある。同人についてかつて拙稿「伊地知季安の家系その他」（『鹿大史学二二』）では季安の義父にあてているが、年代的に相当せず、且つ記事の上からも別系（田島島津庶流）の別人とみるべきであろう。この場をかりて記して不明をお詫びしたい。

総州家御譜雑録

東京大学史料編纂所所蔵島津家本中にある。表紙に「三番箱　伊進上」とあり、明治二十三年島津家宛伊地知季通進上本であることがわかる。内表紙には季通の筆で「総州家御譜雑録」「庚戌五月稿終」とある。庚戌は嘉永三年で季安の記録奉行就任の二年前である。本文史料の大部分が季通の筆であるが、間々季安の筆も入り、後尾の部分はほとんど季安の筆とみられる。季安・季通の合作共編といってよいであろう。内容ははじめに師久以降の伊久・守久・久世・久林と続く総州家島津家嫡流の、また伊久二男久安に始まる始良・碇山氏の、また守久弟忠朝の支流系図をあげ、以下関係記録・文書を諸史料より収録列挙するが、大部分は「季安考」を含めて「旧記雑録」に採録されたものである。さらに季安の筆で久安以降近世の次右衛門久命（石原氏より養子入）に至る碇山氏系図や関係史料を掲げている。なおその中で総州家の始終を略記関説した「御当家始書」も一部掲出している。同書については、かつてこれを季安の作としたが（『鹿大史学二五』「伊地知季安関係史料」）当たらず、記録所に書写保存されていたのを季安が書写していたのであろう。総州家が奥州家と抗争、衰亡して行く中で、忠朝が応永二十八年、同家相伝の史料を奥州家に引渡した経緯については『鹿児島中世史研究会報四二』「総州家島津忠朝について二、三の覚書」で記述したが、その三子忠長（上総入道祐貞）がその後も山北一揆の大将に擁されて抗戦、陣歿した経緯については、『新編島津氏世録支流系図』「相馬氏一流」等の史料により新名一仁氏の論考がある（『九州史学一二二号』「永享・文安の薩摩国国一揆について―薩摩国山北国人の反島津闘争―」）。

他に総州家をとりあげた論考として野崎道雄氏の「島津総州家考」（『千台八号』）等があり、関説したものに、拙稿「薩摩国御家人薩摩郡成枝・成富名主について―三角（森）氏文書の紹介を中心に―」（『鹿児島大学人文学科論集』一二号）等がある。

忠元譜参證

底本は鹿児島県立図書館所蔵本。中表紙に「五代忠元譜参證　仁」とあり、「文政十一年三月新納次郎四郎久仰編撰」とある。内容は文書では永禄七年三月十三日の近衛稙家書状から天正九年九月廿六日の新納忠元書状までの十余点が収められており、他に関係系図や、本書からも引用集成したとみられる『旧記雑録』には「新納忠元譜中」とある年譜や、「新納忠元勲功記」、「上井覚兼日記」、「長谷場越前自記」等の諸記録からの関係史料が抄記採録されている。このうち忠元の年譜は主として季安の自筆とみられ、「長谷場越前自記」等諸家記録の多くは季通の自筆であるとみてよい。また本文中、安政三年の碑銘、「天正五年大口郷地頭請用日記抄」等は久仰自身の筆になるものとみられ、また新納時升調書の如く時升の手になると思われるものもみられる。前出の「勲功記」が天保十三、四年の成稿であり、他に万延元年の「大口郷神社仏閣帳抄」の存在等からみても、本書の成立は後年の万延元年以降となろう。ところがこれと同内容の写本が東京大学史料編纂所所蔵の島津家文書中にもある。それは帙入の「新納家譜」で、題目に「新納氏是久流系譜壱巻、新納忠元譜仁・義（欠）・礼・智・信（欠）参巻、新納忠元譜参證壱巻、合五冊」とあるうちの「新納忠元譜仁」がそれである。「新納氏是久流系譜」とあるのはそれ以前の代の家譜であり、巻首に「文政十一年戊子三月起艸、元祖是久、二代友義、三代忠祐、四代祐久、十七代孫新納久仰編撰」とある。これは以下の「新納忠元譜」でも同じ記載となっており、要は新納久仰が文政十一年三月から新納家譜編撰の仕事にとりかかり、その成果を時代別に披瀝する形をとっているのである。そして「是久流家譜」の末尾には「季安考」として、福島極楽寺所在の是久・友義の墓の考証記事が記されてい

ることから、久仰と親近関係にあった季安の「新納家譜」への長期に亘る浅からぬ関与がうかがえるのである。なお本書では省略したが、「新納忠元譜礼」の内容は天正十六年より文禄三年まで、「同智」の内容は文禄四年より慶長五年までとなっており、「義」に当たる天正十年より十五年迄、「信」に当たる慶長五年より十五年迄の分は欠本となっている。そして慶長十一年より忠元の歿年に当たる慶長十五年迄の分は「新納忠元譜参證」として所在しているのである。さらに同じく東京大学史料編纂所所蔵の島津家本中には本書と同内容の写本が「新納忠元譜一・二・三」としてあり、本書は一と二の前半に当たる。二の後半と三に当たる分は、前出の島津家文書所収「新納家譜」で欠けている「義」の分になるのである。そしてその「礼」に当たる分は「忠元譜記」としてあり、「智」・「信」に当たる部分は欠けており、慶長十一年より同十五年迄の「新納忠元譜参證」に当たる分は島津家本では「五代忠元譜参證仁」として所在しているのである。以上新納久仰主催の下で、長年にわたり「新納家譜」の編纂が継続していたことを知るのであるが、その編纂の実施面でとくに伊地知季安の果たした役割は大きかったものと思われる。また季安と親交の深かった新納家庶家の時升（弥太右衛門、伯剛）の支援、季安の子季通の助勢も多々あったと思われる。本巻で掲出した底本はその一部であり、とくに季安・季通の筆跡を残す草稿本、或は扣写ではあるまいか。そして家譜の編纂が長期に亘り、次々に史料の補入改編がなされたことから、その過程を物語る呼称として「参證」の題名が付されたのではあるまいか（『伊地知季安著作史料集二』「新納忠元勲功記」解題参照）。

御家古伝秘考

底本は東京大学史料編纂所所蔵島津家本、伊地知季安自筆本。他にその写本とみられる同内容の「島津古伝秘考」があり、それに季安自筆の「続世継抄」が付載されているので最初に掲出しておく。季安は嘉永五年五月斉彬により記録奉行に挙用されるが、その当初に先祖忠久の出自の解明を命じられている。斉彬はかねてより、忠

久が源頼朝庶子説をこえて皇孫であるとの説を耳にしており、その実証を篤学の評価の高い季安に期待したのである。そして季安未見の玉海（玉葉）、その他数々の秘本の写を次々に提供して史料の検索に当たらせたのである。その結果嘉永六年正月、季安は島津家家宝の刀剣伝来の経緯、古系図等による考証で、忠久は以仁王の子北陸宮ではないかと秘見を具申したのである。

秘伝島津譜図

季安最晩年の史料考証であるが、その結論は史実の解明、実証には至らなかった。既に早く朝河貫一氏の「島津忠久の生ひ立ち—低等批評の一例—」（『史苑一二—四』）にその評価が適確に記されている。ただその考証過程において頼朝庶子説の当たらないことや、忠久の生没年をほぼ確定するなど、首肯すべき提議も少なくないことにも注目すべきであろう。ただこの命題が前述の如く藩主斉彬からの提示であり、その期待に応えようとつとめたために、一つの結論を見出すべくやや強引な推論のあったことは否定できず、後年の久光や福島虎嘯らの指摘批判（東京大学史料編纂所所蔵、島津家本「秘伝島津譜図備考」）の存在も当然であろう。しかしだからといって季安の否定した頼朝庶子説に立返れとはいい得まい。本題近年の研究成果からみて感慨深いものがある（『歴史学研究四四九』井原今朝男「荘園制支配と惣地頭の役割—島津荘と惟宗忠久」、野口実『中世東国武士団の研究』「惟宗忠久をめぐって」、江平望『島津忠久とその周辺』等）。

底本は東京大学史料編纂所所蔵島津家本で、安政四年正月の序文草稿、同五月の序文初稿で季安自筆本。その後斉彬歿後、久光の指摘をうけ、万延元年に増補訂正した二稿本である。他に鹿児島大学図書館所蔵玉里文庫本にも初稿本（久光の藍字の書き込み改訂箇所あり）と二稿本の写があり、二稿本には久光の註記（批評・疑問点等二十四ヶ所）貼札が付されている。季安は「御家古伝秘考」のあと、さらに諸史料を読んで考証をすすめ、北陸宮に代えて三宮を忠久とする結論を得、斉彬の賞詞を受けた。しかしその歿後もさらに考証を重ね、増補（初

稿本では系図の記事が建久二年迄、二稿本では嘉禄三年迄と推定）した訳である。なおその後の経緯については「秘伝島津譜図綴立之来由」中の慶応三年二月廿九日付、季安より蓑田伝兵衛宛の伊地知季安覚書（『伊地知季安著作史料集八』「先年差出置候著述物就御手許御用又被下ケ置候一件書留」一〇号文書再掲）に記述があり、県立図書館本にはその後に続けて季安の書留がある。これは先に久光に提出した同書にその後新たに発見された高山寺画像等の考証を加味して最終的に書き改めた一冊を上京中の同人のもとに送付、斉彬の遺志を体して近衛家の認証を得べく奔走している季安の心情をまざまざと示しており感慨深い。

なお玉里文庫本初稿本の付属史料(八)に「汾陽嵐水書状」がある。文面から明治十年頃、かつて季安が提出した「秘伝島津譜図」のうち最後に届出た分の取扱いについて、久光の山下邸と県庁内でとりかわされた書状の扣かと推定され、この問題の決着を物語る史料とみてよいであろう。即ち季安の島津家始祖皇胤説の幕引関係史料といえよう。

また黎明館寄託玉里文書中にある季安自筆の巻本「綴立之来由」（前出同文）に接続する(一〇)「手扣之覚」は（慶応元年）九月十一日付の季安の申状で、島津家秘伝の先祖相伝の母衣の実物検分の願書であり、同じく季安の島津家先祖考証の執念をしめしたものである。関連未刊文書の一として掲出しておく（その成果は『伊地知季安著作史料集七』の「御代々様御幌輯考」にみられる）。また県立図書館本には本文のはじめに安政四年九月九日季安書として、安政二年四月以降、三宮を始祖忠久とする説を立て斉彬の賞詞を受ける迄の経緯と、山田（壮右衛門）為正の書状を交えての記述があるが、これは「伊地知季安日記秘要」と内容が重複しており、後に季通らによる後補かと思われる。次に同じく東京大学史料編纂所所蔵島津家本の「秘伝島津譜図編輯ニ付往復書類」は季安と関係者間でとりかわした「秘伝島津譜図」作成に関する書簡集で順不同であるが、そのうち(一)の（慶応元年）十月廿五日付の山田玄斎（為正）書状は「伊地知季安日記秘要」にも収載されており、斉彬が季安に立証

を命じた経緯などが記されていて興味深い（『鹿児島大学人文学科論集第18号』拙稿「伊地知季安と『秘伝島津譜図』・『花尾社伝記』・『花尾祭神輯考』―島津氏祖廟成立の経緯―」参照）。

栂ヶ尾高山寺什物等忠久公御画像紀考

季安が久光に「秘伝島津譜図」を浄書提出した文久二年の翌々年元治元年、久光は其頃高山寺住僧が持参したという始祖忠久ではないかと思われる画像写を近衛忠熙邸でみせられ、家臣井上大和らを栂尾高山寺に派し、原物を実見模写させ、帰鹿の上、季安に検分を命じている。季安は直に井上大和に面談、その所見報告書を基に考察し、これまでの研究成果を補強する有力資料として活用、早速新所見として同年十二月まとめたものがこれである。底本は東京大学史料編纂所所蔵島津家本、季安の自筆本である。

季安は忠久の七歳で仁和寺入山説を採り、仁和寺ゆかり、近衛家ゆかりの高山寺に画像のあった必然性を述べ、写本の外題の文言をとりあげ、正治二年、京より鎌倉へ下向の年の供養に維宗氏女が奉納したものと推定している。併せて京師書店で入手した文治六年の忠久曹子像も在京中の肖像かとみて、一層の探究を提言しているのである。

栂尾什宝得仏公御真像来由考

底本は東京大学史料編纂所所蔵島津家本の表紙に「慶応元年八月十二日　地取」とある季安自筆本。また他筆の写本があり、何れにも斉彬下命により前に作成した「秘伝島津譜図」の史料記事と併せ整理作文を試みたが、多忙の故不出来、汗顔の至り乍ら提出する旨の釈明の語が付されている。内容も前回のものと重複しているが、外題の説明に嫁母内侍が仁和寺の隆暁、高山寺の明恵等に忠久画像の供養を要請、忠久自ら鎌倉下向後、画像の傍に「遺愚影守護北闕」の七言一句をいれ、春日社別当石水院に奉納したのであろうと推定している。

得仏公真像及両荘来由

底本は東京大学史料編纂所所蔵島津家本、季安自筆本。稿本と扣とがあり、何れも慶応元年九月とあるのを抹消して十二月とする。扣の方には別に慶応二年丙寅の表記もよみとれる。季安は前回、前々回に続いて三度び詳細に順を追って考証を加えており、成稿に腐心していることは、稿本・扣とも随所に補筆訂正がなされ、貼紙が加えられていることからもうかがえる。成稿の日付が一旦九月としながら十二月に改め、さらに扣に慶応二年とあるのも、加除訂正の期間を示しているものと思われる。また本書では画像の外題の跋に「天保十二年辛丑十一月八日以石水院御本写之畢」と記した、写本作成者たる画人冷泉為恭の翌年再度の拝観記が引用されており、注目されよう。さらに㈥扣（慶応元年）三月廿七日の蓑田伝兵衛宛季安書状（袋とじ）で、季安は忠久の誕生年を未だに公式では治承三年としていることの非をあげ、これでは画像来由と符合せずとして、その配慮方を申し出ており、㈢稿本の同年九月六日の季安申状では、今回の考察で「秘伝」と「画像」は符合したが、従来通りの系図に固執する限り成稿し難い旨を伝えている。しかし同月十二日の蓑田伝兵衛書状ではこれを容認、浄書提出するよう伝えているのである。そして扣貼紙にはその後の本書成立に至る迄の経緯が記されている。即ち記録所書役肥田木正兵衛が浄写にかかり、十一月八日に済み、二丸御小納戸木藤角太夫迄差出、裱装まで申し付けられたところで東鑑に下司職の記事がみえ、同職については鎌倉より沙汰する職であることに気づき、またかねて従兄の本田弥九郎（親孚）より聞かされていたことを想起し、改編の必要を感じ、二男黒田弥兵衛を差遣して一旦返却を要請、認められて改訂後再提出した旨を記しているのである。なお同本については鹿大玉里文庫本中にも扣の写本（島津忠済写、久光書入）が現存している。また画像は明治三十一年九月、松方正義の斡旋により島津家に保管されていた模写本と高山寺蔵の原本が交換譲渡され、現在は尚古集成館に収蔵されている。またその経緯を記した史料に「忠久公御画像之来由」として元治元年十一月の井上大和の届書写、並びに福島巌之介（正治・虎嘯）が引取手続を宰領した旨の明治三十三年九月の箱書写が残されている（『鹿児島大学文学科論集第十四号』

拙稿「島津忠久画像由来」・『鹿児島中世史研究会報38』同「島津忠久画像補考追加史料」参照。なお「忠久公画像記」中、正治を伊地知正治としたのは福島正治の誤り）。もちろん季安も最晩年のこの考証に自身全幅の確信を抱いていたとは思われず、恐らく「他日の考正を待つ」想いがあったに違いあるまい。ただ本画像即忠久像とはいえないものの、「秘伝島津譜図」と同様、今後とも島津家始祖忠久研究上の史料的価値はゆるがないであろう。

以上これまで九巻に亘って伊地知季安生涯の著作史料の大部分を載録してきたが、なお未収となったものも一、二に止まらない。その一例として「泰清公御一世雑記」がある。同書は仁君の誉れ高い世子綱久（光久の子、綱貴の父、伊勢貞昌の曾孫）の伝記史料で、季安がその傅役・側近諏訪兼利・竹内助市（前述「漢学紀源」の項、子二月朔日季安書状、諏訪兼利については『国語鹿児島第46号』津田修造「薩摩の歌人「諏訪兼利」について―「諏訪兼利歌集」・「石馬集」の紹介―」参照）等との逸話を記した肥後平蔵（盛贇）撰「泰公遺事」他諸史料を基に編修したもので、東京大学史料編纂所所蔵島津家本「泰公遺事」の表紙には「慶應丁卯（三年）正月廿五日申上尅始筆、夜子上尅寫終、應家君之命、明日本書呈　二丸故也」と季通の自筆書入があり、季安が先に書写してあったものを久光のもとに改めて提出する際、季通が父季安の指示で急拠書写したことを示している（叙・年譜・本文、また鹿大玉里文庫本中にも久光の書写本並びに平田宗高旧蔵の増補註記入書写本あり）。そして季安の「日記秘要」慶応三年五月廿日条によれば、「従　中将公（久光）御問條被為在候砌、段々旧記等相捜し、集写、一大冊ニシテ備考と名付差上候處、今藤新左衛門（惟宏、造士館助教）江遺事之再撰被仰付拝呈候間、慈徳公（宗信）之遺事も探索之上、写集可呈旨被仰付奉拝承候」とあり、季安の編著は今藤惟宏の「泰清公遺事」の基本史料として活用されたことがわかる。明治元年公刊された同書の序文で、今藤は「伊地知季安蒐采其逸事、季安素精藩乗、乃録其所聞而上之、因特命臣惟宏更定著遺事一編」と記している。このことは季安の史料提供者としての面目を発揮した一事といえよう。慶応三年

「季安九」掲載文書内、文書・記録・記事等点数

文　書　名	文書・記事・記録数 （収載）　〈未収〉	目録上史料 総　数	掲載史料数
漢学紀源　上・中・下	21 （ 3 ）　〈 18 〉	17	17
漢学紀源　巻四	32 （ 0 ）　〈 32 〉	18	18
漢学紀源　巻五	59 （ 0 ）　〈 59 〉	36	33
諸家調抄	3 （ 0 ）　〈 3 〉	2	2
総州家御譜雑録	184 （ 146 ）　〈 38 〉	175	172
忠元譜参證	193 （ 132 ）　〈 61 〉	181	179
御家古伝秘考	27 （ 0 ）　〈 27 〉	6	6
秘伝島津譜図	28 （ 1 ）　〈 27 〉	19	18
栂ヶ尾高山寺什物等忠久公御画像紀考	11 （ 0 ）　〈 11 〉	11	11
栂尾什宝得仏公御真像来由考	2 （ 0 ）　〈 2 〉	2	2
得仏公真像及両荘来由	7 （ 2 ）　〈 5 〉	7	7

注１　収載とは「旧記雑録」収載文書を示し、未収とは、「同」未収載文書を示す。
　２　掲載史料数とは、『季安九』内で掲載した重複分を除く史料数を示す。
　３　「忠元譜参證」以外の文書の記事・記録は『季安九』内に重複注を付していないが、本表にのみ示しておく。

六月季安は病臥し、八月没している。享年八十六歳。まさに史家に徹した生涯であったといってよいであろう。

終わりに参考資料として本巻全編を通して掲載分の史料点数と文書、記事について『旧記雑録』に収載済のもの、未収載のものの点数を示しておく（表参照）。

（五味　克夫）

例言

一　本書は、「漢学紀源」「諸家調抄」「総州家御譜雑録」「忠元譜参證」「御家古伝秘考」「秘伝島津譜図」「栂ヶ尾高山寺什物等忠久公御画像紀考」「栂尾什宝得仏公御真像来由考」「得仏公真像及両荘来由」を収め、『旧記雑録拾遺　伊地知季安著作史料集九』として刊行するものである。

本書の底本とした史料名と所蔵を掲載順に示すと次の通りである。

史料名	所蔵者
漢学紀源　上・中・下	鹿児島大学附属図書館
巻四	鹿児島大学附属図書館（玉里文庫）
巻五	東京大学史料編纂所 東京大学史料編纂所
諸家調抄	東京大学史料編纂所
総州家御譜雑録	東京大学史料編纂所
忠元譜参證	鹿児島県立図書館

史料名	所蔵者
御家古伝秘考	東京大学史料編纂所
秘伝島津譜図	東京大学史料編纂所
栂ヶ尾高山寺什物等忠久公御画像紀考	東京大学史料編纂所
栂尾什宝得仏公御真像来由考	東京大学史料編纂所
得仏公真像及両荘来由	東京大学史料編纂所

一　文書・記録・記事は、原則として底本に従って掲載し、通し番号を文首に付した。重出文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文は省略した。

一　収載した文書をほかの文書や写本等によって補充または校訂する場合は、次のようにした。

ア　補充・挿入箇所は▽　△及び〈〉で示した。

イ　原文書又は旧記雑録等にない字句については、原則として該当箇所を〔　〕で囲み、その右側に典拠史料を

示した。また、漢字・かなの相違については、原則として読みが同じであれば、底本のままとした。

ウ　補充や校訂に使用した典拠史料は、次の略記号で示した。

旧記雑録　㊧

島津家文書（東京大学史料編纂所所蔵）　◎

新編島津氏世録正統系図（東京大学史料編纂所所蔵）　㊦

新編島津氏世録支流系図（東京大学史料編纂所所蔵）　㊨

漢学紀源（鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫）　㊥

漢学紀源（東京大学史料編纂所所蔵五冊本）　㊟

漢学紀源（東京大学史料編纂所所蔵三冊本）　㊤

寛永軍徴（東京大学史料編纂所所蔵）　㊩

諸家調抄（都城島津邸所蔵）　㊫

伝家亀鏡（東京大学史料編纂所所蔵）　㊪

得仏公尊像及両荘来由（東京大学史料編纂所所蔵）　㊨

得仏公真像及両荘来由（鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫）　㊥

南浦文集（鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫）　㊩

秘伝島津譜図二稿本（鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫）　㊥

エ　「漢学紀源　上中下」については、東京大学史料編纂所所蔵五冊本を主として補充・校訂を行い、さらに同所所蔵の三冊本、鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫本との相違も示した。

オ　「御家古伝秘考」については、東京大学史料編纂所所蔵「島津古伝秘考」により補充を行った。

カ　「総州家御譜雑録」六七の1号文書については、尚古集成館所蔵文書で補充・校訂した。また、尚古集成館文書に無い文字については〔　〕で該当箇所を示した。

キ　「秘伝島津譜図」については、一号文書は鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫初校本により補充・校訂し、一々典拠を示さなかった。なお玉里文庫初稿本に無い場合には〔　〕、異なる場合は〔　〕で該当箇所を示し、注を付した。また、三号文書以降は鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫二稿本で補充・校訂した。

ク　典拠史料として使用した鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫本中の補充・校訂の藍字は「　」で囲んだ。

一　刊行にあたって、文書の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア　原注や文書中の異筆・補筆は、原則として「　」（墨書）、『　』（朱書）で囲んだ。

イ　文書の年月日・差出所・宛所の位置などは、原則として底本の体裁に従った。

ウ　文書・記録・記事中には、適宜読点「、」および並列点「・」を付した。

エ　原注に移動指示がある場合は、原則として該当箇所に移動した。

オ　頭注や行間の書き込みは底本の体裁に合わせたが、長い場合は※印を該当箇所に記し、関連箇所の本文後に適宜まとめた。

一　合点は「レ」（墨書）で示した。

一　原本の摩滅虫損は、字数を推して□または[□]を以て示し、判読不能な文字については■で示した。

一　見せ消は、その文字の左側に「ミ」を付した。

一　編者の付した注は、原注と区別するために（　）で囲んだ。

一　欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一　原文中の地名・人名・官名・年号などに施されている朱引は、全て省略した。

一　原文中の送り仮名及び返り点は、伊地知季安自筆本については底本のままとし、その他は原則として省略した。

一　変体仮名は現行の平仮名に改めたが、江、茂、者、与など一部はそのまま用いた。

一　漢字は一部の異・略・俗字を除き、原則として底本の用字に従った。

一　本文中に、後に記入する目的や虫損等の理由で空けられたと考えられる箇所について、□□、□、丶丶などがあるものは、原則として底本の体裁に従った。

一　『鹿児島県史料　旧記雑録』との重複文書については文末に注を付した。なお、記事の場合には、原則として重複注は逐一付さなかったが、「忠元譜参證」は例外として記事についても重複注を付した。

一　当時一般に使用された文字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

吴（異）　早（畢）　季（年）　刁（寅）　ヱ（衛）　皈（帰）　逃（逃）　广（摩・磨）　迁（遷）

二・三（四）　穏（税）　劦（州）　哥（歌）　叀（事）　眎（視）　庙（廟）

旧記雑録拾遺伊地知季安著作史料集九　目次

解題……1
例言……18
目次……22

漢学紀源
上……一
中……一九
下……四六
巻四……六七
巻五……一〇〇
諸家調抄……一四三
総州家御譜雑録……二五一
忠元譜参證……三二七
御家古伝秘考……四三三
秘伝島津譜図……四五七
栂ヶ尾高山寺什物等忠久公御画像紀考……五三七
栂尾什宝得仏公御真像来由考……五四七

得仏公真像及両荘来由……五五七
文書目録……五七三

漢学紀源

（表紙）

漢學紀源　上

漢學紀源卷一目次

儒教第一
神誨第二
收籍第三
徵賢第四
初學第五
神性第六
貢士第七
唐學第八
建學第九
粟田第十
吉備第十一
崇聖第十二
仲満第十三
菅江第十四
菅神第十五
五經第十六
孝經第十七
論孟第十八
新註第十九
宋學第二十
崇信第二十一
義堂第二十二

漢學紀源卷一

麗藩　伊地知季安子靜撰

儒教第一

夫天之生斯民也、使其出類者擧為君師、任之先覺、布諸政教以覚後覚也、其法禁勸防、以正乎人、是之謂政、脩道明倫、以覺乎人、是之謂教、未知未能、必效諸先覚、是之謂學、所謂儒其學焉、而通三才、以道得民者之稱也、道之在天下未嘗亡也、而傳其統者、苟非其人、則不得而

與焉、其大原則出於天、具於人心、著乎事物、義・農・黄帝能知其然、継天立極、而道統基焉、自是厥後、堯・舜・禹・湯・文・武・周公纘承鑒備、郁郁乎其文焉哉、至孔夫子、遭周衰季、始不得位、聖人之道不行于世、於是夫子粹群聖之法脩為六經、以垂標準於萬世、微言大義天開日揭、其弟子冉・閔・顔・曾之徒、莫不聞而守其道者、是以自古儒者之業莫先於講究六經、孟子曰、聖人百世之師、又曰、舜人也、我亦人也、有為者皆若是、其孰人而可不學焉乎、

神誨第二

夫經籍之入　國朝也、蓋濫觴乎

神功皇后居攝之時、抑我住吉等之憫後覺、亦可謂至矣、

方

仲哀帝将伐熊襲、有託皇后而誨焉、（據古語拾遺・神功紀及継躰紀六年、物部大連麁鹿火之妻諫大連語等、）曰、熊襲不服、何憂之、有彼空國耳、西有寶國、謂之新羅、彬郁豹變、金銀殖焉、若祀吾儕、則其必自服、帝曰、望洋邈遠、安得有國、況皇祖既祀神祇、豈有遣焉乎、又託皇后曰、以余望國、天水渺茫、如霧横空、汝其王之、　帝猶不服、遂討熊襲、不克而還、明年　帝崩、

収籍第三

皇后傷　帝悼神教崩、（旧事記中賊矢、）益欲徼福、親将舟師、征伐新羅、新羅乃降、進入于郛、封重寶庫、収圖籍文書、高麗・百濟亦聞新羅降、自来降服、三韓悉平、（據神功紀、）初先帝之崩也、　皇后有遺腹子、還自新羅、生諸筑紫、是為　應神帝、　帝之幼也、皇后攝政、聖化德音、洋溢乎中國、施及三韓、百濟王肖古、（古事記作照古王、皇后紀作王肖古、或作背古王、續紀同此、欽明紀作速古王、皆應此人也、）使久氐等如卓淳求道、欲以聘　國朝、暨　皇后四十六年、遣斯摩宿禰等如卓淳、宿禰等乃聞王欲聘遣人奘王、明年、肖古王遂遣久氐等及新羅行人、始聘　國朝、（據東國通鑑、肖古王元年、當我成務帝三十七年、而此年則為八十一年、）時新羅奪百濟幣、以易其幣、四十九年、　皇后遣荒田別帥師導久氐等、往會肖古王及王子貴首於卓淳、以伐新羅、（亦神功紀、）據是考之、海西書籍之入　國朝、蓋應首乎　皇功（為后）親征新羅所収還本也、然國人未有讀之者、故詔貴首王徴有識者、（見下、）可併觀焉、一説前此

孝靈帝七十二年、秦人徐福率童男女千人、既齎三墳五典、歸化于　國朝云、按宋歐陽脩日本刀歌亦言是事（為云云、）傳聞其國居大島、土壤沃饒風俗好、其先徐福詐秦民、採藥淹

留卯童老、百工五種與之居、至今器玩皆精巧、前朝貢獻屢往徠、(為士)土人往往工詞藻、徐福行時書未焚、逸書百篇今尚存、令嚴不許傳(中國)(為国中)、舉世無人識文字、先王大典藏夷貌、蒼波浩蕩無通津、令人感激坐流涕、鏽澀短刀何足云、今按徐福齎墳典来説、蓋首于此、然我　朝史籍、無確據矣、則其所謂逸書尚存云、亦應誤　皇后所収還本等以言之也、

徵賢第四

先是　國朝自神代教人正直、其為治亦無為自然、則民只皷腹而遊、含哺而嬉、晝動夕息、渴飲饑食、未有人通書籍也、於是乎、(為以)施政教、因荒田別如師、詔百濟王搜有識者、(應神紀為十五年事、然據續紀則似年五十尚為太子時、詳辨下註)、欲使其来教皇子讀諸典籍、貴首王(續紀作貴須王、或作久素王、東國通鑑作仇首王、姓氏録作貴首王、書紀同此)、乃恭奉　詔特選於宗族、遣其孫辰孫王(據續紀、百濟王仁貞等、援家牒之語、但有原註、辰孫一名為智宗王、按津連等云、太阿郎孫智仁、據此、智宗若辰孫云、蓋皆音轉耳)、則作太郎王三世、及阿直岐、(為且)(書紀舊訓阿止岐、古事記則阿知吉師、倭讀王字亦云吉師、而辰字亦讀為止伎、旦韓用阿、或時加省、蓋非固名、據此、辰孫與直岐、似非二人、併註竢考)、偕使来朝、明年二月、荒田別等還自伐新羅、五月、千熊長彦以久氐等反自百濟、(書紀、辰孫王等從使来朝、應在此時、辰孫王祖曰貴首王、父曰辰斯王、而於枕流王為姪、(按書紀以辰斯王、為阿花王叔父、而阿花王乃枕流王之子也、據此、辰斯王為貴首王叔子、而枕流王弟明矣、旦知宗為辰斯王子、見姓氏録岡原連家傳)、故帝特遇之、一説阿直岐(為且)来、則獻周易・孝經・論語云、未知其據也、

初學第五

皇子雅(稚)郎子學於辰孫、(書紀作阿直岐、今從續紀、國史略以辰孫為王仁誤)、始讀經典、大闡儒風、因　帝問焉曰、猶在百濟有博士賢於汝乎、對曰、有王仁者、祖曰王狗、其先西漢人、出自漢高之後鸞王、至王狗徙居百濟、(据文忌寸最弟上書)、王仁為人材秀學博、非臣所及也、其明年、百濟復遣久氐等来聘、　皇后及　帝説、乃　皇后語　帝曰、實神所授豈能人力乎、復遣千熊送久氐等、以徵王仁、(為且)旦詔肖古等曰、遵神所諭、始啓海西、永以封汝、克欽鎮撫、肖古王及子貴首再拜稽首曰、何日忘恩、永稱蕃臣、無敢貳心、又誡孫枕流曰、汝鎮西蕃、勿忽怠朝貢、斯天實所使倭皇啓以賜不穀也、乃又明年遣久氐等、偕千熊来、獻刀鏡及重寶若干、蓋王仁来、亦應(為此)在時、而其所貢論語・千字文應在此重寶中也、於是雅(稚)郎子更師王仁、遂通典籍、　本朝文教于是始矣、而迨帝世二十八年高麗上表曰、高麗王教日本國皇子、讀表大怒、

召使於前、責其無禮、面裂棄却、　帝甚鍾愛焉、若非汝讀〈為之〉（為国朝）（朝廷）孰知失禮如斯乎、文教之重、人材之貴、可以知也、自是　國朝為政於天下、知莫如由乎學、愈以弘文為時急務、亦其宜哉、而今不詳王仁始授皇子以倭讀否、或註古今序、以難波津歌為王仁所賦、據此、王仁既通倭語、則創倭讀、亦似其時、但倭點法猶未肇焉、橘直幹（長門守長盛之子、為文章博士、事村上帝、為一世文士云、）賦倭歌賛王仁云、和多津見野千倍野四羅奈身古江天沾曾八嶋乃國爾布箕波都太不禮、又其圖賛曰、五彝教化将開、博士自海外来、永言於難波梅、日域文華之魁云、可併証也、（據書紀・古事記・古語拾遺・續紀・姓氏録・竟宴歌・大日本史・國史略等為文、）

按書紀　應神帝十五年八月、百濟王遣阿直岐、貢良馬二匹、阿直岐能讀經典、太子菟道雅（稚）郎子師焉、　天皇問曰、勝汝博士亦有之耶、對曰、有王仁者、是秀也、時遣荒田別等於百濟、仍徵王仁、阿直岐乃阿直岐史始祖也、十六年二月王仁来、則太子菟道雅（稚）郎子師之、習諸典籍於王仁、莫不通達、王仁乃書首等始祖也、又古事記云、百濟國主照古王、以牡馬壹疋・牝馬壹疋、付阿知吉師、以貢之、阿知吉師乃阿直岐史等祖、亦貢横刀及大鏡、又詔百濟、若有賢者貢之、故貢和邇吉師、乃以論語十巻・千字文一巻、付之貢進、和邇吉師者文首等祖、又古語拾遺云、至磐余雅（稚）櫻朝、住吉大神顕矣、征伐新羅、三韓始朝、百濟國王懇致其誠、至軽島豊明朝、貢博士王仁、是河内文首始祖也、又續紀延暦九年、百濟王仁貞津連眞道等、援國史家牒、以有表云、眞道等之先、出自百濟國貴須王、而背古王時、始聘國朝、乃　神功皇后攝政之歳也、後　應神帝命荒田別使於百濟搜有識者、國主貴須王恭奉使旨擇採宗族、遣其孫辰孫王、（一名智宗王、）随使入朝、　帝特寵之、為皇太子師、始傳書籍大闡儒風、文教之興、誠在于此、按古事記、所謂照古王即肖古王、而據書紀、則肖古王卒於　皇后五十五年、後三十年為　應神帝十五年、又貴須王乃肖古王子、而亦書紀則卒於　皇后六十四年、後二十一年為應神帝十五年、且王仁之後人文忌寸最弟等陳家所傳、亦曰、　聖朝遣使徵文人、於是久素王乃貢王仁、按久素王亦貴須王也、而貴須・肖古竝卒於　應神帝未立以前、則紀所謂十五年、恐有年誤否、續紀為貴須王時、却為誤、亦未可知、然文忌寸津連船連百濟王等家所各

傳説、竝為貴須王時、惟古事記為照古王時、雖如異傳、肖古・貴須父子也、皆竝其時則似不抵梧、本居氏亦辯之曰、書紀年月間或誤繫、如　皇后時、即　應神時、而王仁等来、應在於　皇后五十五年、肖古等未卒前矣、此説得之、據此、應神紀所謂遣荒田別召王仁、則應必皇后四十九年、遣荒田別以貴須王等師伐新羅時之誤也、故今季安參考衆説、以註于此、竢博識更有正焉爾、

神性第六

皇后屢贊曰、從神所教、始獲寶國、多貢重寶、愚謂其重寶、則莫善於典籍、（孝德紀載西海使謁唐主、多得文書・寶物而歸、帝特褒之、觀其言、文書先乎寶物、亦可以証焉、）諸冊二神出入幽顯、日月彰於洗目、浮潛海水、神祇生於滌身、孕土産嶋、而萬物生成、到今不息、神胤皇胄、詵詵繁衍乎日域諸州、皇孫降襲立統而降、一姓為君、以傳無窮、率土之濱、靡弗臣庶、君臣安分、俱保宗廟之至如是久、四海萬國所未有也、惟斯一事、性善（為美）善俗、足可以觀矣、於是乎、雖曰未學、東漢范曄遙仰我風稱君子國、唐王維稱海東諸國、日本為大服聖人之訓、有君子之風、宋太宗問僧奝然、聞一姓傳祚、臣下世官、特歎息欲傲之、不亦宜乎、夫物生焉則參神、（古事記）既莫物不賦之性、而各所稟莫靈於人、菅丞相所謂民者神明賚云、此之謂也、洞燭無朕、靡理不具、撿諸其身、則非斯文、弗能啓迪、是以住吉神等之誨　皇后、亦惟其意、蓋在欲闡斯文於我國人、以載神理、與天地長垂諸無窮、普覺開物成務之道於後覺焉而已、豈徒為殖金銀貨利（為夸于）〔以夸〕三韓也乎、傳所謂楚國無以為寶、惟善以為寶、神道亦然、善無常主、每事擇善、協于克一、本然良知、俯仰靡愧、神必祐之、國君好善、優於天下、士雖窮居、以淑其身、於人為寶、何以易之、而殖金銀貨利、不與存焉、由是觀之、住吉等之所欲可知已矣、故其重寶、吾知其（為謂）為典籍也、

貢士第七

自皇子通經後、蓋使王仁等掌東西庠、開弟子員以亦授之、（為傳）辰孫之後〈人〉、津連眞道等云、吾儕先祖委質　國朝、年代深遠、家〈文業、職掌西庠事、見續紀、又王仁墓在河内州交野郡藤枝村東北御墓谷、今稱於爾墓、見河内志、又天智帝時、僧詠自百濟歸化、於是乎、　國以文學鳴于河内、為大學頭、亦見續紀、此類尚多、可以知也、而　継躰帝時、百濟王遣文貴等、送我行人、且推轂五經博士段楊爾上庠、五年、又推轂漢高安茂、以代楊爾、或曰、此時使舶持五經書還自百濟、蓋亦言之、欽明帝世、五經博士馬丁安及僧道深等自百濟来、各教僧

俗後又應召遣五經博士王柳貴・易博士王道良・曆博士王保孫・醫博士有接(悛)陀・採藥師潘量豊、各持其卜曆等書来、代丁安等、又遣僧曇惠等九人、同代道深等、又呉人智聰齎儒釋方書明堂圖(凡百六十四卷)、及樂器等来、皆為以覺後覺也、敏達帝立、高麗上疏　帝乃聚東西諸史令讀且解、莫獨解(為之)者、惟王辰爾能(得讀之)(為讀焉)、而解其意、　帝大悦曰、勤乎懿哉、微汝孰解、特詔近侍殿中、蓋當時之俗、神化自然、質朴忠厚、具君子體、然尚操觚、多皆牆面、鮮不赧愧、於是高麗又将辱(為之)我、書疏鳥羽以上、　帝令辰爾讀、乃蒸印帛得寫解文、朝野咸服其巧智、辰爾乃辰孫王之玄孫也、由是　帝愈誡諸史、督之勤惰、令以勵學業、(書紀、續紀)、是則無佗、豫恐其臨事露耻故也、　帝又聞日羅賢而有勇、遣使召諸百濟、百濟乃擧日羅、日羅被甲乗馬、詣闕下、而跪拜曰、臣本　國朝人、父曰阿利斯登、仕于　宣化朝、為國造於火葦北、(今肥後國有葦北郡)、以靱負部隷大伴大連、奉　勅使於海外、(帝之二年、大伴金村奉詔遣其子笠手彦、帥兵往救任那、此也)、生臣百濟、今辱應召来歸待詔、(為狄)乃解甲為贄、於是　帝問政於日羅、對曰、要在養民、食足兵足、則民信服、外人亦懐、然後不朝或至興兵、盡理獻策、外士談兵、蓋首于此、後世尊奉為勝軍地蔵者亦祀之云、而　用明帝太子聖徳出、以聰敏資、好讀漢籍、習佛教於高麗僧惠慈、學外典於博士覚哿、内外通悟、特尊佛教、而點漢文始注倭訓、(卜部氏舊説云)、所謂倭點于是始云、又　推古帝時、僧觀勒自百濟来、貢暦本及天文地理書、乃詔生員各受學之、陽候史玉陳習其暦法、大友村主高聰受天文學、皆業各成、明年、太子愈好漢土之風、始制冠位、又明年、制憲法十七條、改定朝禮、(書紀)、則唐王維所謂正朔本乎夏時、衣裳同乎漢制云、(為亦)應言之也、

唐學第八

太子之憫後世、亦無所不至、雖使韓人代居博士、設科分業、以(為教)教生員、日求其材、一二韓人教之、衆倭人咻之、而鮮所得矣、遂知莫如置之(為隋)隨留學積年、乃十六年、遣學生倭直(漢脱カ)福因(見後)、奈良譯語惠明(後作惠日、疑此)、高向漢人玄理(後或作黒麿、按續紀、後漢靈帝曾孫阿智王之歸化也、請今諸國漢人此云、據此、如玄理等凡曰漢人者、皆應其後也、但加新字蓋言其歸化在近也)、新漢人大國、學問僧新漢人旻(書紀作日文、或作白文、後多作旻、蓋為二字訛)、南淵漢人請安(舒明紀書僧清安、又皇極紀書南淵先生、皆應此僧、請清有誤、未知孰是)、志賀漢人惠(為耳)隱(見後)、新漢人廣齊(後有惠齊、疑此)、等八人、往學于隋、十八年、僧曇徴等自高麗来、亦知五經者也、二十九年太子既薨、三

十一年、僧惠齊・惠光及醫惠日・福因等、駕新羅船還自唐國、（前此六年、為唐高祖武德元年、）皆報告曰、留學唐者、皆業各成、請必辟還、且修隣好、禮儀文物足有取焉、　舒明帝立、復遣三田耜及藥師惠日使於唐、唐太宗（名世民、姓李、高祖第二子、）遣高表仁送我行人、時僧靈雲・僧旻及勝鳥養等歸自學問、（四年八月、）旻等在唐二十餘年、稟氣伶利、不倦于學、富内外書以博物聞、又十一年、僧惠隱・惠雲等歸自學問、凡在唐三十餘年、又其明年、僧清安（見上、）學問生高向漢人玄理等還自學問、亦在唐三十餘年、　天智帝潛居時、及鎌子連慨然憤發、俱學周孔之教於南淵先生、（疑僧清安、）情好日蜜、事見帝紀、凡國朝史學周孔云、其有明文、蓋于是始、林氏所著稽古篇、言南淵先生事曰、文而能武、百篇奎章、惜即今亡云、亦此人也、但國史略以漢人為先生名誤也、詳見上註、

建學第九

孝德帝立、乃以僧旻與玄理為國博士、先是徵之三韓、交承教授、至　帝時、始任國人、可觀其益達材也、大化五年、　帝又詔玄理及旻、始置八省百官、而式部省則建大學寮、以玄理・旻等有才名、為大學博士、教授生徒、國朝建學、蓋于斯始也、繇是益遣僧及生員、往學於唐、白雉四年、旻卒於阿曇寺、（一説五年七月、旻傳則作六月、）其疾也、　帝親幸問焉、五年、玄理使於唐卒、亦　帝惜之、　天智帝立、詔鎌子連、與時賢人議、撰禮儀刊定律令、寔如鎌子則可謂國朝叔孫通矣、二年、僧詠自百濟歸化、而以文學鳴於河内、擢為大學頭、（見續紀神亀元年、）生員愈滋、至如　天武皇子大津、材學竝進、愛文賦詩、國朝詩賦、自皇子始、迨持統帝世、猶勸以禄、或以封戸、則四年四月、賜大學博士上村主百濟大税千束、以勸其學業云之類此也、於是乎、諸博士學官、蓋寖備焉、苟其有材、則雖自唐韓歸化焉者、必擧充官、或雖浮屠、善達科業、詔賜之姓、必授其職、世無闕官、至　文武帝大寶元年二月丁巳始行釋奠、（丁巳四日、）又　元正帝養老二年、　詔造釋奠器、　聖武帝神亀三年、玉来生於内裏、勅朝野文人各為之詩、時應制者百十二人、賜物有差、稍可以觀其多達材也、　孝謙帝天平寶字元年（八月己亥、）置大學寮田三十町、（或二十町、）供生徒用、延暦四年、菅原古人以儒知名、侍讀　桓武帝、有輔弼功、至是勅賜其子清公等四人衣糧、令勵學業、十一年、（或十七年、）詔令學漢音、十三年十一月（丙子、）詔賜大学寮越前水田百二町、號曰勸學

田、併故二百二十餘町、　平城帝大同元年、　敕諸王以下子弟十歳已上、皆入大學、分業教習、三年二月、省直講博士一員、置紀傳博士、　嵯峨帝弘仁十二年、先是文章博士為従七位官、至是二月甲申、為従五位官、　淳和帝天長元年十一月辛酉、　勅給大学寮山城地五町九段、二年五月戊辰、勅明法博士為従七位下官、四年三月甲戌、給大學寮河内荒閑地五十町、　仁明帝承和元年四月、停記(紀)傳博士、加置文章博士一員、八月、　帝釋奠文宣王於紫宸殿、自講尚書、後為恒例、嘉祥三年五月、　太皇太后崩、嘗奏請建学舎曰學官院、令橘氏子弟誦習經史、人稱其賢、比漢(為劉)氏、　光孝帝仁和元年八月釋奠、大臣公卿九拜聖像、先是輪講論・孝・五經・周禮等、是(為年)講周易、　醍醐帝延喜五年　勅忠平等、令撰定式、別立篇目、曰大學寮釋奠等式、開卷瞭然、又　村上帝康保元年、　詔以學官院為大學寮別曹、又釋奠講書、拾芥抄則輪轉七經云、孝・禮・詩・書・論・易・傳此也、

粟田第十

粟田眞人、姓粟田朝臣、歴事　文武・元明・元正三朝、大寶元年、持節使于唐、風潮暴險、不得通船、二年五月参議朝政、發船入唐、抵楚州鹽城縣、時會高宗(名治、太宗第五子、)既崩、太后武曌僭竊大位、(廢子中宗為廬陵王、)改號大周、乃賜宴於麟德殿、聘禮既竣、性素好學、其留滞也、受儒經於四明教授趙玄默、能屬文、唐人謂之曰、久聞海東有大倭國、人民豊樂、禮義敦行、今觀使人、冠進德冠、頂有華鶴四披、紫袍帛帯、威儀大淨如神、咸信所聞、莫不嘆美焉、(事見唐書、)慶雲元年七月至自唐、乃十一月、　詔賜眞人田二十町於大倭國、又賜穀千斛、皆賞使節功、二年四月為中納言、八月叙従三位、和銅元年三月遷大宰帥、靈亀六年四月轉正三位、養老三年二月甲子薨、

吉備第十一

本姓上道、名曰眞備、右衛士少尉國勝子也、靈亀二年元正帝時、従聘使往學于唐、迨　聖武帝時、愈勞博士等、勸(為学)勉學業、若敏而劇勵、或窶苦者特給服、天平七年、(或為五年、)眞備還自唐、凡留學二十年、(或十八年、)研覽經史、該涉衆技、播名於唐、與朝衡(安倍仲麿)無優劣、其歸也、獻孔聖及十哲像・唐禮百三十卷・太衍暦經一卷・大衍暦立成十二卷・樂書要録十卷・測影鐵尺一枚・銅律管一部・鐵如方響寫律管聲十二條及諸弓箭若干、　皇太子(孝謙帝)尊尚儒範、

乃従眞備受禮記及漢書、一説受十三經、而漢音則于是始云、按式釋奠、有註曰、古人云、此式多〈為用〉漢音、亦應自眞備傳也、恩寵甚渥、賜姓吉備朝臣、官歴中納言至右大臣、世謂吉備公此也、恢弘道藝、親自傳授、乃令學生四百人各従科業、習五經・三史・明法・算術・音韻・籀篆等之道、日本儒林傳則為四科、記傳・明經・明法・算術也、因〈紀〉勅置勸學田、百九十町、或給利稲以資費用、先是釋奠其儀未備、至眞備歸、細稽禮典器物、始修禮容可觀焉、式所釋奠、先聖文宣王・先師顔子二座及閔子騫・冉伯牛・仲弓・冉有・季路・宰我・子貢・子游・子夏従祀九座云、亦應眞備所齎来像也、但觀其所著私教類聚、則亦學内外教者明矣、然匪徒馳空文之屬、討夫押勝、竄道鏡〈為云〉、亦眞備之力〈為也〉云、以寶亀六年十月薨、年八十三、續紀・文粋・唐書、

崇聖第十二

聖武帝又詔式部省、蔭子等不問長幼、皆入大學、加之每聘唐、則渉學者寖益弗絶、而其〈回棹〉必購所無書、獻貯之庫、莫以不稽於正名辨物焉、孝謙帝立、勝寶四年、膳臣大丘游學于唐、入國子監、覩其門題文宣王廟、欽仰而還、寶字中、詔令天下民誦孝經、迨帝重祚、擢大丘為助教、遂有以聞、乃神護景雲二年、於國朝亦詔題聖廟、曰文宣王、倣唐追封也、然其享坐諸儒所説不同、而迨助教家守還自遣唐、宝亀六年補遣唐、習五經大義・切韻・説文等、既回補助教、講三傳之義云、據考經義及大唐行所具録、遂定南面云、據類聚國史、

仲満第十三

仲満、姓安倍氏、本名仲麿、中務大輔正五位上舩守之子也、靈亀二年　元正帝時、従遣唐使、西遊于唐、為留學生、性聰敏好讀書、玄宗愛其材、而厚遇之、於是仲麿乃易姓名曰朝衡、朝或作晁、遂仕于唐、累歴撿校、為左補闕至秘書監、與王維・李白・包佶・趙驊等友善、天平勝寶五年、當唐天寶十二年、一説為天寶十五年事、衡駕我行人藤清河之舩、将還自唐、王維・包佶之徒以詩送〈為之〉別、則王維積水不可極、包佶上才生下國、趙驊西掖承〈為休〉仕澣之詩等、應此時也、既抵明州海岸、而将上舟、惜別入夜、仰見海天、乃以國辭作三笠山月歌、譯示唐人、衆大嘆賞、既而泛海、舩遭暴颶、漂到安南、人或傳為衡沒于海、李白作詩哭之曰、日本晁卿辞帝都　征帆一片繞蓬壺　明月不歸沈碧海　白雲秋色滿蒼梧　是也、未幾衡自安南復適唐、事肅宗、世乃喜其無恙、授左散騎常侍、歴安南都護、至北海郡開國公、食邑三千戸、凡留于唐五十五年、或為〈五十五〉年、以大暦五年正月死、得壽七十九、一本七十三、或為七十云、代宗悼惜贈以潞州大都督、是歳、實我　朝寶亀元年也、至十年五月、　光仁帝聞仲麿死于

唐、而家口乏闕其葬禮、　勅賜東絁一百匹・白綿三十屯、當時入唐勤學業者、特為不少、而其擅名海西、則吉備・朝衡二人云、今按古之遣生學唐、蓋不外於博達其材以從國政而已矣、然如仲麿、却失節操、遂仕于唐、至拜顕職、雖載唐書耀名千歳、不可採列諸國儒傳、但據　帝追賜賻葬之、被悼乎唐至如彼、亦其實出於忠籌、可以知也、況使外人永知　國朝不乏文人、故採載之、亦愉快哉、

菅江第十四

迨　嵯峨帝時、菅原清公・清原眞人(㊟「眞人恐夏野訛」)・南淵永河・朝野鹿取・小野岑守・菅原清友等以儒学聞、清公有子曰是善、能紹家業侍讀　清和帝、講孝經・論語・經史等、官至参議補翼政教、又工文藻、　帝特寵遇、嘗奉諭撰文德實録十卷、(都良香亦與焉)、自撰東宮切韻二十卷・銀牓輸(翰)律十卷・集韻律詩十卷・會分類集七十卷・家集十卷、(以元慶四年八月晦日薨)、當此之時、大江音人亦以博學洽聞振名於世、嘗及是善奉勅撰定貞觀格式、如其序及表文、皆出於音人手、所著有群籍要覽四十卷・弘帝範三卷、而與是善齊名一時、又村上帝時、大江朝綱・菅原文時等亦以儒學振名于世、帝使二人各擇白集壓卷詩一首、別封以上、　帝啓緘、則同採送蕭處士遊黔南之作、　帝特嘆曰、卿等識鑒何乃符合、朝綱退語人曰、後来應必以吾與菅稱為一雙、到于今世人往往竝稱菅江、自斯始云、

菅神第十五

醍醐帝時、則菅丞相出、乃是善之子、諱曰道眞、以睿知粹朗之資、生於文運勃興之世、就都良香學、良香奇其聰敏、耻為之師、業日益進、工於辭藻、聲聞超父祖、寛平四年、奉　勅撰類聚國史、昌泰二年陞右大臣、時　帝富春秋(十四歳)、　上皇(宇多帝)勅右大臣(高行)及左大臣藤時平、輔佐帝、攝萬萬機、以道得君至如是、則　國朝自古所未之有也、惜哉、未幾為時平所讒、四年正月、左遷大宰權帥、法皇聞之、遽往欲救、夜至宮門、時平等令闔勿内、故法皇亦不得見　帝解冤救之、嘆息而還、初　帝踐祚、入覲　上皇於朱雀院、　上皇曰、右府歯德、為海内所景仰、宜委任之、因諭道眞、亦以此旨、道眞固辞而退、時平聞之、深嫉才能、又　仁明皇子源光時居大納言、亦耻己官在道眞下、時平與之計議遂遂搆成之(㊟「遂衍一字」)、道眞赴謫、未幾薨、萬民失望、嗚呼功業雖未及成、然到今尚忠貫日月、德輝海内、誠　國朝之儒道、於斯為盛、自是而後、　帝王世

崇儒術、菅江之族、亦世不乏材、多為祭酒、掌東西庠、在大學寮、學士文人、問道於二門、莫不知崇周孔道、而講習五經、然至其所授、則皆漢唐古註、而非宋儒新註明矣、凡菅氏所世著書、菅家集六卷清公著・菅相公集十卷是善著・菅家文草十二卷道眞著通計二十八卷、曰菅家後集、或曰獻家集状云、

五經第十六

夫五經書、據五經博士段楊爾自百濟推轂于　継躰帝時、則楊爾所齎貢之書云、前此距載六百四十、漢武帝建元五年、置五經博士、迨肅宗時、詔丁鴻與賈逵、論定五經同異、則於百濟倣置博士、亦應必在其後而有以齎焉、爾後相継、五經博士馬丁安・王柳貴、易博士王道良等、来於欽明朝、皆見帝紀、按初學記、所謂五經、秦以前、則以易・書・詩・禮・樂・春秋為六經、至秦燔書、樂經則亡、以易・詩・書・禮・春秋為五經云、暨唐太宗時、嘆五經傳習寖訛、詔顔師古、于秘書省、考定頒於天下、學者頼焉、後百卅年降代宗世、我朝寶亀六年、　光仁帝遣伊豫郡家守使于唐、家守留唐習五經大義・切韻・説文等、回任直講、尋補助教類聚國史、今按家守所習、則依顔定本可推知也、後餘三百、至　圓融帝永觀二年、僧奝然浮海至宋、時宋太宗雍熙元年也、書對太宗、國中有五經書、得自中國云、亦應顔定本也、而釋日本記(紀)以禮・樂・論・孝・書為五經云、▽(爲)未知何據拾芥抄則(玉吟)以詩・書・礼・易・左傳為五經△京極黄門未来記抄及僧桂菴家法和點明應十年著述、至元和十年刊行世、亦如之、易更三聖伏羲・文王・孔子成乎周矣、故謂周易、孔門商(商)瞿受之、至漢四分施・孟・梁・京、而其流有馬融・荀爽・鄭玄・劉表・虞翻・陸(續カ)續・王弼之屬、據易博士王道良来於　欽明朝、則道良所齎易、亦依漢儒註、可概知也、詩有四詩齊・魯・韓・毛、而齊・魯・韓三詩、亡于晉・隋間、毛傳獨行、孔門子夏以授申公、申公以授魯國毛亨、至亨為傳、以授毛萇、故謂毛詩、賈逵・鄭衆・馬融・鄭玄之屬、皆受焉、尚書及禮記、漢武帝末、魯恭王得之孔壁、皆蝌斗書、人無識焉、孔安國得而獻之、乃從伏生論古文誼、見孝經序、近嘉慶中、浙江督學阮元駁安國傳、古文孝經、為後人所偽作、詳見下篇、為尚書傳、賈逵・馬融・鄭玄等為之訓傳、禮記有三家戴德・戴聖・慶普、皆受后倉、倉受之孟卿、卿受之蕭奮、奮受之魯高堂生、而二戴所傳儀禮也、於其中戴德所傳八十五篇為大戴禮、戴聖所傳四十九篇為今禮記、漢末鄭玄好小戴記、為

之註、通儀禮周官為三禮云、春秋魯史、孔子所脩、而其傳則左丘明為演口授、故謂左傳、杜預註焉、按尺素往来、（一條兼良所著）於本邦則以周易・尚書・毛詩・周禮・儀禮・（禮記）・春秋・論語・孝經・孟子・爾雅為全經、併之老子・莊子・荀子・楊子・文中子・列子・管子・淮南子等、清中業儒者、世傳師説、入備侍讀、（承和十四年、春澄善繩授仁明帝莊子之類是也、）如其傳及註疏正義、則前後漢・晉・唐等所註釋本、自古受焉、而於五經則左傳依杜預註、禮記依鄭玄註、尚書依孔安國傳、周詩依毛亨傳、周易依王弼註、（萬子）行乎世云、僧桂菴家法和點所謂五經古註、亦皆是也、於其中周易・尚書・毛詩・禮記・春秋・孝經・論語・孟子之古本尚存、藏足利學、山井鼎等校閲諸本詳記異同、曰七經孟子考文、（荻生北溪）物道觀為之補遺、（荻生徂徠）物茂卿序焉、稱唐以前王・段・吉備諸氏所齎来古博士之書、刊行于世凡二百卷、近皆往清至嘉慶中、浙江督學阮元等見而信之、略學所證為誠古本、可供采擇者、竟刊小板、行于彼國云、茂卿所謂王即王仁、段即段楊爾、竝百濟博士、吉備（上恐下）即上道眞備、皆見前篇、彼嘉慶始、則我　後桃園帝寛政八九年也、

孝經第十七

桂菴所謂五經亦同拾芥抄等、但併孝經為六經云、按　清和帝後、博士等授　太子書自孝經始、（且）令國民讀、亦必取焉、見孝謙紀、而其註則專依孔傳、即孔安國所為訓傳、而孔序有浅學者以當六經之語、又我貞觀二年、制有為六籍根源之文、由是　本邦自古併孝經於五經、以為六經、所謂六經不與彼同、蓋首孔序可併知焉、故明應中、桂菴猶筆之書、亦為所久承説者明矣、按孝經有二本、漢建元初、河間王所得而獻、凡十八章者、謂之今文、顔芝・顔貞・張禹等相承宗之、劉向亦從顔氏、而鄭玄為之註云、其（一）漢武末年、魯恭王所得孔壁二十二章者、謂之古文、魯三老孔子惠、抱詣京師、獻之天子、亦蝌斗書也、乃孔安國等校於今文、以定古文、遂從隷字、寫于竹簡、為之訓傳、自是孔・鄭二註、皆行于世、而於西土、孔註本既亡於梁亂、如世所傳、出自劉炫、炫為隋人、特好孔學、故安國之註、劉炫之義、盛行於世、而至唐開元十年、玄宗（齋然傳為唐越王、大宰序為唐明皇、）愍二註紛薈艱乎誦習、親註今文、詔元澹作新疏三卷、（司馬貞浅学阿世、妄黜闕門章、）由是御註本獨行于世、孔・鄭二註並廢於彼久矣、然未廢前皆入　本邦、而於　本邦世博士等教授生徒、亦惟取二註、以迄　清和帝時、貞觀

二年十月壬辰下令學官、以御註本(萬授)其生徒、然若勤博、猶講孔註、亦聽兼涉、據是觀之、本邦自古孔・鄭御三本、皆並行者明矣、是年二月、大學博士春日雄継授　帝御注孝經、故有此制、後餘百廿年、迨　圓融帝永觀元年、僧奝然入海適宋、獻宋太宗唐越王孝經新義一卷、事見僧傳、又日本僧奝然以鄭註来、見元人志、而後朱子八歳讀孝經、題八字曰、若不如此便不成人、(萬後)〔既長、〕據古文分定經傳、僅為刊誤、未及訓解、爾後歴載餘四五百、明暦二年、山崎闇齋為之外傳、述朱子之意云、(萬又)〔其後〕信陽大宰德夫名純、得孔傳古文者、屢勤挍讐、以成定本、享保十六年刊行于世、其孔傳亦指貞觀制為孔註者、可併証也、但徳夫序云、古書之亡於彼而今存我邦者頗多、宋歐陽子嘗作詩稱逸書百篇、今尚存、昔奝然適宋獻鄭注孝經一本於太宗、司馬君實等得之大喜云、按唐帝取孔・鄭二註以註今文、且奝然獻宋本亦如擧右、則此云鄭註、即為御注本明矣、又(萬自享保)〔享保後〕降二十年、至寶暦、初讃州良野伯耕名芸之、号華陰、得奝然遺本於南都、挍定刊之、則亦鄭注今文孝經云、據是考之、鄭康成註今文者、為有確據矣、雖然大宰所刊行本、既已往清、乾隆四十一年刻於彼國、後廿二年迨嘉慶二年、浙江督學阮元等挍訂刊行日本山井鼎七經孟子考文・物道觀補遺、於両浙皆莫不信、茂卿等稱、唐以前古籍多存於今矣、而惟孝經則據偽孔安國本、為無足取、且駁偽孔序曰、其自稱従伏生論古文尚書、稽諸史記安國早卒、計安國當生于文帝末年、卒于武帝(注太)大初以前、安能逮事伏生、又其尚書序及見巫蠱云、両無足據矣、餘皆為古本云、今季安按、若其杲非史記稱安國早卒有誤焉、而據孔傳本出自隋劉炫云、則阮元所謂偽孔安國、疑隋劉炫所偽作、以行(萬于)乎世也、當是之時、　本邦學生福因・玄理等、首學隋者七八人、而福因等回、方唐武徳元年、則應必彼等因盛行本(萬講)所購回之古書也、故自唐始行于　本邦、可以知也、嘉慶二年、當我　朝寛政九年、實近代説也、書竢博識耳、

論孟第十八

論語三本、曰齊論、(二十五篇、有問王知道二篇、)曰魯論、(二十篇、)曰古論、(二十一篇、分堯曰子張問為二篇、)而古論亦出孔壁中、孔安國為之訓解、漢張禹受魯論于夏侯建、又従王吉受齊論、擇善而従、曰張(侯)論、漢末鄭玄以此為本、参考齊・古而為之注、魏何晏又為集解、為世所重、事見皇疏、而王仁之来也、獻論語十卷・千字文一卷、亦見國史、今稽年世、當西晉時、則王

仁論語、應必集解也、而桂菴所謂論語古註亦此也、又降梁世、皇侃所為義疏亦入　國朝、古本尚存、近寛延中、根本伯修（名遜志、稱八右衛門）得之足利學、校正刊行于世、服南郭序焉、稱海外後世蓋所不傳、近嘉慶中、浙江督学阮元見日本板信之、洵為六朝眞本云、可併証也、千字文、晉鍾繇所造、則王仁所貢、亦應此也、而於原本中濕雨久不次得、至梁武時、得復舊韻、梁李邏註（爲旦）旦序云、王仁齎来、非其本明矣、孟子前史列儒家、趙岐・陸善經為之註、張鎰・丁公著為之音釋、而至宋世始列于經、桂菴所謂孟子古註、則趙岐註也、亦清人阮元等見日本板、信其章指勝俗本邵武義疏云、皆足証其為古本焉、學庸二書、舊入漢載聖所輯禮記四十九篇之中、而以鄭注行、迨宋二程氏表章之、特為所尊云、語在下篇、蓋　國朝皇子之好學也、莫如聖德太子、太子聰慧、夙雖習佛教於僧惠慈、學外典於博士覺哿、時猶當隋、則覺哿所授經典、皆漢儒古註、而於聖道未造蘊奥、妄穿鑿訓詁也已、於是乎、太子取信、亦素外典之則、不有如其尊佛之至淫溺焉也、其為外典稽諸經傳、如明德語、多為聖人之道德、光輝發越、以施乎物者、因漢儒亦惟説聖人之用、而其外之故也、至朱子説明德、則為人之所得乎天、而虛靈不昧、以具衆理、而應萬事者、是説聖人之體而為内也矣、若其幸而使朱子生於太子前、以先入其説於　國朝、則覺哿所授、亦應以新註教、太子必闡明斯道、嗚呼不幸而使太子生於朱子前、先受古註、故至使太子之靈利、惟佛是尊、遂如儒籍、妄稱外典、不亦甚遺憾乎、

新註第十九

夫新註者、孔子既沒、三千之徒、曾氏獨得其宗、以傳子思、子思筆諸中庸、精微益明、傳之孟軻、軻愈擴充、述乎七篇、軻之死、而其傳泯焉、遺經空存千五百年、迨至于宋、天開斯文、濂洛関陜鉅儒輩出、周子為學不由師傳、黙契道體、建圖著書、發明幽頤、有以接乎孟氏、二程續承表章學庸經傳、粲然蘊微復彰、以至朱子、朱子之學居敬（七分）窮理（三分）、博探經史、歛華就實尚粹、厥淵源闡而大之、道統復續乃因程子所定章句學庸、詳（爲之審著）序、以弘于世、實宋孝宗淳熙十六年、而於我　朝則　後鳥羽帝文治五年、僧榮西遊宋之歳也、朱子又嘗集註論孟、教次讀焉、併稱四書、迨其門人劉爚居國子司業、遂奏寧宗、嘉定四年刊（爲之）諸大學、自是四書大行于世、為後學所宗尊焉、今季安按、

當時　本邦有僧名俊芿者、字曰我禪、俗姓藤氏、肥後鮑田郡人、建久十年浮海遊宋、明年至四明、（為寶）亦寧宗慶元六年、而朱子卒之歳也、居十二年、嗣法北峯、士庶崇尊至畫其像、乞瑞律師為之賛辭、以納祖堂、而其歸則多購儒書二百五十（六）回于我　朝、乃　順徳帝建暦元年、而寧宗嘉定四年、（玉ナシ）劉爚刊行四書之歳也、（俊芿之歸也、購律宗經書三百二十七卷・天台章疏七百十六卷・華厳章疏百七十五卷・雑書四百六十三卷、回于本邦見僧傳）（為齋）與上儒書通計二千百三卷、據是觀之、四書之類入　本邦、蓋應始乎俊芿所購回之儒書也、書竢博識爾、

宋學第二十

本邦緇徒之學宋也、道元・聖一・大明・大應・月林等相継遊宋、道隆・普寧・正念等歸化自宋、逮至元世、祖元・一山・子曇等歸化自元、皆宋儒説盛行于世之後也、而於其中擧概略、則祖元字子元、俗姓許氏、故宋會稽鄞人、七歳入小學、沈鷲寡言、年十三祝髪為僧、道徳益隆、四方傾企慕向者日益衆、而宋亡居天童、我　朝弘安二年、北條時宗遣使招高僧、明州太守遣元充之、四年来見時宗、乃拓圓覺寺居焉、年六十一逝、（為明當作元）明編修官揭傒斯為之塔銘、其文曰、余聞、西域諸國、去中土至遐遠、然車馬可計日而至、而其人不知有孔氏者、東南諸國邈在海中、而皆言孔氏、蓋去中土近、人居巽離文明之方、然尊信佛法與西域同、以海路不能限之耳、佛光（祖元号也）起乎會稽、赴平氏招、日本地近、又適其時、嗚呼佛光亦忠孝人哉、其銘亦云、邈矣前聖、萬化之宗、孔釋雖異、忠孝則同、孰知我元參天配地、孔釋並隆無遠不至、據此、祖元匪啻釋教、兼精聖道、以唱宋學於　本邦、亦足概証焉、一山字一寧、俗姓胡氏、（為亦）故宋台州人、齠齡就學以英敏稱、後入浮屠、正安元年、（或為三年）、逼乎使命来朝于　本邦、遂主建長、法規濟濟、群衲鑽仰、就中錬虎関等、詢儒釋書、通達古今云、朱子門人有黄勉齋、嘗讃（師）（為朱子）徳、海外夷虜亦慕其道、竊問其起居、家蓄其書、私淑諸人者、不可勝數、或逮没後亦傳其書、信其道者益多云、今按歐陽脩日本刀歌、（渠（為呼吾本邦）呼　本邦亦）為夷貌、據是觀之、勉齋所謂海外夷虜、亦蓄其書、或傒斯所謂東南諸國皆言孔氏、孔釋並隆無遠不至云之類、蓋皆讃祖元赴日本招、或聞俊芿等多購儒書回于日本以言之、可併知焉、

崇信第二十一

一山之来　本邦也、錬虎關年二十二、自幼好讀書、穎悟超倫、日記千百言、聖教釋録、諸史百家、神紀雜編、靡

弗獵記、屢就一山、古今儒釋、紬繹審詢、妙達性理、一峰跋句、聲聞寰中、蓋於　本邦聞宋以後駁宗程朱者、應首乎斯也、一日一山因錬多識、問　國朝名僧履歴、錬多弗記、一山乃曰、子渉漢竺博辯章然、而矇國故、却澀酬對何哉、錬慙矣、於是博稽史籍、著書三十卷、元亨二年表呈　帝闕、所謂元亨釋書此也、則其文曰、仲尼沒而千有餘歳、只周濂溪獨擅興継之美矣、當是之時、有伊勢度會人日家行者、元應二年、撰類聚神祇本源、采通書語（濂溪所著）、又一條禅閣（兼良公）所著尺素往来、述其沿革云、清中二家、世業儒者、所自古受經子註疏、皆依前後漢・晉・唐之説、追獨清軒健叟（一名洗心子、号玄恵）、出、始崇濂洛之風、信程朱説、開講於　朝廷、（天和三年、長尾某（所）梓行、羅山訓點四書、（而有跋文、亦言是事曰、）本朝釋元江侍講朱註於　御筵、爾来（為尾、亦）四海翕然知祖鑒之云、▽（為）未詳何帝按△至若史漢三國晉書十七代元江（即僧）玄恵之説、▽（為）註此埃考△（為疑）史唐書之類、南式菅江皆従古註、亦至健叟、則始讀資治通鑑・宋朝通鑑等、以授其徒弟、獨北畠準后親房得其蘊奥云、山崎闇齋駁之曰、朱書之来於　本朝凡數百年、玄恵始以為正、而未免佛、藤太閤亦以謂、程朱新釋為肝心、而猶惑乎佛、遂不聞實尊信之者云、玄恵即獨清軒、太閤即一條禅閣、時未闡耳、雖然親房特欽朱子之學風、讀四書五經・宋朝通鑑等、當時博識無比肩者、偕楠正成等事南帝於吉野、為柱石臣、著述尤多、見親房傳、（高僧傳・尺素往来・南山巡狩録・隣交徵書）、而其元元集則引大極圖、述神道秘蘊云、凡本邦取宋説之徵乎古書者、大抵此類也、今按年世、則師錬年六十九、逝于貞和二年、健叟化于觀應元年、親房六十七薨於正平十四年、皆竝其時、俱逮宋僧祖元・一山等時者明矣、據此、宋書知彼等所齎来之書也、而其講之亦應在彼等、故師錬・健叟等得聞、而讀之自是漸闢、於紳縉則准后親房、於武弁楠正成・今川了俊、於沙門空華・岐陽・一慶・惟肖之屬、稍至皆知讀四書五經、亦可觀焉、匪徒知之、如楠正成偕親房等、慷慨奮義、殺身勤王、其将死也、貽子訣書曰、死期迫矣、欲視汝成抱義所重、更難亦遁、戒汝勵學、以察吾志、今愚竊謂、其知義所重、自非宋學、恐未得言、以是觀之、雖未聞世謂楠氏學、吾必謂之學焉、盛哉、朱子海外益信、至以有爾、實因人性各所固有感、其説理義於自然故也、今尋厥源、多由緇徒往来西土、以傳其書矣、然則雖僧其與焉者不可不載、故采録爾、

義堂第二十二

義堂、名周信、號空華道人、俗姓平氏、土州長岡(高)人、母藤氏、禱五臺山、夢白氣入懐而任、踰一朞生于正中二年、天資豪爽、識超群童、年十四上睿峰、登壇受戒、稟蜜法於道圓、魯誥竺墳、泛覽無遺、師事夢窻於洛臨川、遂契玄旨、夢窻既滅、依龍山於建仁、靈利(利カ)眞參聲聞華夷、應安四年、上杉氏刱報恩寺於相州鎌倉、招為主僧、居三十餘年、宗趣贍博有照人鑒、四方雲衲、為之所擧主列刹者、皆得其人云、堂又構室、名曰空華、永和二年、明僧宗泐為之歌焉、康暦元年、源相義滿召董建仁、其入之也、台旆飜山、冠纓緇衲、塡衍堂廊、永徳元年唐暦三年二月改元、九月、源相令儒学徒講孟子、書疑義或異、二十二日堂謁源相、源相語及前日事、堂廼對曰、近世儒書有註新舊、所見各異、而其新義、則出於程朱、凡宋儒皆參吾禪宗、發明心地、故與訓詁迥然別矣、因勸源相以學問焉、夫學問則聞見日博、每臨政事、如指諸掌、世人雖各自具明徳、未有不學而得道者也、二十五日、堂詣二條準后、準后敢問於新舊、若決擇之孰為優乎、對曰、漢唐儒者、只拘章句也已、至宋儒則洞達性理、故所釋説太高矣、是皆參吾禪故也、見其所著日用工夫集及伊藤長胤所著盍簪餘録、合為文、按其所謂近世蓋指師錬・健叟・親房等時、是歳堂年五十七、而其青年二十二、則師錬歿于貞和二年、又二十六則健叟逝于觀應元年、又三十五則親房薨于正平十四年、可併觀也、故堂亦與焉、至徳三年陞南禪寺、海内黿衲争先聚臻、前此永徳三年岐陽亦回自相隷名南禪、以講究者四年于茲矣、見岐陽傳、後至岐陽兼倡宋説、亦蓋與堂首焉已、其夏源相奏、後小松帝、特擧南禪列五山第(為)一、秋以疾謝、憇于慈氏院、嘉慶二年、知疾不可起、乃命造龕、四月二日自裁之銘、四日端坐示滅、年六十四、窆于本院、堂之器識淵偉、道儀古高、而其居常與衆同甘苦、禪坐諷誦雖疾不闕、以辛勤斃、所素願云、弱善翰墨、明僧楚石等見稱嘆焉、所著述有語録及空華外集・日用工夫集若干卷、又選宋元偈頌為十卷、曰貞和類聚祖苑聯芳集、皆行于世、其餘記鈔等尚多云、

漢學紀源卷一終

1 ▽(島) 小根占故年寄池端君墓誌

池端君歿距今天保己亥二十一年矣、其子清賓哀思不已、介礒永某叩余艸廬、属余曰、所建表石未幾既間泐矣、猶多歴星霜稍至姓名、亦不可讀也、故欲擇貞珉更以建之、且 今公追聞、

清資善事親孝及其性淳篤、克守吏職、特褒賜銀三枚、時考妣既逝無、無路以報諸泉下、因以買石請余併誌、其事足少紓情、余辭不獲、乃按状、君諱清賢、称辰右衛門、後改六右衛門、世以士班貫隅州小根占郷、其先出自建部、食邑禰寝、因以為氏、至弥次郎諱清種、事足利幕府隷我　公室屢顕軍功、後降臣焉、有中葉居池端者因亦易氏、祖清尊、父清寅、母有富氏、君由地頭横目、歴組頭、終郷士年寄、居職二十餘年、文政己卯閏四月五日以病歿、生于宝暦甲戌□月十六日、得壽六十六、葬于郷東川北山坊之先塋、有富氏、後君□年歿、生二男一女、長鐵一郎夭、次即清資、女適下邨高徳君、性朴直好学、射於東郷氏、官暇必講忘老之将至、

2

貴書（此カ）可備御覧仕立ニ無御座、未定之事共、聊満（備カ）遣忘計ニ如此綴置、一齋へ碑文頼度、大学古本等相添遣候時分、親類へ病人有之、桂庵傳計書直可遣事難及手、不及是非此紀源も夫成伊氏迄頼遣、若一齋被諾向候ハヽ、撰方見合相成分書拔御遣可給旨、細〻頼含遣候処、市来宗及抔吟味ニ而、此侭為被遣由、汗顔之至御座候、其後段〻補正可仕事共見當置、猶不束成事耳御座候、左様御覧御改正可被下候、

3

九月

日本国中儒学ノ開祖ハ惺窩・羅山バカリノ様ニ斯文源流ヤ先哲叢談ナドニ書キ、又其以前ノ儒ハ五山ノ僧徒ニ傳ハルトノコトトモハ和讀要領ニモアレト、　應神ノ時ニ王仁ナド来テ開キシ以来、惺窩以前ノ中古ニ、宋学ノ段〻流行セシ次第ヲ述タル物ナリ、就中桂菴以来ノ由緒天下ニ知レサル故、此紀源ノ稿ヲ起セシナリ、然アルニ、子ノ秋、（伊集院）兼誼兄ノ出立前比桂菴碑文ノ綴方ヲ佐藤（一斎）先生ニ頼遣ハス時分、親類ニ病人有之、寸暇ナキニ因リ、桂菴傳バカリ写ヤルコト叶ハス、此四巻ニ外ノ證書ヲ添テ登セ候処、市政寛ナド談合ニテ、此侭一齋へ被遣候由、然ハ先生モ殊ノ外大学ヲ珎賞セラレ、此漢学紀源モ至極詳審ナル事ニテ得益不少、皆写タキトテ留置レ、兼誼見廻ノ時モ、紀源ハ扨〳〵能クモケ様ニ糺得ラレ候ト褒詞ニ付、鄙文不綴ノ所モ有之、定テ御推讀下サレタル筈、御考ヨリノ所モ候ハヽ、直ニ御直シ付被下度ト頼クレラレ候ヘハ、否、ケ様ノ物ハ糺得ラレ候御方ノ御書面ナリニテ宜物候、随分宜御文面ノ旨被申候由、左アリテ寅八月、四冊トモ返サル時ノ状ニモ、去年より写可申トク〳〵留置候ヘトモ、去年以

来身分一変ニ付多端ニ相成、其所へ及不申候間、全篇御出来ノ上ニ、何トゾ一部ハ御写セ、御恵被下候事ハ相成間敷哉、先者返完ストノ赴ナリ、尤南浦弟子以来伊集院俊矩迄ハ可成書取申度含御座候得共、實〳〵拙文江戸共ニ遣候氣ハ毛頭無御座候得共、此等ノ赴ヲ序カ跋カ御綴可被下事、萬〳〵御頼申上候事、

桂菴第二十八

（頭注）「許ハ詳カ」桂菴、本貫周防山口人、字玄樹、別號島陰、不許俗姓所自出、以應永丁未三十四年生、永享七年年甫七矣、遊京師寓南禪寺、師惟肖・景徐肖或作正、徐或作召、並非、受内外学、嘉吉二年冬削髪為僧、始受戒壇、時年十六矣、業成而帰飛錫長州董永福寺、在赤間関、愈信宋学、雖以欲究其精微、然未知先師岐陽、所點悉適註意否、△

（表紙）

漢學紀源

中

▽（島）漢學紀（シ）源原巻二

岐陽第二十三
一慶第二十四
惟肖第二十五
景徐第二十六
桂悟第二十七
桂菴第二十八

△

漢學紀源卷二

麗藩　伊地知季安子静撰

岐陽第二十三

岐陽、名方秀、號不二道人、岐陽其字也、俗姓佐伯氏、讃岐人、其先與大伴同祖、出自天忍日命、十一世孫室屋之男御物宿禰、御物生倭子連、

允恭帝時、詔倭子連為讃岐國造、自是子孫繁衍、多為讃岐人、僧空海亦同族、而生於州之多度郡(為津)、父曰田公、空海贈伴宿禰國通語、有伴佐昆季句、為是也、岐陽之父曰清泰、蓋其裔胤云、母源氏夢獲珠劒而有妊、生于貞治二年癸卯之歲、生髪未乾遭乱於州、父清泰避奔北越、母懐陽入洛、依外祖源某、源某業儒、見陽英敏曰、孺児可教矣、授以詩書、諳誦弗倦、及源某卒、従泉石窓于東福、執童役、時應夢巖(雲州人)方董東福、以博覽能文、遐翔名翼、陽學其門、應安七年(甲寅)夢巖逝矣、(勅諡大智圓應禪師)、陽年十二、乃拜濬霊源於安國、親炙八年、知解益進、(玉師)□、開法於道福、永徳二年、辞往相州掛錫亀谷、明年、回洛隷名南禅、遊南北講肆、至徳三年、堂周信陞董南禅、頗信程朱書、初陽少學詩書、後崇宋學、亦蓋有資焉、由是大小經論靡不探(頤カ)頤云、明徳三年、陽年三十而帰東福、乃掌蔵鑰由後版尋遷前堂、嘗従及愚中得発藥多後為偈寄曰、象王行處絶狐蹤　一喝何妨三日聾　即此用兮離此用　虚空突出妙高峯、愚中觀大称之、應永九年、明主恵帝遣僧天倫(日彝禅師)・一菴(日如講主)来朝　本邦、(前年三月、義満遣使于明、見年契等)、陽欲面識而　官禁不許、屢通書問倫・菴、咸見称其博才、　幕府義持常召問法、崇敬尤膴、由普門遷董東福(山日慧日)、賜之金襴衣、(據高僧傳等)、十年、　國朝使舶載四書及詩經集註等、還自明國、八月三日、齎致之洛陽乃講之、(見大全鰲頭、但時岐陽居東福之不二院云、按本傳、其構不二庵、則為應永二十七年事、鰲頭説疑追書誤、我文之説為應永中南渡帰船云、和漢年契則此年明遣使来云、未知孰是)、當時新註未行乎世、足利學校(在下野州、天長中小野篁所創、而中古移之城州一乗寺村圓光寺之地、又一説、至文明中、僧快元復修其廃云、按篁岑守子、天資穎敏、善詩文、當時無比、(為以)鴻臚官居大宰府、與唐人沈道古唱和、沈氏大奇之、特工艸、聖世為師楷、其守陸奥也、建□校(学)以教庶生、官終參議、俸禄賑恤、家清貧、以仁壽二年十二月薨、年五十一、自篁薨至應永十年、得五百五十二年、教其生徒、猶以古註、而多未知世有新註也、陽特悼之、毎講新註、輒有論焉、曰夫志乎儒者其必学之、勿徒讀彼所棄書、前此宋書雖問或傳、然未嘗聞有注之和點以弘於世者、大抵當時南北争朝、惟競執戟、出奇設伏、士未顓儒、海舶珍書雖手採之、多不能讀、於是乎、陽遂加倭點、

以授其徒章一慶・巖惟肖等云、（高僧傳・家法和點・恭畏問答等、）二十七年（庚子）司天龍席、俄嬰風痺、退靖栗棘菴、又起升南禅、未幾謝事、構不二菴於慧日山側、以憩焉、三十一年（甲辰）宿痾頻発、二月三日奄爾即世、年六十二、天性充實、好尚閑思、識量宏深、文藻典麗、名聲藉甚於天下、按祖應傳云、當時據大方、而負時名者、若大岳崇・東漸易（遠州人、歴任東福・南禅寺、）・大愚智（山城人、歴任東福・南禅寺、）・岐陽秀・惟肖巖等、皆出其門云、又道芳傳云、謁性海・椿庭（為太）・大清・春屋・義堂・絶海諸師、皆推重器、惟肖・仲方・太白・岐陽数彦、斂衽服膺云、可觀此等亦証當時為高徳也、多鈔經録貽恵後学、別所著有琴川録、（或作岐陽禅師語録、疑此、）不二遺稿、同自暦譜多行于叢社云、

一慶第二十四

一慶、字雲章、京師人、姓藤原氏、家世冠簪、左丞相經嗣之子、至徳三年丙寅夏、生於桃華坊第、自幼逸群不屑榮禄、明徳二年慶年六歳、投童役於山崎成恩寺、應永八年年十六、落髪稟具隷名東福、九年、明僧天倫（天寧・一菴上竺）之使于本邦也、慶乃造謁、倫見器重、乃賦與之曰、十二年前蚕出家、因縁傳得祖袈裟、黄梅夜半曾分付、把住無容失左車、而適城北、従岐陽於聖壽寺、受程朱学、朝昏辛勤、綜究内外、迨陽主東福、充典輪蔵、分位後堂、秉拂説法、常與岐陽評論碧巖、至其羅紋結角之處、陽抵掌而賞、　後小松帝賜慶手詔、入講元亨釋書、嘉吉元年遷董東福、寶徳元年夏、　太上皇寫御昭容、　勅慶作讃、　上皇亦製和歌、親書其尾、世以為榮、冬　詔陞南禅、居任三月、佚老於慧山之寶渚、律身甚厳、脇不沾席者凡十七年、嘗慨正宗日就隠微而流弊滋、居恒與衆講石丈清規、因會諸家説撰清規要綱、又作五燈一覧圖、以備後学之撿尋也、又毎喜誦程朱説、著理氣性情圖及一性五性例儒圖、寛正四年正月二十三日座化、年七十八、勅諡弘宗禅師、

惟肖第二十五

惟肖、名得巖、號雙桂、備州人、性氣睿敏、年十六上京都、従芳草堂、髣染稟具、参祖應於東福、與秀岐陽等雖為同門、如程朱学受之岐陽、（家法和點、但作惟正、疑非、）經史子集無不探抉、以文鳴世、与仲方・太白・岐陽齊名、應永中　幕府義持招董相國、寵待隆遇世以為榮、歴住摂州棲賢、洛陽眞如・萬壽・天竜、後陞南禅、永享四年、

幕府義教（普廣院殿）遣使齎書、贈明宣宗命肖撰焉、五年明使来聘、六年、弟子猷竹居等、建其師石屋禪師塔銘於薩之福昌寺、肖復撰焉、八年六月、所遣使舶還自明國、先是明成宗命儒臣胡廣・楊榮等、纂脩四書五經等大全、既録于梓頒行世者二十年于茲矣、一説、四書此時載回云、（據桂菴言、普廣院殿時、姑書備考爾、）蓋肖承師説、欲愈讀其詳者、有所購故也、晩年謝事、構一刹於龍山中、（南禪寺山曰瑞竜、此也、）為燕息所、命曰雙桂院、故世称雙桂和尚、而義學之徒来叩門者多、則猷竹居・璠器之・樹桂菴・悟了菴之屬、亦皆出於其門、恒示人曰、如人登山、須自努力、又上堂輒曰、天何言哉、四時行焉、地何言哉、萬物生焉、旁好莊子、始講虞齋口義作鈔十卷、蓋以篇中多用禪語、而世人難曉也、所著有語録外文若干卷、曰東海瓊華集、

景徐第二十六

僧景徐、字周麟、別號宜竹、善屬文博識多通、領袖群衲、嗣法萬年材用堂、四住相國、一董南禪、文明十五年正月、　幕府義尚會近衛氏（政家）等、各暢吟懐、景徐與召、皆時名彦也、後構軒於萬年山、命曰宜竹、常投閑焉、齢超古稀、逝于軒中、所著有外集若干卷、曰翰林葫蘆集、（出僧傳引書目、）慶長十五年十一月、僧文之與恭畏書曰、應永年間南渡帰船、載四書集註與詩經集傳来、而達之洛陽、於是不二岐陽始講此書、為之和訓、于時東山有惟正、東福有景召、二老名衲、而同出於不二之門、匪翅精此二書、以博学多聞籍甚天下、我桂菴従二老受程朱学、遊明七年、遂研究之帰、教授西藩、傳之月渚、月渚傳之一翁、以至文之、今季安稽諸僧傳、所謂惟正蓋惟肖之誤、既載前篇、景召亦景徐之誤、而字周麟、桂菴與周麟善、永正三年、周麟所寄詩云、桂翁先友是蘭翁　聞昔龍山會座中　前輩（（高霄凋）凋零）吾老矣　洛陽寺々見秋風、按蘭翁即蘭坡、而名景菡号雪樵、八年二月、周麟跋巣松集曰、巣松親炙雪樵、々ゝ余之師友云、據此、周麟師友蘭坡、則為桂菴友、如有証焉、然文之書桂菴學于景召、（即此周麟、）文之相後殆剰百載、桂菴・月渚・一翁・文之四世口授、恐傳聞誤、今季安謂、周麟・蘭坡・桂菴同学于惟肖、後交師友、故致此誤、可以觀也、於是今叙景徐於惟肖下、姑録所疑以竢来哲、蘭坡稟法軌大摸、而夢窻四世之孫也、聰慧夙発、喜誦坡詩学之蟬闇、（名龍惺、号瑞巌、一字仲建、別号蟬菴、或作蟬闇、泉州石津人、年十一従麟一菴於東山、操持凜然、深探子史、文安丙寅

住建仁、宝徳庚午董南禅、長録(禄)四年閏九月五日座脱、年七十七、所著有二會語録及外集、又質葵齋於諸史藉、
靡不該研、文明十五年正月、　義尚雅會景茝以詩與召、
且　後土御門帝屢召問法、心宗洞徹、外学兼沙(渉)、毎詣
〔庭闕(高闕庭)〕、朝講經夕留詩、為王臣所崇重、歴遷諸刹後陞
南禅、既謝憩于正因庵、景茝與桂庵友善、明應末年、
桂菴奉釣(鈞カ)帖領東山、景茝贈書駕焉故友也、文亀元年終
于庵中、　後柏原帝追褒賜諡佛慧圓應禅師、有所著仙
館集・雪樵獨唱集、京人巣松親炙八年、善詩知名、(高後〈)
来寓于麗府、従桂菴学、詳見下篇、

桂悟第二十七

僧桂悟、號了菴、以應永甲辰(三十一年)生、蓋偕桂菴受宋学
於雙柱(桂惟肖院号)之門、而長於桂菴三年、嗣法眞如大疑信
公、泛通宗説、應仁二年、雙桂門下為璠化、悟為塔銘、
為璠乃吾薩州甑島人而竹居弟子也、文明中、出世勢之
安養、遷董東福、　後土御門帝聆悟馳譽、召問法要、
大悃　皇機、特蘸宸翰、大書了庵二字、以賜悟、世以
為榮、永正三年、足利義澄使悟聘明、時年八十三、道
次弟南(泉)、六月、聞杏林陳氏寄桂庵詩、固有與之識荆、
乃和以贈焉、

日州安國堂上桂庵大和尚、乃瑞龍遣局南遊東帰以来、
道價被于九州、王道向化、以故不屈駕而擧視於名刹東
山之篆焉、頃有陳氏外郎、京師所居号杏林、西遊之日、
謁見于桂菴師、神交道契、雖然東西阻脩鴻鯉、鮮音耗、
今茲夏末、(應是永正三年六月)、安國僧徒往来之候、杏林製二絶、
抒離索之懐、仍請雒下諸名緇、令同于韵、老拙任皇明
入貢之節、留滞泉南、杏林遣書求屬和、顧往日既有識
荆之雅、而同好宜減於陳公哉、初應其請、後篇寫區區
老懐、解一粲於千里之外、

矍鑠今時一郝翁　名聲藉々播関中　杏林交義辱支許　海
外九州曾向風
長安遠近日過翁　肇刹曾遊在眼中　桂子天香我同称　栴
檀薝蔔一家風

大明正使老釋桂悟拜

轉結所謂桂子同称一家風、今按其意、桂悟・桂菴皆青
年、俱学雙桂之門、故分桂字以各名之、於是言受一家
風、同称桂焉已、了庵渡唐、九州に滞留中被送之、
法の師のはなの玉もをくりかへしかけてあひミんこと
をしそおもふ

右出于雪玉集巻十八、既而開洋舟抵鄞江、寓館於馹、四年丁卯（明正德二年也）、夏、餘姚王陽明（名守仁、字伯安）、赴謫龍場、道至錢塘、悟之寓於馹也、陽明就見悟焉、感其学行云、而入帝都行朝聘禮、（籌海圖編、正德八年五月、夷船三隻、使僧桂悟貢方物云、此也、但年月言其帰耳、）宴賚如例、武宗乃詔悟住育王山、悟臨門曰、育王門戸八萬四千、毘廬樓閣雨華現前、又進歩云、纔動一歩東土西天、是日、武宗遣中使（高使）賜悟金襴僧伽梨、乃拜拈衣云、

晝錦恩榮北闕天　黄梅夜半不曾傳　育王山頂横雲霧
無相福田擔一肩

毎有上堂、緇白觀呼、公卿縉紳崇徳来謁、居之八年、諸儒與之交者多、九年壬申悟既解印、館于姑蘇、居幾半載、四月、姚江楊端夫等贈詩者多、

日本了菴禅師、膺使命来我皇明、館于姑蘇、幾半載、凡士大夫之相與者無不敬且重焉、以其歯徳既高、□学亦称是故耳、昔王摩詰所謂色空無得而不物〻、語〔是ヨリ出ヘシ〕默無際而不言〻者似為今日禅師道也、予接遇日久、因賦二詩以贈、一以詠號、一以送行云、

撥開雲霧霊臺湛　著盡工夫豈憚勞　六鑿已空無箇事
一身天地自逍遙

文采飄然語意眞　聖朝尤重老成人　明朝授節帰東國
曾見賢王眷顧頻

正徳七年四月望日　姚江楊端夫（高天）稿

十年癸酉（明正德八年也）、諸縉紳、聞悟将帰、咸贈詩章、此年五月、陽明（四十二歳）與門人徐愛等遊入四明觀山水、而自寧波（高還）餘姚、亦聞悟回、十六日為序贈焉、

送日東正使了庵和尚帰國序

世之悪奔競而厭煩拏者、多遯而之釋焉、為釋有道、不曰清乎、撓而不濁、不曰潔乎、狎而不深（高染）、故必息慮以浣塵、獨行以離偶、斯為不詭於其道也、苟不如是、則雖皓其髪、緇其衣、梵其書、亦逃租繇而已耳、樂縱誕而已耳、其於道何如耶、今有日本正使堆雲桂悟字了菴者、年踰上壽、不倦為学、領彼國王之命、来貢珍於大明、舟抵鄞江之滸、寓館於馹、（或作驛、）予嘗過焉、見其法容潔脩、律行堅鞏、座一室左右經書、鉛采（一本作朱、）自陶、皆楚々可觀愛、非清然乎、與之辨空、則出所謂預修諸殿院之文、論教異同、以竝吾聖人、遂性閑情安、不譁以肆、非浄然乎、且来得名山

水而遊、賢士大夫而従、靡曼之色、不(為接)侈于目、淫□(唯)之聲、不入于耳、而奇邪之行、不作于身、故其心日益清、志日益浄、偶不期離而自異、塵不待浣而已絶矣、茲有帰思、吾國與之文字以交者、若太宰公及諸縉紳輩、皆文儒之擇也、咸惜其去、各為詩章、以艶(為餞)〈迥躅、固非貸而濫者、吾安得不序、

皇明正徳八年癸酉五月既望　餘姚　王守仁

贈了菴帰國

明発行囊曉拂塵　豈辞霜鬢(為苦)若吟身　調高不是陽関唱
杯泛何妨麴米春　水闊(注「闊」)帆飛風力順　華紅葉緑雁聲頻
至家解知詩笥重　為報賢王謝(為案)此宸

廣平府知府前都給事中九十叟　月湖　盧希玉

既而東還、入内報事、　後柏原帝乃勅陞南禅寺、瞰山門丘墟、悉出衣資以再建焉、竟回慧日(東福寺)之大慈院、安庠而化、(年月未考)、特賜佛日禅師、有所著語録二巻、(題曰了菴悟禅師語録、應必是也、)了庵桂悟佛日禅師十三回、一弾指頭十三霜舊院無人苔満廊　佛日不知現那界　扶桑国裏早韜光、亦出雪玉集、吾桂庵歯雖少於悟、其於適明、前乎悟者可三十年、而又東帰、為文明五年、陽明王氏生僅二歳之時也、迨悟遊明、既踰四十、論格物致知知行合一之義、雖良知学未振于世、専以倡明聖学為已任矣、天縦明睿、超入聖域、悟回十年、始揭良知之教、以鳴天下、明國理学、莫精王氏、當時譚学者莫不稟為摸楷、而悟與之親論学術、既見許可、如序所言、以是推之、至如桂庵、雖與王氏未獲一面、亦為悟所慕、如上所載、則於其(若)学行、亦足以観(其)者所造焉、故併言爾、

桂庵第二十八

僧桂菴、字玄樹、後號島陰、本貫周防山口人、不詳考妣姓字、以應永丁未生、永享七年年甫九矣、乃遊于洛、師事惟肖於南禅寺、當此時、建仁寺有惟正諱明貞者、東福寺有景召諱瑞棠者、皆不二岐陽之徒弟、而講四書、以博識称、故又就二老、受内外学、嘉吉二年師年十六、而削髪為僧、始登戒壇、時惟肖既老、構居山中、曰雙桂院、因師亦取撰名字云、當時譚学(為者)〈、鮮不聚叩而稟於其門、師最苦螢雪、與景徐・桂悟・蘭坡等友善、皆一時名僧也、業成而帰、飛錫長州、領永福寺、(在赤間関)、愈信宋学、讀倪士毅四書輯釋及永樂所進大全等、雖以

欲究其精微、猶未知先師岐陽所點四書悉適註意否、於是慨然有求眞学之志、時會　國朝撰遣明使於五山僧、而惟肖等知擇材(為才)之權、乃徵知名衲子八十餘人、聚諸南禅寺、題大梅々子、鳴磬一声、令各為詩以闘其材、時師亦就試場、應響賦之、曰、大梅々子鉄團々　八十餘人下觜難　今日當機百雜碎　那邊一核與他看、肖等大感、乃挙師、後四十年永正三年、天龍桂喆八十一叟、和陳外郎、呈桂菴詩、亦言是事云、誰圖遐裔有茲翁　才嘗蚤喧稠廣中　吐出大梅々子偈　至今玩味慕禅風、吟咏此詩、足証當時、故採註焉、於是應仁元年師使於明、入見憲宗、名見濟明八主、宴賚特篤、明年元旦、早朝大明宮、實成化四年、而師年四十二、乃為賀詩、一句及歯後、毎歳旦為詩言歯、一因此例、示不忘榮云、聘禮既竣、遊於蘇杭間、出入学校、受朱氏学、博窺曹端四明人、別號習古、官監察御史、四書詳説、其它註釋粹者、潜心玩理、有所不得、輒就鉅儒、審詢研究、居七年、業大進、内外精蘊、莫不通悟、尤邃書經、又長詩騒、其在明也、探禹穴、泛西湖、名山大澤鮮不渉觀、而毎興懐觸感、必暢為詩、若夫紀夢遇舊諸作、明人亦往々競傳、咸称為有唐人之風、其紀絶夢詩曰、帰夢飄然落海東　赤城舊院杏花紅　座迎諸友一樽酒　似慰多年離別中、又遇舊作、途中適遇四明人　一笑如同骨肉親　可有扶桑新到客　報言東魯送残春、多如此類云、文明五年帰報使事、初　国朝自置博士、教其学徒、皆以古註、觀拾芥抄、援論語語句、註皆依孔安国・鄭玄・馬融等説、可以知也、而當時、猶未獨有解新註者、於是師雖有所會得、自非博士、不得公然倡講以教京畿人、蓋国典也、後百卅餘年、至慶長八年、文敏林先生始講論語集註、外史清原秀賢沮之曰、自古無勅許、不能講書云、可併知焉、且其将如京、既抵長門、聞南禅諸刹悉為灰燼、不遑譚学、乃還寓於石州、八年、游歴豊筑肥諸州、所至一時老師宿儒、咸推尊師、就中肥之菊府、特崇聖学、置泮宮焉、師往客之、吾藩龍雲・玉洞等、聞師鳴碩徳、與興国老等、薦之於　圓室(忠昌)公、使人如肥、厚聘招藩、師乃欲往、亦聞薩隅有事、不果、九年正月又欲適、且為詩曰、肥陽城外薩陽城　聞説今年収甲兵　萬里雲飛駕言邁　風流太守愛僧情、二月猶在菊府、與釋茱於泮宮、為詩獻焉、曰、太平奇策至誠中　春奠貫筵陪泮宮　泗水吹添菊潭碧　寒雲染出杏壇紅　一家有政九州化　萬古斯文四海同　絃誦未終花欲暮　香烟撲袂晝簾風、于時菊府有源基盛者、別號朶雲、就師学、尤善書、乃為其子生徳、写四書本文、受師口授、旁加倭點、於是十二月師親校正、為之跋焉、

由是世多知敬信四書云、十年二月遂抵薩藩、始謁　公於市来、特被寵遇、明年二月、　公命創寺於麑府之海涯、號桂樹院、據雜著、又名島陰寺、據巣松詩、而割帝釈・徳林両寺之田産、永為寺禄、事見師所著村菴簿書跋文、曰、予初来于此郷、沐於官給、一年有餘日焉、有司竟割帝釈・徳林二處之田産、以充我菴十口之食云々、據此、其給寺産、亦在創寺之年明矣、所謂帝釈、蓋在谷山郷、徳林按福昌〉縁簿、永享十年、有徳林庵祖仲者、施入米拾石云、皆為寺名、亦無(島)疑耳、但此事季安近得之、只恨不得之於未示一齋之前、而得之於其既撰碑之後、故至漏逸、是可惜也、是以今又補此師傳、以竢它日大史氏之采録爾、　且歳賜衣、使以居焉、蓋因其地在向島陰、平家語字面、以名斯寺、亦自為號、皆其所撰云、於是師亦感　公恩遇日厚、而有(島)〈與所為、遂委身無復移錫之意、乃與國老伊地知重貞、称左ヱ門尉、後改周防守、謀刊大学章句於麑府、十三年六月板行于世、實　本邦章句印行之嚆矢云、距今天保己亥三百六十年、實當一紀矣、季安有聞、近寛政中、日州志布志市人赤池金右ヱ門者蔵此遺本、以傳府士徳田武中齋、武中以傳市人増田熊(島)助、以献国老市田盛常、世謂伊地知板大学此也、余嘗因新納伯剛、請假覽之、今致仕大夫曰、蔵書浩繁、失所蓄云、故未覩也、余竊謂、公室興隆、至若今日、亦惟其本、鼇鰲此挙矣、然則於今可見　先公聘師崇儒以闡道之深意者、獨頼此板之存、實可宝護者也、究郷寒陋亦多蓄書、若人注意有以需之、應必有得焉、而師以是、入(島)朝時侍讀　公側、出聚弟子、日講新註、以弘斯道、務為己任矣、自　公族大夫至群士浮屠之属、朝野靡然莫不嚮慕、受其学業、徒衆益盛、名声鳴世、隣國往々、至歆望以謂薩都新興仲尼之道、移東魯之風、據答小野克盛詩序、是吾藩倡宋学之始也、自文明十年師唱宋学於吾藩、至天保己亥三百六十二年、公乃受書經、前此　本邦皆従古註、而至師獨依蔡傳、　公通大旨、亦據明人厳克正序、　本邦之尊信書經者、可謂自　公始矣、是歳秋、　近衛準三宮政家公使大醫陳祖田来聘于藩、師與之往来、情好最親、十月、臨別贈詩文、明年春祖田帰京、示南禅蘭坡等、咸擊節和焉、長享二年移寺城西、初所創地、臨海涯、善為風潮所墮敗、不遑營治、故有是命、院號如故、俗呼泉菴、有清泉故也、今城北射圃坂辺、其故址云、但當時府城在今大興寺之後山、十二月適日飫肥、董席安国、先是　公遷族人島津忠廉於飫肥城、以鎮邊疆、兼知渡唐船事、故遣師備簡牘焉、延徳(十四年)□□、七月改元明應、自日飫肥皈薩島陰、初重貞所刊於麑府大学章句、盛行于海内、僅歴一紀、板既擂矣、於是十月、師再刊於桂樹院、即島陰寺、復行于世、距今天保己亥三百四十八年矣、愚嘗求遺本、而無獲焉、去歳仲冬、男季直偶得之市、巻尾刻跋、則文明龍集辛丑夏六月、左ヱ門尉平氏伊地知重貞命工、鋟梓於薩州麑島、延徳壬子孟冬、桂樹禅院再刊云、即此板也、但點句讀、無有和訓、而大書註、如本文字、行下一字耳、蓋其授句讀、教連本文而悉讀註、吾薩藩到今、教童子讀大蓄音泰之分註、亦其遺俗云、按時皆古註、讀知新古、故大書註似有理焉、後(島)〈餘百年慶長五年、博士清原等之講四書也、唯学庸依朱子章句、而如論孟猶讀古註、見羅山年譜、其章句云、亦應吾藩所梓本也、但未覩中庸、竢後有得耳、余所今得延徳板、楷體古雅、筆力雄勁、覩者多鑒為樹眞蹟、未知果然、本年七月私請府学、装演加跋、以蔵于家、故併註焉爾、明應二年復如飫肥、係島津忠朝邑、居於安國、時近江人源永春佐々

木氏、号東林居士、遊学飫肥、三年師還島陰、永春亦從、四年辞渡明國、師送之詩、舟次鄞江、八月以眎明儒、乃廣東参政劉洪・廣平太守盧瑀等、各賡韻、寄頌師德者凡十有二名、而四明進士厳克正序焉、五年四月師在島陰、永春猶留鄞江、七月、乃訪進士洪子經、眎所齋島陰集、子經亦序巻端、皆名卿鉅儒、聞於時者、而明孝宗弘治八九年事也、六年二月、永春抱皈自明、徑訪島陰、致明詩文、師大驩焉、所謂子經序云、精内典、通儒書、旁及荘列、無一之不究心矣、又克正云、精究内典、旁通四書百家子史、於尚書尤究心焉、由是後学莫不得聞朱夫子師弟間所講之奥旨、先是南游播名一時者、於唐則粟田、受經於趙玄默、四明教授、仲満慕華不肯去、於宋脅然善隷書、又能属文、吾林文敏亦謂、古遣唐使煥発青史、粟田・仲満其尤者云、而子經評師、為不在於粟田・脅然之下、粟田・仲満・脅然皆詳前篇、且進士劉洪・慮□(玉瑁)以下、宗顕・倪光・金亮・雛闇・愈澤・鮑垣・沈暘・方震・張珮・倪鑰之属、亦莫各不和其詩以頌德者、據此、其所造詣亦足可觀焉、七年、師奉　相府釣(鈞カ)帖、遙領建仁席、是年、弟子齋師文集、詣洛南禅、眎天隠叟、九月叟為之跋、亦從子經評也、九年、師復奉釣帖、轉南(禹)〈禅〉寺、於是南禅蘭坡等為文(禹)〈賀焉〉駕、既而帰藩、凡當時讀書、儒依漢音、佛依呉音、猶延(禹)〈ヘ〉暦制、師之学明、問諸明儒、明儒曰、曷泥呉漢、従便可也、繇是師以所會得、規岐陽所嘗點四書、多改乖誤、別注和訓、以授子弟、愛甲季定所著書云、吾師如竹聞諸文之云、四書倭訓、岐陽雖創、迨師回自明、頗加脩正、以至文之、而文之亦間改正、以授如竹等、而如竹時、錣梓弘于世、故世人多傳為文之點、然非文之所創也、此説得之、按師所著朶雲居士四書跋、師之在菊府也、有朶雲姓源名基盛者、善書著声、既写(本)(玉)千字文、受師口授、加之倭訓見上文明九年、而又此注倭訓云、猶及註文、余從兄本田親標嘗得論語集註一本、則巻之三、而尾記元亀四年四月春永書、新註論語全部一筆、既有倭點、且採曹端詳説、間注旁註、按詳説、師在明所讀、而元亀四年、則當文之年十八、惺窩十三、如竹三歳之時、而如羅山、時未生也、據是觀之、写師所脩正本者明矣、然失餘巻、實為可惜、但天和梓行四書跋亦記、近代南浦創加訓點、羅浮復潤色之、南浦乃文之號、其創加云、迨考誤也、然於斯文、時猶草昧、教導未開、學士往々不知句讀、且有新註也、於是十年、師著小篇、辨四書五經註有新古、且以國字解朱註例、述倭點法、使世蒙士皆知学必崇宋説、先在能辨其句讀之意、今世所稀傳、桂菴和尚家法和點此也、季安今蔵二本、一題曰四書五經古註与新註之作者并句讀之事、而巻尾書慶長十六年九月八日、俊正者於山川写之、一即題如本文、而元和十年所刊行也、蓋師著之、只為論俗、而未遑撰題、後学如竹迨其梓之、悪題不雅、應所改書、故板本文少於写本、且删明應十年、換元和十年、不興題合、亦梓時誤、又山川薩之港名、唐船多繋、故桂門儒僧世主正(禹)〈與〉龍席、此云山川指之、詳下篇、列諸藝文、今将厭觀、然世之讀朱註者、自時往々莫不階焉、而受其賜也、既再梓行

朱子章句於文明与延徳、又口授倭讀於菊府、而徠於藩、猶以國字解朱註例、述(為)和点法、以弘于世、師之於朱学、其功寔偉矣哉、文亀二年、構丈室於伊敷邨、為帰隠之所、名東帰庵、愛甲季定書師事云、老憩於伊敷小宮地、曰桂樹寺此也、永正元年師所著序、書桂樹丈室、又文亀二年詩言、新築一軒於小西湖之赴、所謂小西湖、蓋伊敷川、今上伊敷小宮有庵址焉、師墓尚存、刻東帰庵開山云々、俗呼御庵、或称御石、故参考書焉、三年春、師擧龍源寺在日市来、亦忠朝邑、釣雪、上野州緑野人、代董安國寺、而自憩菴、乃賦詩曰、丈室修營今一新　老禅七十七青春　寺門興盛檀家力　花下焚香祝大人、永正三年、弟子皈自洛、初陳祖田之帰京也、以師所送詩、眎五岳高僧、各有和篇、既以寄師、為文明十四年事、而往海南皆亡失焉、故師致陳氏書、求其副藁、諸老存者少、於是祖田復為和、告桂悟・景徐等、更求之和韻、以寄頌者十有餘名、是年二月弟子齋回、多皆碩徳、鳴世之緇流也、或恨吾侯私師於藩、不公諸天下以莅大方、或述虚席南禅竢師回轅之情、莫獨不欽慕其徳与材以勸師起者、然君子不以栄辱易操節、師雖釈氏、實精究儒学、而承君恩亦如彼、則不敢回洛、蓋示不事二君之義、可以知焉、四年八月對月詩曰、人間八十一中秋　明月在天五鳳樓　木上座来吾帰去　海西萬里汝為舟、五年六月十五日、卒於東帰菴、得壽八十二、葬于菴地、曰前建仁後南禅桂菴和尚大禅師、見享禄五年三月門人巣松祭師詩序、而無其墓、栽杉為冢、自師歿後百七八十(冢カ)年、至大玄公時、(綱貴)府下耆老無能識其塋者、國老島津圖書久竹・島津主計久年等深慕師徳、訪索竭心、聞志布志人愛甲喜春季定獨有識焉、亦屢通書問、遂得其處、既而老杉又經歳枯、至享保七年、朽根僅存、亦将泯滅、於是十一月、大龍寺六世主僧宗玉・一乗院主僧堯周・妙谷寺主僧通岸及府下志士鎌田醒雲・町田權兵衛・本田与市(為)右ヱ門・四本正蔵・越山茂右ヱ門・鳥居如見・笹山慶賀・木村探元・田原武左ヱ門・(為)右仁礼正謄五等、相与圖不朽、翁然戮力、辨之工料、是月十日就塋樹址、斫石建之、則今所在墓此也、今墓題曰、正興三十年九世前南禅桂菴玄樹大和尚禅師墓、按島陰集、未見師居正興寺、但文明十年應聘就藩、八月、及玉洞等遊于日隅、明年二月創桂樹院、使師留錫、然是私寺、如正興寺、分自建仁寺、既列甲刹、故使師帯其序、居新寺以教授府下耳、師居恒洒落、讀書賦詩、雖自以儒為己任、抑　本邦流俗、禁非博士建旗儒門、(清原秀賢語、)(據慶長八年)故只従舊事佛於寺、察時而能安、亦其知矣哉、然至所究、必講理学、其誨人敬信四書、必如神明、而又曰、仁吾儒所宗、而我佛之大慈也、或釈門学在敬心君、或人有正心寧愧天、或胸中自有不傳書、或孔孟何人在用情云之類、皆示人詩、而璣麗韻朗、匪徒盡巧、無暢非教、今挙三四首、曰、終日終霄十二時　讀書講武又論詩　故是賢々誠實意　樽前豈敢醉蛾眉、作在聖人寧及賢　吹燈細讀述而篇　師門軽薄書生僭　誰使斯文如古然、曾子横身孔聖門　那知一唯渉多言　寥々黙座夜堂静　堵

下無人月有痕、如何記得伏羲心　默座寥寥至夜深　敏手鑿開混沌見　先天一氣後天今、多如是類、所著有島陰漁唱（明進士洪子經序題、今三冊、島陰集）・島陰漁唱文集（默雲天隱叟跋）・島陰雜著各一冊、・家法倭點（亦一冊）等、皆傳于世、其遊明諸作、別有南遊集、今不傳、又其眞像藏大龍寺、乃秋月等觀所写云、秋月薩人、学畫於雪舟、而與師唱和、故令写像、亦無可疑焉、（元禄四年四月、大龍寺五世不門、裱装為掛軸、延享元年三月、正興萬休齋如京師、又新裱装、寛延二年、大竜玄察改紙易絹、半身像也、）今著師傳、凡所引書、據島陰漁唱・島陰文集・島陰雜著・五岳詩文・高僧傳・恭畏問答・戰國英雄集・相屬系圖・不忘抄・西藩野史・麑藩名勝考等、然於其中、若親覩原文以足証當時者、粗採載下、不然、恐讀者莫知其声聞称實、至以知于明國、信乎吾岳、振誉於九州之德也、但於詩文、與時変、則自然之運、雖使今人讀、庶乎古樂生睡、亦使之以知其漸汚隆如是也耳、（蘐林志、有（為）曰〈桂菴諱守廣者、以天正十九年歿、又妙高山帝釋寺大般若經、今在隅州横川安良社、其箱書永享六年桂菴老衲、皆非玄樹桂菴明矣、但以家法和點、為守廣著、因同號誤也、不足辨□（主耳）、（為）所〉、）

▽（為）辛巳八月下澣

麑藩　伊季安子静再撰△

送大醫陳祖田歸京　桂菴

古方霊藥舊家傳　赫々皇華碧海天　祇為上醫元治國
細論太守近安邊（太守吾圓室公）　九夷鬼界三千里　一夢龍山二十年　況是高僧吾故友　屋梁落月曉猶懸

仝

洛陽使者到天涯　東箒歸程路轉賒　落葉千山五更雨
早梅十月一枝花　客中送客堪為客　家外尋家未到家（「出イ」）
故舊周南若相問　衰残白首命如紗

附洛諸老之和

薩陽桂菴老人賦四韻二篇、送皇華陳外郎歸京師、拙与老人有平日之雅素、雖阻天涯萬里、而喜暮齢各無恙、漫依元押奉和、情見于詞也、

見南禪明掄書

喜見佳篇雒社傳　薩陽猶共沈寥天　雲埋鬼窟黒山暮
地隔鯨波碧海邊　乱後故人成蝶夢　生前再會付驢年
祖翁舊業今休問　磵水松風夜雨懸
海角孤雲天一涯　經年故舊夢魂賒　仲霊書折歐韓論
覚範筆承遷固家　燈雨三千餘丈髪　春風二十四番花
傳聞華屋陪連師（「蓮社ニイ」）　蘄（「キン」）竹瑠璃映蜀紗
茲春、（當文明十四年、）薩之桂菴禪師作四韻二章、贈別皇華

陳外郎、耆英在洛者皆和之、予亦次其韻、聊述舊懐、轉以傳於薩、則可無交友星残之嘆乎、

北山雪樵書于等持篇室

新詩偶自九夷傳　也識星河共一天　草嫩塞垣雪消地
花濃野館雨残邊　我無遠夢堪娯夜　君似故交俱忘年
緬想離亭風笛暮　斜陽西落月東懸
學業傳聞至聖涯　行将相問驛程賒　瘦於詩者鬢光雪「先イ」
老矣自然心不花　但為與君住潜邸　幾回和夢宿漁家
衰残強欲賡高韻　卷舒窻前四景紗

太醫陳外郎、上都風流佳士也、文明辛丑（當十三年）之秋、以準三宮釣旨（鈞カ）（當近衛政家公）、如薩之地、淹留者累月、太守（當吾圓室公）、亦推奬之、是故一國之士、靡弗誦其名、龍峯（言南禪寺）、桂菴禪師居是邦者幾乎二十年、「イナシ」禪師廼吾山名勝、而聰明睿智遐出于流輩之百、詩亦熟文亦熟者也、陳郎與禪師、一往一来、殆乎無虚日、或携衣而宿花、或開樽而酔月、其交可謂不瀆焉、壬寅之春、（當文明十四年）、還于都下舊業、桂菴餞之以川八句両篇、吾山耆宿、泉南利渉老、西枝謙村翁相継而見和、顧吾老懶衰墮、然於禪師有素者（「情イ」）尤篤、故攀高韻、以索一笑於千里之外云、

竜阜瑞要

両首新詩一日傳　上都不隔鬼門天　行々雁度塞雲外
泛々鷗眠野水辺　陳氏郎官吟卜夜　薩州　太守（亦當吾圓室公）
話忘年　以南以北畫圖境　三百疊山春雨懸
青衫白首破生涯　一別心知入夢賒　孤角吹残千里月
疎鐘敲落半巖花　曾陪洛下耆英社　今問安西都護家
秋對楓林冬對雪　憶題聯句倚窻紗

薩州桂菴老人贈別皇華陳外郎之帰京、以八句二章、吾山諸彦賡其韻、予亦備員、聊述下情、伏希刪潤、

蘭坡叟景莅

別来書信幾回傳　望断孤雲落日天　早得佳名五峯上
今横老氣九州邊　一場法戦已驚世　萬里壮懐空歴年
舊社秋深歸去晩　也知陳榻為君懸
漢使寄蹤蠻水涯　過君日慰客途賒　枯腸攪盡一瓶茗
雙鬢燒残半盞花　燕足懸詩傳幾處　蝶翎載夢到誰家
想看太守論文地　啼鳥晝閑垂絳紗（此云太守亦與上同）

辛丑秋、（亦文明十三年）、陳外郎承　大相國鈞命、暫如九州薩州之名邦、洛東龍嶠之佳衲桂菴禪師、時寓居其州、

偶相遇、唱和若干首、足以慰藉旅況焉、今茲之春、帰船泊泉州歩口、訪予於市橋(萬南)小院之次、「出イ」持華軸而見投、披覽之、専壮國使帰程之詩文也、公告其来意、在督拙和而已、顧我垂八表、衰癈特甚、然吟翫有餘、不獲敢黙、攀高韻者二章、前篇式擬皇々者華詞、後篇寓意於桂翁文雅之席、所謂珠玉在側、覚我形穢者歟、

泉南隠衲「嵐イ」蘇齋守湊

數篇唱和遠相傳　莫道鬼門関外天
愛僧閑暇座鶯邊　引客清香凝燕寢
軟脚局前遙想像　使軺萬里東帰日
東洛英豪西海涯　孤棹幾程西去年
乱後慵看舊院花　何圖再會歴年賒
交遊回首皆星散　羊嶺千尋連祖塔
薩州桂菴老人、送皇華陳外郎尊韻、謹和之、一一削而正之、不亦幸乎、　鴨川一帯少人家　別時憶折新亭柳　誰把君詩篭碧紗

西枝叟庠宥

曾無別後一封傳　両地迢々隔海天
赤間関外苦吟邊　沙鷗為伴消閑日
雙鬢秋寒灯火底　塞雁投音慰暮年
紫陽萬里浩無涯　落梧吹雨夜闌懸
也知微笑有拈花　久寄高蹤歳月賒
為報早催帰駕去　晨参暮請雲中寺
奉和薩陽桂菴老人作四韻二章、贈別皇華陳外郎之芳押、慈斤惟求　秋風影裡岸鳥(萬鳥)紗　聞説活機要擊竹　水宿霜眠海外家

鷲嶺慶泉

久無別後信書傳　忽憶秋風過雁天
夢牽情素只君邊　消魂驛路一千里
何日帰来巖際寺　楓林紅處夕陽懸
陽関西望渺無涯　唯有交情路不賒
見来墨跡筆生花　飜瀾千偈非吾漢
他夜相逢又相語　上窻月色薄於紗　髮帯詩班此員外　落手江湖四十年　想像牀頭詩(萬東)東稿　掣電一歡知孰家

島陰集序

賜進士第奉政大夫修正庶尹兵部選清(萬吏)史司郎中致仕奉

詔進階朝列大夫四(萬明)月洪常子經序

人生覆載間、性同天地之師、形同天地之塞、所□(下以)有華

夷之辨者、豈以其彊土之遠、風氣之殊耶、(玉亦)□曰、徒有是形、而不知性為何物也、楊雄謂、在門牆則麾之、在夷狄則進之者、蓋有以也、日本国在東海之東、自後漢始入中国、由是得覩墳典之全、聞周孔之道、而用(爲周)夏變夷、是以其国雖舊、而俗則新矣、若唐之粟田授經於四門、助教趙玄默、仲満之慕華不肯去、宋之奔然能属文善隷書者、要皆與華人相後先也、是豈可得而少之哉、

我朝

太祖高帝、法天為治、

聖子神孫、継體守成、而薄海内外、無不被其教化、故凡越裳(コヽヨリ)・肅愼・獫狁・高麗・諸蠻国、遣使入貢白雉楛矢之類者、肩摩踵接、無虚歳也、今

天子改元弘治之八年、日本国復譯而来　朝、舟次吾鄞江上、一日有客、持其国南禅寺僧桂菴島陰集、凡千萬言、詣予不解華語、索紙筆以告予曰、桂菴吾国緇流中之翹楚也、精内典、通儒書、旁及荘列、無一之不究心矣、

成化四年觀

光上国、得従華之大夫士遊、益増其所未能、帰避乱、居豊筑肥之三州、凡其吟詠性情、應酬干求之作皆在、於是終居薩州之麑島、故名島陰集、敢丐大人先生一言、以序之、儻蒙不拒、其為栄幸、曷可言哉、予嘗見其紀夢遇舊之作、(爲能)曲盡離索之意、則固心敬之矣、及觀是集、則誠不在於華之作者、及其國粟田・奔然之下也、可喜也已、乃不辞而為序、以帰之、弘治九年歳在丙辰七月既望、

東林居士者、江州両佐々木氏之華譜也、癸丑秋、當明應二年也、於日南之弊廬、倒履出迎、相續而會者、再也三也、我知名下無虚士、茲歳春首明應三年、予還薩之島陰、在麑島、即桂樹院也、雅談之美、時々不能蔑于懐也、今也春之仲、中澣之盡、飛駕来相留者一旬餘、禅榻茶烟、詩筵風月、興寔不浅、別来之欝陶、為之廓如也、遂告帰去矣、作是詩、詩謝来儀、

海東野釋桂菴稿

江國源流両大家　門々才秀世堪誇　此郎胸次虹霓氣
一語雲飛五色花両佐々木者世為源氏之傑、
日南一別両天涯　倒履相迎喜上眉　禅榻茶烟落花雨
詩如小杜鬢無絲

▽㊤寄題新原公又日齋

高齋聞説讀書人　胸次風光又日新　昨暮秋香佳菊露
今朝雪蘂早梅春　故磨瓦礫未磨玉　不染衣裳舊染塵
水色山容座来好　斯千四海徳為隣（桂庵手蹟、在町田監物久視家、△）

贈日本　桂菴（為樹）〈禅師詩序

賜進士出身奉眞大夫南京兵部車駕員外郎四明厳
端克正序

大明弘治乙卯仲秋既望、吾鄞吟社方先生時起携日東源君
永春過予、載拜而告曰、吾国桂樹院住山桂庵玄樹禅師、
精究釈典、旁通四書百家子史、於尚書尤究心焉、吾陬（取）
尚書、往〻皆従古註、而禅師獨依晦菴朱夫子門人之傳、
與後学講解、如指諸掌、誠日本緇流中之巨擘也、知禅
師者、（當）掌薦之於薩隅日三國　太守君島津公者、用邀以
発明尚書大旨、禮遇殊厚、由是後学莫不得聞朱夫子師
弟間所講之奥旨、古所謂擇其善者而従之也、愚嘗辱禅
師愛（厚）原〻、見贈七言二絶、今幸納款
上国、獲名卿鉅儒、索和其韵、将以帰、（為用）周復禅師雅意、
敢于執事一言、以引重之、予惟禅師曩者納貢、遊吾
中華、覽山川之秀、挹賢哲之多、予嘗叩其胸中所蘊、
非尋常者比、可嘉也、況源君、能讀書、善吟咏、亦在
予所愛、故不辞而為之序、俾持以為贈云、
弘治（ママ）年日長至

贈日本　桂菴（為樹）〈禅師詩

賜進士出身廣東参政劉洪

謾道維摩不出家　也能説法動人誇　日東老宿多時別
看到菴前幾度花
老禅歸卧海天涯　渭樹江雲想白眉　課罷楞厳無一事
閑将金偈寫（為）鳥絲

都察院經歴宗顕

苦行清心是釋家　上人高致縉紳誇　吟窩容膝紅塵遠
只種琅玕不種花
養壽多方未有涯　童顔児歯更芝眉　島陰老去成眞隠
不見王言出似絲

味易老翁倪光

上人東住楚天涯　珠玉詩林獨可誇　萬里乾坤雙老眼
白雲深處看飛花
夢中騎鶴到天涯　西竺（竺）〻東林老白眉　一別石橋雲雨地

春風怨入柳絲〻

賜進士南京兵部郎中金亮

遠播詩名有幾家　上人贏得鉅卿誇　珠璣奪目龍蛇字
傳到扶桑錦上花

聞説蓬萊接島涯　老僧應擬淺黄眉　慚余亦夢尋眞訣
塵事紛〻飛若絲

穿山居士雛闇

海國多才是故家　名高支遁衆堪誇　當年曾拜天王龍
看盡長安寶樹花

東去扶桑天一涯　雲開望断遠山眉　箇中老衲參空相
不着塵几(凡カ)一縷絲

賜進士出身四川按察僉事兪澤

自是緇流第一家　墨名儒行是堪誇　獻珠曾過中華地
得見春風紫陌花

欲向遠公結蓮社　愁聞戒酒使攢眉　于今老去都忘却
日〻江頭理釣絲

賜進士廣平太守前都給事中盧瑀

老僧到處即為家　詩律清新豈浪誇　前度入朝承燕賜
醉来銀海欲生花

幾年高卧島陰涯　頭上霜毛映秀眉　心静自無流注想
任他嬌管雜清絲

江邸讀隱鮑垣

四海車書混一家　昔曾納貢運人誇　桂菴高卧應多趣
幾向蒲團(鳳)夢筆花

中華遊遍興無涯　詩社于今想白眉　何日觀光重有會
高山流水奏桐絲

頤心子沈暘

禪学詩才號一家　明珠無價不為誇　菴前老桂天香別
壓倒祇園薝蔔花

憶昔浮盃過海涯　儒林争喜識長眉　瞿曇老去知無恙
自咲昌黎鬢易絲

友梅方震

聞君日域老詩家　出語驚人足可誇　借問禪房幽寂處
優曇幾樹已開花

上人家住海東涯　勘破塵寰只皺眉　獨有詩魔降未得
滿頭短髮盡成絲

正菴張珮

獨憐之子(為大)方家　辞賦(為春)春容不待誇　為導正菴曾有問

蚤年應夢筆生花
大明日本隔天涯　翹首空懐馬白眉　獨札新詩再三詠
相逢惟恐鬢垂絲

石泉倪鑰

上人少小便離家　一入山門衆所誇　揮塵談玄登法座
繽紛繞膝雨天花
悟得眞如浩莫涯　蒲團長日下脩眉　當年曾聞三生事
飛盡爐烟細雨絲

巢松集序

夫山之秀也、水之清也、豈自鳴其勝哉、必竢詩人文士之播詠而善鳴者也、巢松以安老人遠辞洛之恵山、而留滞薩陽之地、茲歳孟夏、僧侶座夏之初日、作唐律一章、鳴玉龍山之勝景、爾来無日而不言詩、凡公府四方之山、官城三面之水、一入公之品題、則水益清焉、山益秀焉、寧不為榮乎、遂逮夷則初吉、一百餘首（為録）之袖之、并平生所作之詩文、同持而就予徴序、素昧乎詩文、實借聽於聾、問道於盲者也耶、然而不得已則如何賛成矣、吁熟顧叢林全盛之昔、碩師耆老、厥德望層聳者、昭々乎心目之際、當是時天下之緇徒、一登五岳之巔、而謁諸老之門、（為則）人咸称之、蓋以麗水所生（為無）非金之沙、崑山之所出無匪玉之石、特若南禅蘭坡禅師、心宗洞達、外学兼全、毎詣闕下、朝講經、夕留詩、是以王臣之所崇重、恰如璉三生之於仁宗、又似蘇八州之於恵林、此翁既逝矣、續者克鮮哉、以安曾親炙于蘭坡十有八年、聞禮聞詩、豈徒乎、家語曰、與善人居、如入芝蘭之室、久而　知其芳、公之才、何翅蘭室之薫染、而恵山者玉之崑岡也、洛涯者金之麗水也、予雖不解詩文、竊考其出處之美、則其言非琢金玉耶、其辞非吐芬芳乎、矧亦集中儘有感今思舊者耶、由是觀之、予之與公老壮雖異、升沈粗相似焉、語肇寺則公翫卧雲橋上月、而撫千松之翠、予醉鎖春亭畔花、（南禅十景之一）、而嗽合澗之流、其興不浅、今復共為羈旅之客、彼肇下之遊邈然也、行入山林、則共鹿豕成群、座對滄浪、則除鷗鷺無友、吾衰矣、不忍其寥闃、公能甘其閑静而樂以詩文、所樂不亦大乎、所謂不移心、則（為窮）究達而克樂天者、君子之性情也、是詩文既本乎性情、則匪敢可議者、仍為序、
時永正元年甲子蜡月初吉、前建仁桂庵玄樹七十八載、

書于桂樹丈室、

京五岳諸老詩

愚夫嘗従公事、于薩州淹留也、（季安按、其来為文明十三年之秋、而辞去其十月也、）日州安國堂上大和尚、垂慈憐、寛旅懐、惟夥矣、歸（衍カ）歸洛之日、辱賜佳章、以壮行色、仍求和篇於洛下諸老、而奉呈金猊座下、（十四年之春也、）承聞昨失海南、今見求其遺藁、（亦按、此云今永正三年、而距文明十三年、凡二十六年矣、）諸老存亡相半矣、「也イ」雖覓於各所不獲之、愚夫亦連書佳篇於一紙、蔵于篋笥日久矣、（人カ）八人奪而成鳥（萬鳥）有、彼此可憾矣、「哉」今又弗顧醜拙、謹賦短章、付于便呈上猊側、式矢「ナシ」區々萬「ナシ」一者（頭注）「烏疑焉誤」烏、来便「必イ」刪潤、尤展老眉、

陳員外郎杏林祖田九拜

曾傳雪曲洛翁々　萬里海山瞻望中　聞説道香難掩處

一枝丹桂紫霄風

日州安国堂上桂菴大和尚、乃瑞龍（南禅山號）、遺局南遊東帰以来、道價被于九州、王道向化、以故不屈駕而擧視於名刹東山之篆焉、頃有陳氏外郎、京師所居號杏林、西遊之日、謁見于桂菴師、神交道契、雖然東西阻脩鴻鯉、鮮音耗、今茲夏末、安國僧徒往来之候、杏林製二絶、抒離索之懐、（萬情）仍請雒下諸名緇、令同（萬于）子韵、老拙任皇明入貢之節、留滞泉南、杏林遺書求屬和、顧往日既有識荆之雅、而同好宜減於陳公哉、初應其請、後篇寫區々老懐、解一粲於千里之外、

大明正使老釋桂悟拜

曼鑠今時一郝翁　名聲藉々（甚イ）播関中　杏林交義辱支許

海外九州曾向風

長安遠近日過（辺イ）翁　輦（寺）刹曾遊在眼中　桂子天香我同稱

梅檀薝蔔一家風

杏林老人、與余講方外交者、年久矣、頃作詩、投簡日州安国堂上桂菴大禅師、仍請洛社諸老、次韵同賦、兼見及余辞弗獲、疊和二章々奉寄、伏希采納、（呈）

宜竹々隠子周麟（名也、字景徐、）

陳郎扣寂説禅翁　置我諸山唱和中　世事紛々心在彼

葵花向日絮因風

桂翁先友是蘭翁　聞昔龍山（傾イ）會座中　前輩凋零吾老矣

洛陽寺々見秋風

桂菴和尚大禅師、廼吾龍山才望也、蚤還紫陽之閭里、

其齢幾乎越於古稀矣、孰莫来慕之歎也耶、先是六七十年、榮領於東山玉府之釣帖(鈞カ)、雪樵蘭坡翁(名景蘭)、製駢儷抒賀辞、寔九峯一疏也、繇是吾山故舊相議曰、如禅師、本是宗匠也、出而董席、則不亦盛哉、然而欲往勸之、則鯨浪阻海、狼燧塡山、比年矯首而候視慈航之来帰而已、今幸依陳公外郎詩韵、寄呈一絶、述眷〻卑臆云、指教惟求、

前龍峰松蔭景脩稿

壮遊如昨両衰翁　五十餘年離索中　不識此情傳(得)傳否

海南萬里鯉魚風

謾同陳外郎、寄桂菴和尚芳押、

鹿苑壽顕

海西珍重桂菴翁　赫〻声名屬月中　莫道遺賢今在野

徳香吹満九天風

洛下陳氏外郎、詩以奉呈日州安国桂菴禅師、予久願識荆、唯事説頂、是以擧於曩時、梅子佳偈頗為拙和

一助焉耳、電覽幸甚、

前天龍桂喆頓拜暮齢八十一、

誰圖遐裔有茲翁　才誉蚤喧稠廣中　吐出大梅〻子偈

至今「玩イ」禅味慕禅風

依陳員外郎韵、奉簡日州桂庵老禅師、一咲惟需、

雲頂野衲集樹磨滅不可讀、似樹字、以他本補、

人如日下豫章翁　桂隠秋高古寺中　可惜郷山久栖錫

道香郁〻麝當風

陳公杏林主盟作詩、寄日之安国堂上老師、洛社耆英賡其韵者、有金聲、有玉振矣、如余難措一辞於其間、雖然逼于杏主之命、賦者二篇、呈上安国堂上、伏求一粲、

「惠イ」南山無價軒主守擇(オ一作ヤ)、

九州不啻誦吾翁　禅道文章聞洛中　心鏡高懸無隔礙

看来千里是同風

杏林亭上主人翁　心在詩歌吟詠中　遙就老禅呈見解

天香莫隠桂華風

猥依陳公外郎厳韵、伏求一咲於桂庵大和尚、

寓恵峰令偉拜

支許論交此両翁　遠傳餘韵到山中　何時變化五峰上

虎嘯龍吟雲与風

日州安國堂頭禅翁、蚤辞龍峰、遠蹈鯨浪、而南遊矣、

敲名寺捜師家有年于茲、帰楫之後、薩州太守欽其高風、仰止法幢、猶如玉半山創保寧、而延眞浄蘇内翰、闢天平而薦「銀公」録山、化之被遐裔如斯而已、談者曰、紫陽一邦、私吾善知識甚不公也、出蒞大方、則天下必承其賜、誠矣哉、雒之陳公外郎於禅翁方外之支許也、適投一詩、奉問尊安、雒社諸老宿、輒有和、余亦瀆韵末、於戲桑漢哇姪、豈可並諸老陽白乎、匪不知其非、然而禅翁之旧難忘、陳郎之需、難拒之謂也、今也、海内叢林、凋零秋晩、在者残月長庚耳、所以御前龍峰虚席以竢、所希禅翁回象轅於熟路、而興龍吟鷲鼉寂、則吾山之光華也、嚮之談者論果合矣、諸老云、陳郎亦云、伏乞　慈削、

「雒岫イ」南禅栖院宗勢拜

留滞經年霜鬢(玉「翁」)　紫陽萬里海雲中　龍峯舊院少人住

黄葉満廊連夜風

日州安国堂上老師、才識両大、名實兼全、昨在龍門、馳譽於江湖之間、可謂一時奇衲也、遂帰関西、不出殆五十年矣、丙寅(爲秋)、即永正三年也、員外郎陳公寄之以小律一篇、余之於老師、雖無一日之雅、而望道風尚矣、因依陳氏詩韵、作一絶呈上侍机右、聊寓慕藺之意云、

玉府永瑾載拜

洛下聞人説阿翁　名章俊語品題中　九州皆識有坡老出壑松声十里風

次韵陳外郎見寄海南桂菴大禅師、

琴臺建孝拜

聲名耳稔海南翁　留在龍峯千衆中　夢掬道香覚猶郁簾前一陣木犀風

茲歳仲春之初、予徒自都下来、陳大醫下杏齋翁、製唐律一章為賜焉、非特此也、輦寺東西諸大老属和、合十有五篇、錦囊之重也、良有以矣、三薫而終日讀之、十襲而通夜誦之、琳璆珪璋、珊瑚琅玕、璨然光華、不得掩焉、使人不移蛙歩、而遊目乎玄圃崑(爲岡)之際、不亦快乎、剩詩中見推奬者甚厚、蓋公之餘論所及也、不然何以如此也、非翅野翁蒙寵遇、塞垣草木有光矣哉、於是不顧卑拙、挙厳韵者、同来篇之数、一紙載之者、竊具公餘之一覽耳、伏希察區々之意、賜恕容幸之又幸也、

諸老屈尊賢主翁　杏花四繞一亭中　聚星高會是何夕

海外光影碧落風　奉節朝辞魏闕中　此去明州三百里
皇華妙選釋家翁　大慈和尚尊韵
海無波浪一帆風
我門今不可無翁　恵日騰輝天再中　棄斥神戈一麾力
禅関主将自威風　仝
江海多年簑笠翁　曾遊因記多残中　君先命駕我従後
輦路飛(萬巷)花撲袂風　琴叔和尚尊韵
濁世曇花堂上翁　不居至貴至尊中　軒宜脩竹故蕭洒
秋晩叢林回古風
璉三今見再生翁　宜竹和尚尊韵
百篇詩上御屏風　筆滌(萬水)氷甌雪椀中　只為縉紳親口誦
眞如家法点胸翁　仝
訓鍊緇徒炉鞴中　拙偈見稱花衮賜
有誰説與耳辺風　少林和尚尊韵
萬年山頂獨尊翁　置我慈量廣博中　不是傾天争得及
西南極地馬牛風　鹿苑和尚尊韵
梅鳴和靖菊陶翁　蓮是春陵遺愛中　儒腐皈禅馨者徳
贈君霽月與光風　雲頂和尚尊韵
天下當時仰祖翁　来参継踵四門中　賢孫今有家法在
教海波瀾鼓動風　不二和尚尊韵

白髪為翁鷗亦翁　共閑送老海居中　芦花残照寫詩紙
玉唾天邊洒(萬似)以風　仝
禅枯文麗巧詩翁　世富(萬奇)寄才名刹中　童子能書纔十成
千鈞筆力座生風　天護和尚尊韵
往時輦下未成翁　君尚童群俊秀中　豈思炎齋鑠金夏
新詩落(萬手)午掬清風　栖眞和尚尊韵
鷺児飛去伴鳧翁　影並五橋春水中　詩興東山吟叩硯
薔薇滴露暁来風　雪嶺和尚尊韵
想像琴臺大雅翁　希声未必出絃中　傍人若問誰家曲
雲破月来松有風琴臺十境、　純和尚尊韵万壽

享禄五年三月十五日、前建仁後南禅桂菴和尚大禅師
廿五年之忌辰也、預於三月斯日、營辨供佛齋僧之儀、
昔僕侍和尚之禅室者歳□矣、以故述一偈以奉報法恩
云、東坡遊南禅寺詩、南禅芍藥七千朶云々、
巣松以安
五々光陰残夢頃　霊山久遠刹那辰　花開芍藥七千朶
今見南禅一色春
前南禅桂菴大和尚、昔年當遣唐使之時、列位於副使、
無心而渡海潮、於此時也、閲士毅之輯釋與曾端之詳

説者、再也三也、留而在姑蘇者久矣、歸朝之日、對諸徒據輯釋與詳説、講晦菴集註者、不知幾回矣、是即其諱辰也、因賦野詩以為報恩之一句云、（疑元和乙卯六月十五日事也、）末裔玄昌九拜、

憶昔吾師泛太湖　七年聽雨在姑蘇　泗洙流遠道將廃
又似扶桑水到枯

桂菴大和尚示寂之日、賦野詩以奉報師恩云、

憶昔吾師挑法燈　無心渡海道能弘　徳風凜（爲々）□百年後
起（高起）者争先六月冰

梅岳常潤在家、

三教成一同
通達玄々理
釋部竅空、
儒門君子翁
□　□　」

5

片時も早く写取りたく、かなはぬ手をハ走かし候處、甚麁毫にて氣毒之至候へとも、漸々夜前相すミ候まゝ、早々差上申候、御笑覧可被下候、

九月十日　（伊東祐之）潛龍堂拜
（伊地知季安）子静尊老

6

（別紙）

「辞世之高（韵カ）韵云尓
菩薩真賛、奉次

7

（別紙）

「日州安國寺事、為副（支便）司可有渡唐之由申遣候、領納候之様御意見可為祝着候、尚陶安房守・杉三河守可申（支上）候、恐々謹言、

十月六日　（大内）義隆判

嶋津豊後守殿　」

（本文書ハ「旧記雑録前編」二一三一号文書ト同一文書ナルベシ）

8

（別紙）

「就渡唐船之儀、先度委曲令申候、弥預入魂候者可為（旧本）□（望候）猶桂樹院可有演説候、恐々謹言、

閏（旧六）□月十七日　（細川）高國

嶋津豊後守殿　」

（本文書八「旧記雑録附録一」二二七号文書ト同一文書ナルベシ）

9

（別紙）

「□（正渡）唐就□□船之儀、先度委曲令申候、弥□（正預）入□（正魂）候者□（正為本）可□□望候、猶桂樹院可有演説候、恐々謹言、

閏六月十七日　　右京大夫高國（細川）

□（正謹上）□（島嶋）津修理大夫殿　」

（本文書八「旧記雑録前編二」一九二六号文書ト同一文書ナルベシ）

（七・八・九号文書ハ『史』二ハ巻三頭注ニアリ）

10

▽（島）　柳滴水野先生之招魂墓

先生歿距今百八十餘年矣、傳稱先生故参河人、姓水野氏、諱重治、柳滴其號也、上祖爵里靡傳可稽、或云其先世臣上杉氏、好善居相遍歴諸州、頗臻其妙、初吾慈眼（家久）公稟示現技於東郷重位、崇信特篤、至令封内皆學其技、故他衆技禁恣學焉、公薨暨寛陽（光久）公立、以謂大藩偏修一技、却似有闕、莫如乎使武夫各随所好、尚博綜衆藝於吾封内以備不虞、乃聞先生以居相馳譽於諸州、聘臣于藩、於是先生来寓本府松原山下、教授子弟以此技焉、正保明暦間、門人益衆、遂推尊稱水野流、平田監物宗浄・椎原柴右衛門國□・米良隼人重住等皆受先生得其蘊奥云、萬治二年己亥七月十八日歿于伏見、法諡秋山日孟居士、門人受其業聞于今者、有三四哲、而惟宗浄以高弟聞、其将入室也、雖屢往叩其門、先生謝辞、託事不遇、牆窺輒教化諸生不異平素、宗浄無以挾心、猶愈覃精凌寒冒暑、夙夜就焉者殆踰旬月、先生乃迎而曰、吾『以下欠文』

11

僧桂菴、字玄樹、後號島陰、周防山口人、不詳其姓氏、以應永丁未生、永享七年、甫九歳遊于洛、師事惟肖於南禅寺、當此時、建仁寺有惟正名明貞者、東福寺有墨（景）召名瑞棠者、皆不二岐陽之弟子、以博識称、（故又就甘二老）受内外學、嘉吉二年、年十六祝髪為僧、時維（惟）肖既老隠居山中、其院曰雙持（桂カ）、（桂菴之益本云、学者■集於其門、樂カ）師最　與　徐桂悟蘭坡　善皆一時名郷也、既學成而帰、卓錫長州永福寺、愈信宋學、雖讀倪士毅四書輯釋及永樂大全等、猶未知　先師（岐陽）施國讀、悉得註意否、於是乎、慨然欲求其要領、會有聘聰明之者、命　乃徴知名僧八十餘人、聚　寺仝賦大梅梅子、令賦之、以試其法、才鳴磬促之、曰云々、後四十年、永正三年天龍　和陳外郎

及此事云々、　大感乃　師名　乞　明

年元旦早朝大明宮及為賀、詩中及年歯之事、自彼安歳一以為

例示不忘其榮、云既而『以下闕文』

『右一篇、巻中不詳在何處、姑収録巻尾、且文字多難讀、

故闕如云』　△

12

▽シ

島陰漁唱文集目次如左

和秋月種朝公題靈巖寺詩序　文明九年丁酉閏正月中澣

和菊壽澤謝板首榮選偈頌序　○丁酉佛誕生之後　△會周府保壽和尚書

和隈部公詩序　丁酉之冬　△同　△同

敬室字説　丁酉冬節之後二日○　△會南禅長老之書

總州刺史源忠直公溪山佳處記○　△備後州西国教寺不動堂再興勧化疏

跋朶雲居士四書后　丁酉季冬十又三日○

明宗説　△麗島郡巡礼堂化疏

送大醫陳祖田詩序　辛丑十月　△菊墅説

懶鷗齋記○　△亨室説

送大醫竹田公歸京詩序　文明乙巳八月初八日○　○信叔説　明応九

△呈高麗　王書　文明十六年甲辰八月十七日　△竺芳説

雪溪字説　文明乙巳佛成道之日　△董仲舒説

中正説　丙午春正月十一日

△跋村菴簿書後　文明甲午　△鼎叔説　明応十年辛酉春正初日

送雲夢澤禅師之京詩序○

哦松齋之詩並序　長享二年戊申十一月日○　和竜種軒主喜翁禅老賦竹詩序

松雲説　延徳辛亥二月九日　△和賦數珠禅偈序　明応二丙辰二月上旬日

跋射騎書後　△巣松老人詩集序　永正元年甲子蜡月初日

△題三教図詩序

13

扨も古事探索も無際限物御座候、先日者四本正蔵ゝ方へ便を得、此先祖正蔵ハ木村探元なと莫逆ニて、享保七年桂菴石塔を致再建候人数之列ニ見得、有名之人ニ候間、何そ遺編ハ無之哉、人頼尋申候処、被寫置し古書籍段ゝ借得、此文集初而見當、造士館より先年御蔵本借入、引書ニして紀源も綴立候処、御蔵書ニも此冊者脱漏ニ而無之、時として詩序ノ下註に見于文集と有之、多年致一覧度ものと存罷在候即其文集ニ而、序説記跋なと十六首計之文章目録ハ無之候へ共、此通之文数、末ニ跋まて南禅和尚被書置御座候、大較文明九年丁酉、肥後之菊府へ留滞被致候時分より被著候文ニ御座候、其上第一緊

要之事ハ、此朶雲ノ四書跋文ニ御座候、是以文明九年十二月、於菊府為被書置文御座候、薩藩へハ翌十二年巳二月（ママ）應聘之事候へハ、猶肥後へ被居候時分より、四書和点者右之朶雲源基盛と申人へ桂菴之口授ニ而被為書候て、校正為被申筋ニ相見得、今般碑文等　先生へ頼上ニ付而者、最前奉備高覧候、文（　ま　ま　）入掌（ママ）仕候間（ママ）遅り

右之跋文ハ書写、貴翁様迄差上候間、篤と御覧被下、可成ハ早目ニ御遣、紀源之誤漏此跋ニ而御補正被成被下候やう猶又御頼可被下候、文之・如竹・喜春連（ママ）此傳来之次第被書置候得共、今更考合せ候得者、（ママ）書跋を祖述為仕旨ニ而、氣脈乏相成、如此現在自撰之文乍有之埋れ居、　先生名文未及脱藁内ニ不圖見出申茂奇縁之至、歡躍仕事御座候、倪士毅輯釋なとハ、明國へ被渡候上ニ為被讀ものと考之処、入唐無之内ニ四書大全迄も在洛之日ニ再三被讀候而、入唐之後ハ曹端か四書詳説なと註釋ノ粹者をよミ、学校諸先生之口傳をも為被得旨相見得、文之ノ與恭畏等ニ此事適出候得共、少〻意味違ひ申候、何分ニも第一早く可備御覧品、如此遅（ママ）候而者御屬辞之御煩ニ相成、甚恐多奉存候へ共、宋学首唱ニ何れ難仕（ママ）御座候、（ママ）宜やう被仰演御達可被下候、就而者惟正と惟肖、景召と景徐、皆各一人無疑事ニ可有御座、私之考ニハ、文之ハ桂菴より曾孫ニ候共、百餘年も後れ候て書記候ニ付而者、其間口傳耳ニて、決而誤も可有之と存、紀源者惟肖と同人之やうニ（ママ）置候、（ママ）自撰之文ニ、惟正諱明貞、景召諱瑞棠と御座候、（　ま　ま　）弥不及疑、御改正被下候様御頼可被下候、然者

大梅〻子（ママ）可為奉（後欠）

兼（誼カ）先生　　伊季安拜

島陰漁唱文集跋

島陰漁唱、廼　桂菴和尚外集也、其徒自薩州袖之以需、予跋其尾、和尚昔在龍峯之日、不能拍肩挹袂、三十年後、一千里外、遂晤語於卷中、可謂無邊刹界、自他不隔毫端、披斯集則波瀾浩渺（瀚カ）、鯨鼉出沒、不覚聳動視聽、成化四年随國信使、朝大明宮、與士大夫互相唱酬有之哉、是故四明洪子卿序曰、視是集則誠不在於華之作者之下、可嘉也、斯言以盡矣、予亦何言哉、雖然集中不載開堂提唱之語者何也、滄海恐有遺珠、抑亦遠侍者失却紙襖乎、吁可怪乎哉、　明應七年戊午重陽、前南禅黙雲天隠叟龍澤七十七歳、

島陰漁唱文集鈔

跋朶雲居士四書后

應永年間、南渡歸船、始載朱文公四書集註與周詩集傳、而達洛焉、恵山不二岐陽翁適禅儀之緒餘、導蒙昧於外學、或講魯典等、専原文公註、而凡正本國傳習之誤、只以其語易達、其理易通為耳、相傳謂、要新註之講義、實權輿乎不二翁也、洛東山雲龍惟正老諱明貞、位登南禅、恵嶋蔵主景召老諱瑞棠、為江湖名衲也、二老同出于不二之門、非翅精是書、人以博識多聞稱焉、予在洛之日、従二老門而聞義殆熟矣、固不得為不二之徒、私淑諸人焉、不亦幸哉、然後覽倪士毅輯釋、再也三也、相次閲永樂所進大全書焉、近又遊于江南、窺四書詳説其餘註釋粹者數部、其中猶有不得者、咨決乎學校諸先生焉、故雖大義未明、於章句訓詁之末、粗可以為童蒙之師歟、肥之菊府朶雲居士源基盛者其為人也、質直而好義、誠實而寡言、専妙乎書法、久為海西之名翰也、平日所手寫之經史、至堆于案満于架、分一毫於刀刁、辨微釐於魚魯(ママ)、唐柳公權所謂心正則筆正、筆正乃可法者乎、覽者咸謂、若蔡中郎之石經刻之石、立於國學而俾後生能書者法之可也、頃書四書本經付厥、子生徳幼童、旁加倭點、點者従予之所口授也、及畢功、就予需校正、偶以閑日、披飜數回、字裏金生、行間玉潤、使人為快、然者豈亦不得無石經之願耶、於戯人養子教之、之謂愛子、嘗許魯齋左丞、謂其子師可曰、吾敬信四書如神明、汝孩提時、便令誦習、於此有得、他書雖不治無憾也、又程子曰、學者當以論語・孟子為本、論語・孟子既治、則六經可不治而明矣、今也覩公之教幼童、與夫程子論學者、許子戒其子、何以有隔哉、況之子、鳳之雛、驥之種也、攸深希者、敬信四書、誠如神明、孜孜不怠、時誦習、必有得焉、是時也、大知四書六經之學、克興厥家、人孰不敬之、古人不亦謂乎、遺子黄金満籯、不如教子一經、公之志可尚而已、仍是正之筆、復渉乎多言云、

「文明九年也」丁酉季冬十又三日、

△

（表紙）

漢學紀源

下

漢學紀源卷三目次

桂門第二十九
儒俗第三十
舜田第三十一
潤公第三十二
月渚第三十三
一翁第三十四
友賢第三十五
南浦第三十六

漢學紀源卷三

麑藩　伊地知季安子靜撰

桂門第二十九

桂菴之遊諸州也、無所至而不受教焉、於筑後則源東谷、善豎方、於筑前僧書中、萬松山主、於肥後隈部總州、名忠直、菊府輔佐臣、桂菴贈詩曰、輔佐仁君累世同　塞垣草木識吾翁　朝々講罷國家事　詩律千篇談笑中、其二云、載道元依大器成　人如白璧價連城　一鄉好學九州化　能使斯文日月明、可觀知其人也、白石兵部阿蘇氏、巨擘臣、・僧月舟桐瀬人、・僧玄叢熊峯人、等日益衆、迨應聘於　藩、亦不獨三州士人受業、雲蹤萍跡之徒、不遠千里、接踵来聚、而其大者、為公族若國老諸名刹主、其小者、不遑悉擧、於公族則遠州勝久（忠国）大岳公第四子・薩州國久・匠作忠廉・豊州忠朝、竝島津氏、當時近屬、新納忠親刑部、國老則伊地知重貞防州、初左衛門尉此、・鳥取政秀播州等、自越後則長尾某、自近江佐々木永春、於薩郡邑市来龍雲寺玉洞・串木野冠岳寺宗壽・伊集院廣濟寺湖月大岳公第九子・妙圓寺愚丘・加世田保泉寺舜田・揖宿大圓寺説溪・山川正龍寺郁芳、府下則福昌寺守琮・安養院文傍・桂樹院玄章、於日州飫肥安國寺月渚・櫛間野邊克盛左衛門尉、

於隅州安国寺雲夢・吉田長隆寺耕月・了潭寺（今興化寺）、悦翁、従肥後雪溪、従肥前自擇、従筑前大年、自長門曄、自洛巣松及天用、自美濃玄勤、自上野釣雪之類皆出於其門、或醉師德而沒歯於藩、或業成而歸其州、各教子弟亦以此學、由是桂庵名聲藉甚海内、蘭坡詩云、學業傳聞至聖涯、桂悟詩云、名聲藉々播関中、又其序云、道價被于九州、王道向化、又守擇詩云、九州不啻誦吾翁、禅道文章聞洛中、此等詩蓋匪徒頌詠、實有以爾、而　國朝宋學之弘于世、亦首自桂菴、何者觀其仰慕、自遠方来學如舉前、可以証當時也、

儒俗第三十

宋書之人　本邦、蓋首乎僧俊芿等、多購儒書回自宋、（爲頭注）而其講學、據明編修官揭傒斯讃、故宋祖元赴日本招、（明當作元）謂海東諸國皆言孔氏、迨祖元行孔釋並隆、無遠不至、則始於宋僧等来、兼講儒書、可概知焉、於是乎、其聽受而稍崇信者、亦虎關・玄惠・空華・岐陽・一慶・惟肖之屬、多皆五岳僧、而孔釋並傳、各教其徒、則山崎闇齋譏玄惠及藤大閤等信程朱説、猶惑乎佛、亦為是故也、惟肖等以傳桂菴、故桂菴亦雖僧、在明精究朱學、有功于世、如述前篇、而吾藩世世相継、受其學、師一時者、月渚・一翁・文之・如竹等之徒、宋僧以来孔釋並傳者、凡三百餘年矣、由是　本邦之稱儒者、而崇宋説者、後皆沿襲、陽禿其顱、擬軀於僧、陰揭秉彝、講道於儒、遂為故事、其本蓋起乎皆隠釋而避博士家忌諱也已、而迨文敏（林羅山）林先生、以斯學大振名於　神祖創業之時、亦猶因循、至賜之僧官、始為法印、及他諸儒亦列制外、暨闇齋出著剃髪辨、始駁世儒、聞世儒言、雖曰従俗各飾之辭、實變於夷、而亂吾俗、皆出於無稽云、（爲）後稍省悔、迄元録（禄）四年、法印孫正獻林先生（名信篤、号鳳岡）、新承（爲）釣旨、還生其髪、由法印官、為大學頭、　國朝儒者、始革其遺俗矣、且應仁中、桂菴使于明、明憲宗成化四年幸値元旦、早朝大明宮、時四十二、為詩及歯、自是逝世、復四十年、毎歳旦輒莫不為詩必言歯者、示不忘榮云、匪獨自暢教、受業徒亦勉傚焉、至値歳旦、苟得唱和、則桂菴曰、今歳汝學進於前年、若不能者、反復誘示、如試業、然觀夫漁唱、可以証焉、而迨其徒分各歸諸州、亦皆以斯教授其徒、遂為倭儒法、大宰（爲德）夫曰、中華詩人鮮賦歳旦、而倭儒乃毎歳旦、必作衒名、雖流

俗弊、諸先生罪也、好古君子勿傚、幸甚、彼不知本耳、據此等事、以原濫觴、則　國朝之弘宋學於世者、多歸乎桂菴、亦足以証也、況如吾藩、民到于今、皆受其賜、若微桂菴、孰揭彝倫、闡聖學於文明時乎哉、

舜田第三十一 附舜有

僧舜田、字耕翁、薩州人、俗姓村田氏、左衛門尉經通次子、而國相肥前守經安姪也、天資淳朴、自幼為僧、受學桂菴、綜研内外、無弗洞徹、為桂菴所器許矣、大永中董龍盛院、（在今城地、圓室公創焉、以天祐為開山、舜田蓋二世也、慶長七年移今寺地、改龍為隆、）享禄元年嗣法天祐、（名宗津、乃大岳公庶子、）四年十二月、轉谷山皇德寺、（僧文昇代龍盛、）天文二年、後奈良帝敕賜耕翁、號智燈惠照禅師、三年十月、川上昌久（大和守）及實久等謀殺国老末弘忠重（伯耆守）於皇德寺、公如禰寢、府下緇素多離散焉、耕翁乃以弟子舜有、遁伊集院隱於谷口（小菴）、五年三月、梅岳（忠良）君復伊集院、兵勢大振、於是乎、君辟耕翁・舜有、與之砥礪、寵遇日篤、七年十二月、君及大中公（貴久）陷加世田城、先是薩州国久創寺于此、曰保泉寺、招皇德宥仙（名泰翁）、為開山僧、於是耕翁董保泉席、（今日新寺、）耕翁常娛吟咏、愛黃山谷詩、（山谷、名庭堅、宋人、嘗謂周子人品胸中洒落如光風霽月云、此人也、）嘗聽桂菴講山谷詩、賦詩求和、桂菴亦和曰、一宇茆菴四壁疎　君非老伴慰衰餘　唔呼答竹貫珠響　讀盡涪州（山谷謫州別駕、）内外書　西山納緑一簾疎　詩是緇郎禅緒餘　除却十年燈下讀　胸中自有不傳書、吟此等詩、則耕翁亦知以稱其襟懷有道氣焉、耕翁以授僧舜有、舜有別號三枝、亦薩藩人、夙志脱塵、師耕翁學、資稟顆悟、綜究内外、從師皇德、天文二年、桂門巢松見而奇之、名號三枝、為之頌曰、大樹元来大葉全　條林周遍刹無邊　不知繁茂在何處　根蔕分明空劫先、三年十月、奉師奔谷口、五年三月、迨　梅岳君復伊集院、辟耕翁・三枝、參學研究、寵眷特篤、三枝乃以傳之　君、　君乃環其所茇四至廣境拓刹居之、因摘　君號曰梅岳寺、又名其山曰福壽、乃命工彫刻　君肖像、（奠）窶諸其寺、賜田五町、永供寺産、於是三枝奉師耕翁為開山焉、初耕翁與秋月善、故煩秋月寫已眞像、又畫花鳥於金屏風（六疊一雙）、併之　君馬具、傳藏于寺、（寛文十年、）寛陽公（高徴）微秋月畫耕翁像及金屏風、命画工更寫其像、裱飾金襴、以賜之寺、於是四月、国老島津久通（綱久）承　旨、使福昌特峯記其事、亦授之、十二月、泰清公更賜金屏風、令易傳寺云、永禄六年十二月傳法舜芳、七年甲子二月廿六日化、曰當山開山三枝舜有大和尚禅師、

※（為頭注）

「永正十五年戊寅十一月十五日、耕翁崇祠軍神於保泉寺」

潤公第三十二

潤公姓島津氏、諱忠良、稱相摸守、老號日新齋、又曰愚谷軒、至後參禪、曰梅岳常潤、故摘為潤公、祖諱久逸、乃　公室九世大岳公第三子、而嗣伊作氏、是為善勝君、父諱善久、蚤卒、是為越山君、母新納氏、諱常盤、是為梅窓夫人、初桂菴之應辟也、夫人生七歲、迨其梓大學頒行於藩、年稍長性聰敏、而志（為於）于儒學、恒讀論語、（承應二年、川上久国所著與西福寺夫人傳、則作讀孔氏之遺書、今從新納譜、）既嘗歸于越山君、君未有男、欲夫人生、以為莫如乎為仁、乃博救衆、又禱金峯、逢白衣神人告生賢子、夫人夜夢金峯變飯入吾懷、而有孕焉、明應元年生男、是為　梅岳君、　君生三歲、越山君卒、夫人寡居、與祖善勝（為君）議、以為育君之道、莫善乎出就有德、七年二月　君稍髫齔、乃遊海藏院、受學頼増凡九年（為矣）、（乞永正三年正月、）頼増縄鞭善竭其道、又使新納漁隱傅　君翼之、漁隱亦匡弼以忠、遂至以使君善研精勤學、覃思勵行、踐履純實、而愈希聖賢之德、由是　大翁公（勝久）乞　君之男、立為世子、委　君政柄、大永七年、　公遜位於　世子、自營（為兎）免裘於伊作、移而禿頂焉、　世子享封、是為　大中公、於是　梅岳君夾大中公、（為徒）徒居麑府、乃亦削髮更號日新、未幾、公族實久作乱猾邦、語在舊乘、　君之號日新也、益救如竹嘗聞諸文之、以語其門人愛甲喜春曰、　君嘗聞桂菴講湯（王）【（磐恐盤ヵ）】磐銘、乃有感曰、湯銘諸磐、以戒其身、吾近命身、恒顧為戒、遂號日新、其德隆盛、多暢諸歌、恢拓政教、以垂萬世、雖前聖而無以耻、則本乎、由斯提誨、而醒起英機云、誠其然哉、誠其然哉、但桂菴則歿於永正五年、時　君年十七、聞其講説、非亦無謂、然號日新、據舊乘、繫大永季、則當必在舜田居龍盛（在今府城、）時、而聞其所講以取之也、而如竹曰、為桂菴恐舜田之誤爾、天文五年、　君及　大中公帥兵復伊集院、所向無敵、兵勢大振、乃聞舜田及其弟子舜有隱於谷口邨、乃就二老益研德焉、七年、　君進取加世田、遂移舜田補保泉寺、初舜田受學桂菴、嗣法天祐以傳舜有（六十二世）、舜有別號三枝、前此（天文二年）　君從俊安（田布施常珠寺）、既雖參禪受菩薩戒、而至與舜有尚精蜜窮其蘊奥、造養益深、胸懷廓然、一以貫之、千酬萬應、莫不徹悟、於是乎、舜有以是傳之

君、　君自稟學、寵遇日篤、乃環其所茇四至廣境拓刹居之、因摘　君號曰梅岳寺、抑　君之學術、遡其淵源、則雖出於達摩而入於石屋、顧務見性承其法嗣六十三世、仍事于佛眞如菩薩、然自舜田下、繩參桂菴之儒説、綜究内外、孔釋並傳、以授之　君、至　君一變至道、　君之稟生、粹美維鍾、磨以屯難、慨然憤發、奮乎百世之下、力學研窮、潛玩既久、深探儒佛之頤、不徒溺於徑約而陷於曠空之屬、不亦鶩於該洽而流於泛駁之歸、其坐右則懸聖蹟圖、惟精惟一、博約純熟、言行踐實、每應事接物、輒莫不必質諸聖範、而養民以政、肅之以刑、攷其所臻、則仁德日新、常潤其身、睟面盎背、其文章雖用倭辭、實與聖賢同其教誡、其将遊(爲迈)也、正易簀操、薨于永禄戊辰十二月十三日、得壽七十七、俊安為之頌曰、富潤屋蓮經壽年　文經武緯愜天眞　心頭性火發明後　三教功名屬一人、又代賢贊　君眞像曰、儒門君子翁　釋部駁空々　明達玄玄理　三教成一同、讀者玩吟、可以觀其通儒佛神之三教也、若夫天教及法華眞宗等之弊、浸潤至蔑神滅彝、則　英断既慮後世愚民利己眩惑、嚴設禁令、遏閉斯徒、初入乎　藩、其功業匪啻以化當時人、永至使三州士民咸趍正路、仰為所矜式焉、自君薨後四五十年、如天教則至　台德廟世、遂令於天下盡驅斯徒、由是　藩亦特遵奉之、以併眞宗竝禁封内、歲六月、則徧督戸口、求匿陷者、每六七年、修正版籍、謂之札改、赤崎教授貞幹、字彦禮、稱源助、之游肥藩也、藪孤山語焉曰、貴藩自古世不乏於賢君明相、觀其為政、先禁眞宗、勿内於國、擧此一事、佗亦可知也已、其徒動遁肥藩、至煽惑愚民以害乎政、然到于今、無術遏絶、又新伯剛之學冢田(冢力)翁、亦猶藪所語云、中井氏(竹山)所著草茅危言、亦悪彼等滋蔓塞路、屢辭而闢之、空言無施、且及負版事、如我　藩則既皆行之、以是觀之、可謂　先君之為政、實與後聖其揆一也矣、是則無佗、其本得非必由乎、桂菴曾闡宋學於我三州、如　梅窓夫人、亦讀論語、以夙教　君、善竭其方而有然乎、據是考之、斯文寖盛弘(爲)于乎天下、至如今日皆為其賜、亦豈其虚也哉、至如佛道、則興隆之久既如彼、而石屋時尤為盛矣、然猶且使　恕(元久)翁公至有世子而無世子、亦其高則雖如高、求道滅倫、所以與儒異也、若使桂菴倡宋學前於石屋、則　恕翁公縱令欽其德、安能僧一子至無後乎、

月渚第三十三

僧月渚、名永乗、（或作英乗、一名玄得、）齋號宿蘆、薩州牛山人、（牛山即今大口、）俗姓無傳、天性聰悟、幼志脱塵、緇服遊肥、随侍栖碧於清源寺、（在肥後、王名郡高瀬郷、正平三年、皇子懐良創建于此、以東福一鞏為之開山、其山号高瀬云、）時僧一枝構軒山中、賦詩善書、名満叢林、月渚乃従學焉、追業将成、一枝歿矣、然猶留遺軒、凡五六年、而一枝嘗與桂菴友善、故桂菴聞月渚端厚超衆、稱嘆之曰、昔仲尼没、子貢六年廬於冢（冢カ）上、月渚亦豈減其盡心喪乎、明應三年、在洛恵山司蔵鑰、而皈日州、四年春首有作、桂菴次其韵云、去載禅郎位轉機　恵山草木故光輝　摩尼撤向日州域　（（為郷友）可及）相迎驚錦衣、六年、初菊府僧雪溪負笈于薩、受學桂菴、文藻宏識、馳譽遐邇、九月、菊府使月渚来迎雪溪、回董清源、時月渚介雪溪得見桂菴、桂菴大喜、為詩送焉曰、孤錫飄然報遠来　開門掃葉小嵐隈　牛山有木古今美　桐瀬禅林用楚材　師門業在壮年時　好寄書巣借一枝　人逝筆亡無限恨　為君不説又憑誰、（按盛香集、桂菴學於明、回應辟、薦、奇文之材招為弟子、時文之年二十三云、計文之生當桂菴歿後四十九年、而年十三學一翁門、安逮桂菴乎、今觀此結句、似誤月渚為文之、若果月渚而時二十三、則應生於文明七年、少桂菴亦四十九年也、註竢考爾、）既而未幾、月渚辭肥還薩、師事桂菴、嗜學研精、胸襟高潔、雅好吟詠、桂門雖衆、咸推月渚為巨擘矣、凡遣唐船多泊於日州諸港、麗藩自古掌之出入京命也、間歳福島係公族忠朝（島津豊後）食邑、故擇儒僧備之簡牘、於是薦月渚董龍源寺、（在福島之市来、）特加寵眷、後轉安国寺、（在飫肥、）時亦忠朝邑、聚徒講學、根據師説、皆依朱註、門人日益衆、大永三年、管領細川高國承　幕府旨、遣相国鸞岡（名曰瑞佐、）及宋素卿為正副使、使于明國、兼啓通商、三月泊于山川、（薩州港名、）大内義興亦遣月渚及宗設、同使于明、而宗設等所駕船、先至寧波府、繫船十日、（一本作至四明、）素卿等船抵自後、然賂府令、其進謁也、素卿為先、宗設乃怒、刺殺府吏、時明世宗嘉靖二年也、乃捕素卿下獄、故月渚及宗設急發開洋、便信風還、而月渚主安国席如故、此行月渚遭不虞難、以急解纜、不覩西湖、為終身恨矣、且如學術、亦雖不至親就明儒以研造詣、追皈自明、徒衆愈盛、於是乎、　幕府特賜鈞帖補建仁寺、凡董安國者二十年、後老退隠于西光寺（飫肥、南郷、）天文十年辛丑二月九日歿于隠居、弟子受業者、安国一翁得其宗矣、與巣松等来往唱和、其詩多見巣松集等、至性行詳無傳可見、若為後學所欽仰者、觀文之歳値諱辰所薦詩文、可概知

焉、

二月九日、奉呈月渚大和尚眞前、見慶長十二年、　玄昌

惟德惟磬與歳加　名聲身後點無瑕　莫言叢社已凋落
枯木回春二月花

有感作當慶長十三年、　仝

教化陵夷左衽来　尤悲大道有多岐　叢林零落東西寺
月渚門徒知是誰

慶長庚戌二月初九、伏値前建仁月渚大和尚七十年
遠忌之辰、謹綴卑詞、以奉呈眞前云、仝

善行嘉言猶未泯　古叢誰敢訪遺塵　宿蘆亭下月沈後
默數年光閲七旬宿蘆、月渚和尚齋名也、

二月初九、即前建仁月渚大和尚示寂之辰也、謹綴
一偈云、　仝

教海禪河両括囊　更雖閲(閲カ)世德惟香　古僧(萬傳)房下燈将盡
猶了残經借月光

二月初九、謹裁野詩奉呈月渚大和尚眞前、見元和二年、

心月孤團照太虛　餘光至此更扶疎　羞吾無似傳何物
架上纔遺一束書

天文辛丑二月初九、吾師前建仁月渚大和尚瘞履之
辰也、是歳元和丁巳正月初九、樓(僊カ)指則七十七回也、
裔孫玄昌不勝追慕之情、謹賦小詩、以為報恩之一
句、兼示諸徒之在會裏者云、

人生七十七年忙　幾讀遺編淚淋浪　水月明樓拜眞物
至今猶有煥乎書

桂菴和尚之門人月渚者、詩文共熟之老古錐也、昔
時日州安國虛其席者有年矣、　征夷将軍賜建仁鈞
帖於月渚、月渚主住持之席者二十年矣、予之師一
翁者鄂渚之寵弟、而學於月渚之門、門以有一翁為
巨擘矣、天文辛丑二月初九日、不幸而月渚示滅於
南陽西光之寺、古籍百卷於今猶有存者、爾来守一
翁之塔者單(單カ)八年矣、罹国之　騒屑、離群索居、予
住正興古刹者十有五年、今也蒙　薩州殿下之命、
創大龍新寺於麑島故殿之陣迹、居止者七八年矣、
丁於戊午二月、月渚瘞履之辰、豈可不言詩乎、因
賦(萬村)村詩云、宿蘆者月渚和尚之別號也、仝

當榜宿蘆存故蹤　斯翁一代稱談宗　蜜雲不雨南陽寺
可惜終身作卧龍

一翁第三十四

僧一翁、或號二洲、薩州犬迫人、俗姓鹿屋氏、以永正四年丁卯之歲生、兄曰鄂渚、董龍源席、（以明應元年生、化於永禄十年正月二十日、年七十六歳、）一翁亦幼削髪為僧、稟賦穎敏、師事月渚於日（為州）之安国寺、月渚者桂門之高（為弟）第也、故一翁綜研内外、最精宋學、遊抵京師掛錫眞如、後奉鈞旨、陞建仁席、未幾西歸、補安国寺、永禄三年、明国福建道連江縣人、姓黄、名友賢者、為賦（賊）所捉、而寓於薩川内、其在明也、夙承家學、覃思周易、程傳朱義、莫不曉悉、筮驗如神、一翁與之傾蓋、道契日深、西土日東雖異方言、討論經義、互質迭證、渙然冰釋、多所與輔、遂為莫逆交云、十年正月、目井（日州地名）、延命寺天澤會下、玄昌年甫十三矣、賦歳且（旦カ）詩、辭翰両勝、天澤奇之、以為英物、非吾所能育、乃使之就受學於一翁之門、世所謂文之和尚此也、時一翁既謝安国、退憩龍源、（竝見前篇、）專以教授、樂暮齢焉、故其導文之等、靡一不随其材、以施之教、猶孔子於七十子、而導之誦經、或教學書、或習国字、以其理之易通、其事之易達、欲使之各随其材賢愚、皆成其德、以為世之用焉、恒誨之曰、人之為學、汝知其（為要）悪乎、蓋不但為通文辭而辨世用、所以切實學其為人之道也矣、其學焉者、以事父之孝、移之於君、則為之忠、以事兄之弟、移之於長者與朋友、則為之順、為之信矣、皆在省求之於吾心涵養德性而已、若其舍之、雖徒求外、豈復何有得哉、故其居常教弟子、亦要進退周施（旋カ）、必中禮、動（為援）聖語曰、行不履閾、其必愼之、（見文之所為詩序、或勸學文等、）善誘後進、叮嚀親切、多如是類也、天正元年飛錫隅州、栖居神護（在加治木、）三四年、文之徙焉九年、先是文之業成、遊學京師、至是西歸、二月、一翁乃薦文之監二龍源寺一、（在福島市来、為時）藩士伊集院下野久治地頭焉、益就閑散、年八十六、歿于文禄元年壬辰十月五日、（一説十二月廿八日化、文之為二初祖忌之日一、）弟子受業、莫出文之右者、故終身欽慕師德、見其文集、

奉レ呈二一翁老師眞前一、

天下有達尊三、曰德、曰齒、曰爵、有其一者世以為少、況併其三者乎、吾師一翁大和尚謂其德、則詩禪俱熟、謂其爵、則始住日州安国、中住京師眞如、後住東山建仁、謂其齒、則踰八十者六、豈非併其三者乎、先是壬辰初祖忌之日、唱無聲之曲矣、爾来默數一十五年于茲矣、是日虔備澗溪之芼、焚婆律之香、

以伸供養、因賦狂偈(拙力)、為報恩之一句云、(當慶長十一年、)

末裔玄昌拜

為報師恩難敷宣　澗溪荇菜水沈烟　自栽墓柏成叢社
啼向秋風十五年

初祖忌之日、伏値我師(為前)建仁一翁大和尚示寂之辰、
綴野詩一章、以充報恩之一句云、(當慶長十三年、)　仝

憶昔乘雲歸帝鄉　煥乎至此有文章　欲報恩義用何物
一朶梅新一辨香

謹綴野詩一章、奉呈一翁老師大和尚眞前、(當慶長十八年、)

仝

白髮残僧掃影堂　師翁去後幾星霜　信言久遠猶今日
德與梅花一樣香

吾師一翁和尚教授於鄉校者年尚矣、於斯之時、国家兵争、而書生亦不不得習而熟矣、若予之輩、久雖侍於絳帳、而不得入其室、所學者章句訓詁之末耳、可羞之甚也、今當諱日、誦昔年訓導之言、裁詩一章、奉報恩義之厚一云、(當元和元年十月、)　仝

吾師教授幾(為春秋)〔秋春〕刮垢磨光恩義淳　訓導遺言如在耳
不通(為古今)〔今古〕不成人

謹綴野詩一章、奉獻前建仁一翁大和尚二十五回諱辰
法席、(元和二年十月、)　仝

五五年光端的移　古叢凋落又憑誰　釜甑不爨脩無物
纔采蘋蘩薦我師

黄友賢第三十五

黄友賢、明国福建道連江縣江夏郡人、其先出自顓頊玄孫陸終、終後封黄、因以姓焉、友賢生於明世宗嘉靖十七年戊戌之歲、(本朝天文七年、)三十九年(永禄三年)為賊所捉、歸化本邦、時年二十三、初其舶至薩川内、故寓入来、而後漂泊於薩隅日間、其在明自幼(為受)承家學、尤精易筮、少一翁三十一年、而友賢與一翁善、恒来往、講程朱之學、文之幼侍一堂、故亦獲以與有聞、而曉通者多云、天正十年、(義弘)松齢公戍八代城、(在肥後州、)十二月、召友賢卜筮焉、遂擧禄仕令恒講學、朝鮮之役亦列従兵、慶長元年、明神宗遣遊擊沈惟敬、使於　国朝、時友賢従　公上伏見邸、惟敬邂逅友賢、異其未死存於日本、特加慰勲、繇是人皆知非庸族、　豊太閤亦聞、乃将擧任官、而命公且以促之、友賢辭曰、未知国典、於吾明、為臣事二君、所深耻矣、臣雖不敏、既已委質、臣於　藩公、願

守吾道、固執不肯焉、　公以報　太閤、　太閤大感、
聽如所願、又
神祖之臨　公邸也、及諸縉紳開詩歌筵、以資雅興、友賢
與焉、（見侍豎板垣卜齋所筆書、）當是之時、京師晩生、學易若詩者、
莫獨不師友賢而承教焉、名聲藉甚京洛、至升聞
天朝、勅賜筮木、加之親王道澄亦賜之號、曰環溪先生、
或陪聖護王、謁精雲精舍、賦詩、王命也、四年在　藩、
三月、　慈眼公手誅叛臣幸侃於伏見邸、初其謀事也、
使帖佐宗□（光カ）彦左衛門豫還藩、陰命友賢筮之吉日、七年冬、
公築今府城、亦命友賢、豫卜其地、且經營之、友賢乃
齋戒薫沐、告諸天地鬼神、而卜筮焉、曰卜筮皆吉、宜
國家永久公胤昌盛也、但恐火難耳、然鎮火法、宜祠靈
符以防其難、乃從其言云、（後歴數年、寛陽公令出靈符、賜曾山恕心、祭諸其家、既而　大玄公時、）
元禄九年　府城火、筮驗如神、至
曾山氏、因弟子丸宗武陳其所聞、（吉貞）浄国公時、碇山道鐵聞靈符嘗祠於公乃徴靈符、復祭之　府城、如友
賢言、而命木村探元、（別〈副〉寫一幅、）賜曾山氏、尚祭之家、亦如故云、事見浦波、但友賢作自閑誤、十二年、　松齢
公自帖佐徙都柁城、復命友賢、豫卜其地、而經營之、
身亦從遷、食禄三百石、家列士班、以江夏為氏、其在
明所居郡名云、十三年正月、朝　公賀新正也、十五年
庚戌七月二十三日歿于柁城、享年七十三、葬木田郇實
窓寺、題曰黄翁環溪先生江夏氏墓、生子筑前守、後稱
二閑、夙継父業、亦精易筮、不墜家聲、嗣禄三百石、
寛永九年、籍載三百二十二石、門人愛甲喜春受其學、自有傳、

悼友賢黄先生　　釋玄昌

無不人言失此賢　一朝傳訃涕潺湲　聲名身後潔如玉
遊戯斯文七十年

（〈爲〉ココニ記事アリ、巻末ヘ移シ記ス）

南浦第三十六

僧南浦、名玄昌、字文之、薩藩人、軒號雲興、齋名時
習、南浦其號也、又別有懶雲・狂雲等之號、俗姓湯佐
氏、（一説和仁氏、▽〈爲〉王仁子孫多在河、其為子孫亦未可知也△）其先出自源族、父名無傳、故
河内人、避亂漂泊、抵日州福島、娶里人女、弘治乙卯、
生文之於州之外浦、（在飫肥南郷、○盛香集云、文之生于隅州串良大塚、恐非是也、）因號南浦、
少一翁四十八年、天質穎敏、幼異群童、夙有脱塵之志、
父知其有法器、永禄三年、囑諸目井（日州地名、）之延命寺天澤
和尚（名崇春、又改不閑、日州飫肥人、従雲夢於隅州安国、大永七年、遊足利學肆業五六年、後至越前請益一柏、砥礪十餘年、弘治二年西歸飫肥、董西光寺、後構蕃室於延命寺、以卜筮為業、年六十一、化于永禄十二年、雲夢、名崇澤、薩州伊集院人、公族熙久之第四子、領隅安国、亦請益桂菴、既建長席云、）時生六歳矣、而父回河内後不復逢、故
文之惟知有其母、不知其有父云、（父死於正月十一日、今失其年、法號大圓淨智、母

死于文禄元年十一月廿八日、法名歡中大姉云、按畠山譜、盛淳之父曰橘隠軒、本河内巨族、天文八年、年三十而出京師、遂寓薩藩、于時河内人遊佐幸雲・杉原某亦從来云、所謂湯佐疑此人、天澤授之法華、觸眼為誦、頗通其意、(爲)旦指地畫所誦文不差一字、楷正可觀、隣里呼之曰文殊童、十年正月年十三、而為歳旦詩、天澤奇之、以為實是神童、非吾駑材能所可育、乃使之就學一翁於市来日州福島龍源寺、一翁者桂門月渚之巨擘也、於是薙髪受戒、名曰玄昌、而所為詩往々競傳詞林、膾炙人口、竟至京師、乃相国寺仁如生於文明十四年壬寅、等、大賞其材、與文之號、且賡韻序以返焉、

文之號

薩州龍源寺一翁老禅、會裡有穎利幼童、今茲十三齢、元旦試筆、佳什自書者、遠得落予手、辭翰共有老成典刑也、賞歎餘、依芳韻者二首、供老禅一笑、少年其諱玄昌、予雅其號、以文之二字稱焉、蓋天上六星、以北斗魁取文字也、所冀與眞浄文関西、同其稱呼、以為後来衲子摸楷、或規或祝、前篇為後信起本、後篇述雅號之字義、

鹿苑老衲八十六歳集堯仁如

傳見少年詩律清　奇才可畏遠邦生　若通書信比相對

千里同風宜寄聲

錦心繡口織成清　為絢皆従機巧生　他日要看公簡冊

持来擲地有金聲

由是一翁字之曰文之、馳名叢林間、受四書及三體詩等於一翁、盛香集云、桂菴聞文之有材器、自招為弟子、時年二十三、季安按、桂菴死時、一翁僅二歳、而文之猶未生、則疑誤一翁為桂菴也、然文之時二十三云、亦不合焉、抑一翁之師月渚、亦有材器、桂菴賞之、見島陰集、疑是之誤、姑註族考爾、一翁之教文之也、以章句訓詁之學、朝習學論文、暮撿廣玉字、使以知一大為天、土也為地之類、前此明人黄友賢見上、歸化薩藩、以學識聞、尤精易筮、一翁與之善、屢因来往、至文之親得承謦欬、誘掖薫陶、以啓愚蒙、友賢亦異文之英材、特加訓導、以學必有孔孟濂洛之道云、十二年、文之年十五、負笈遊洛、謁僧熙春於慧山之龍吟菴、春一見其器宇俊爽、甚敬重之、乃許入室、凡每有論難、輒雖微以詰、應對如響、莫秋毫滞、春喟然嘆曰、汝眞英物、佗日能弘吾道、必克勉焉、遂掛錫於本山、服勤者十有餘年、行状作十五年、然與還年不合、文藁教箋、充棟汗牛、博綜内外、深究蘊奥、既而西歸、元亀二年、文之有兄二人、長某為信長死於河州高屋城、仲某為僧、死于叡山之難、天正元年、従一翁移錫隅州、居神護(柁城)者

三四年焉、五年、伊東侯(義祐)出奔豊後、日州侵地悉歸我藩侯(主公)分遣将卒、鎮戍諸城、伊集院久治(下野守、号抱節)、徙地頭於福島、九年二月、一翁聞于地頭、以老謝事、薦文之領龍源寺、(在福島市来郷)、於是一翁年七十五矣、後文之轉錫於隅之高山少林寺((為)師)・日之財部正壽寺等、當此時、我(義)貫久明公聞文之以儒學振名于世、招而董席於隅州正興・安国之両刹、十二年三月、公親帥師次于佐敷、遣公弟家久、帥兵往救有馬侯、二十四日、與隆信師戰于島原、大克之、獲其首、四月、文之獻書賀之、十九日公賜報翰、既而兼充顧問、寵遇日渥、政策教令、多所裨益、十四年正月、及鎌田政廣(刑部左ヱ門尉)使于京洛、因細川幽齋請　豊太閤廣藩封疆、語在邦乗、二十年、初遣唐船多泊薩山川、故擇儒僧、董正龍席、備之簡牘、則桂門郁芳以下、月溪・問得之屬、皆精儒學、於是　太閤使幽齋来巡封内減寺(祐)((為)社田)、如正龍寺以簡牘功、特給寺田(五町四段)如故、而問得等益勵儒學、教授子弟、以四書等、昔年四書之入國朝也、東福岐陽首施倭點、而迨桂菴回自明國、頗加脩正、以至文之、文之亦間改正、以授徒弟、故如問得等、吾藩當時授句讀者、皆以其本、文禄二年、妙壽院惺窩自武皈洛、讀性理書、悼四書新註未有和訓、忽欲學明注之倭點、自筑開洋、舶遭暴風、漂到鬼界島、(即今硫黄島、隷薩河邊郡)、冬出自島泊山川港、偶見問得於正龍寺、聞其授新註和訓於徒弟、大異乎心、假而誦玩、無所倭點不稱其義、乃問僧等皆對((為)曰)、吾文之和尚所點本也、於是惺窩歎伏曰、今将渡明、亦惟無他求之也已、乃請問得、悉寫而歸、世以惺窩為儒宗、亦實始乎此矣、慶長四年、文之從　松齢公上伏見邸、文禄役有征人齋周易大全二冊、回自朝鮮者、文之乃購、又之((為)頭注「寫次作嗣寫、如何」)他邦得一両冊、猶未完備、雇人寫次手施倭點、至是二月遂竣其功、自又跋焉、(後二十九年寛永四年十一月、門人如竹所錄梓本此也、)本邦周易大全倭點、以此為原本云、文之在洛、講大學章句於東福寺、聽徒多聚、(見盛香集)、於是乎、

後水尾帝(行状作慶長帝)、亦聞其鳴學識、　詔内講新註於　禁廷、而愜

皇旨、會有廷臣言事者曰、惜哉、師雖博識宏才、亦産西陲、詞辨鄙陋、頗文飾少、安得能達

天聽乎、文之聞而心懐慙愧、乃謝焉曰、宜哉言也、佛其有言云、生王都難、詩不亦曰乎、邦畿千里、惟民所止、

其是之謂也、（行状無年月、併書此、）是歳三月従　慈眼公、如高雄
山、屢賦詩、　命也、五月従皈于藩、暫寓隅州、住正
興寺、八年五月十九日、　神祖（鈞）鈞帖補筑前禅光寺、六
月十八日復　賜（鈞）鈞帖、轉大隅正興寺（四十一世）、開堂拈香為
熙春嗣、凡所行禅規寺範、一則慧山、前此備（宇喜多）前侯秀家
来奔于藩、至是八月、　公請赦於　神祖、使桂忠詮護
送如駿府、文之副焉、六日俱發牛根、二十六日、　神
祖復擧文之、為住職於相州建長寺、二十七日、及忠詮
以秀家至伏見、使事竣、乃拜（鈞）鈞帖、往董主席、升堂
提唱、詞海辨河滂湃弗竭、丕振祖道、殆踰古矣、九年
二月　公召文之、講學於　府城、又召東郷重位試劒技、
乃二十八日、文之跋其書、　命也、十年八月、　貫明
公命撰　松齢公・（久保）一唯公小傳、恩賚特多、為詩拜焉、

奉謝　龍伯（義久）尊君頒茶、

昔日邇英頒棟梁　我今何幸侍官家　譬之巨海海還浅
恩意惟深一碗茶

龍伯尊君賜予以墨與筆、詩以奉謝厚意之萬乙云、

筆墨由来出處同　古今司戒幾成功　文房併見辱君賜
十襲珍蔵笥篋中

端午賜衣即事、

偶逢蒲節鬢吹（蓬）蓬　幸入公門更鞠躬　細葛含風君子賜
恩榮何啻杜陵翁

十一年正月、及郭理心等従　慈眼公朝于京洛、三月舟
行値雨、　公賜文之國歌、乃獻詩拜恩、

想像廬山一草菴　昔年聽雨更難堪　篷窓今我喜無寐
拜誦歌篇至夜酣

四月、　公拜　神祖於伏見、此月、命文之跋射義書、
六月　公猶在京、従詣御簾藥師、値雨賦詩、

半日閑談一雨過　洞簫如綫又如歌　不従尊駕敲閑院
奈此昏蒙溽暑何

此月十七日、　神祖賜　公諱取改家久、文之為詩恭獻
賀焉、

莫言東洛隔西州　同氣同聲程豈脩　自一交盟結金石
國家久遠幾千秋

九月撰鉄炮記、代種子島久時也、十二年八月、撰日州
平治記、亦　命也、十三年、　公及　松齢公新蓮金院
於高野山定宿房焉、初　日新君得聖蹟圖、製為屏障、
恒置座右、以備觀戒矣、乃孔子終身之履歴、而明張楷

所贊也、　君既物故、傳至　貫明公、憫難遽解、命文之別為謄寫、施之倭點、又以国字為和鈔、以恵後生、而迨　公時、以為與私一家、孰若弘祖業於永久、以公諸世、乃命畫師日野等林、摹寫其圖、蔵之高野山、欲以使後裔永仰聖徳也、亦命文之、記其事焉、十四年三月、　公遣樺山久高、帥兵往伐琉球、四月取之、七月、久高等以王尚寧還、八月、　貫明公召賜王宴、文之陪焉、初桂菴受四書集註於南禅惟肖等、皆岐陽所和點也、而桂菴渡明留學七年、以其所得、多改乖誤、以授月渚等、月渚以傳一翁、一翁以傳文之、文之亦間改正以授徒弟、　公及士大夫遊其門者、問禅者少皆受朱註、由是三州靡然嚮風、緇素雲集生徒満坐、至無所容、文之亦循々教誘、未嘗之拒焉、然於海内、清家倭點、當時盛行、朱註倭點、専行於吾三州、加藤惺窩(如力)雖寫而回、乞姜玩跋、以教其徒、天下未徧知有此點本也、是歳十二月、京僧恭畏(法輪院主)者客於隅府、疑文之和訓異乎故習、大誹毀之、二日、介僧順泉(清水寺)等袖集註来、敲正興之門數而問之文之、雖據朱説以詳答之、深泥舊染猶多乖角、故文之亦舍而不復焉、於是恭畏以清家點彌為正義、往々趨謁貴戚權門、匪啻駁其異古點、十五年、遂著破収義(一萬三千六百餘言)、誹詆集註和訓之多乖字義、十一月、文之亦著砭愚論、或寄書牘、悉辨駁之、世所稀存古板、曰恭畏問答者此也、

與恭畏闍梨書

京城城西、有古招提、其名曰法輪、虚空蔵菩薩所出現之靈地、而道昌僧都所行道之浄刹也、頃修其香火者有一闍梨、其名曰恭畏、小野仁海之末流也、先是以事流蕩於日隅二州之間者、三霜于茲矣、於是蜜宗之同流、随以傳其蜜印(衛印)者不為少矣、去歳己酉秋之仲、訪予於正興古寺、即擁箒迎接、半日閑話、話及文學之事、予聞其言之富、偏疑其文學亦有成、我心好之、到處逢人、説恭畏闍梨之為人匪翅傳仁海之蜜印、(衛且)且解文字者、亦無慚於今世之士矣、是歳庚戌秋冬之交、恭畏留滞於斯地、而投宿於同流之草庵者一両月矣、於是講蘭盆之經、無貴無賤、無長無少、無不陪其講席矣、經乃宗蜜之所疏、元照之所記、記與疏、半述儒教之義以釋焉、今恭畏所講説者、宗蜜之疏而已、然後講日本官職之鈔、數

引論語、其中非毀集註之異和訓、其意在難予之教童蒙之義、有人告之於予、予為不聞者、一不誥問矣、一日恭畏閣梨携總持院甚堯・清水寺順泉、敲予弊廬、予即出而接之、於此時也、恭畏懐論語集註、出之謂予曰、集註和訓、背字義者、惟夥矣、予問之則曰、五十作卒一字者何哉、和訓直作終卒、後世作文者、以五十字為卒字可乎、予即應之曰、朱子按史記云、孔子晩而喜易曰、假我數年、若是於易彬彬矣、是時孔子年已幾七十矣、五十字誤無疑也、朱子之所註何背其義乎、恭畏如聾而不少解焉、又曰、雖蔬食菜羹瓜祭、瓜作必者非也、又曰、沽酒市脯不食、集註以為沽市皆買也者、朱子之誤也、買作賣可也、又曰、不問▽㊟於其△父母昆弟之言、間為間隔之義者是也、間為別異之義者非也、又曰、以其子妻之、子訓女子者非也、子男子之通稱也、可訓子、而不可訓女子也、使此和訓導後學者、恐是陷於迷冥之中、其色勃然、予緘口語於心云、彼浅議(㊟識)之人、深着故習、聞不能解者、捨置而不答焉、古之道也、即下氣柔聲而謂恭畏云、集註者、五百年来天下書生所從而學也、名儒碩德、無問然矣、▽㊟予今教童蒙者、受之於師、非我一人之私言也△恭畏亮察焉、既而日漸将晡、恭畏告歸、予送之(㊟於)華門外、一揖而相別矣、爾来恭畏每逢人誇己之長、説予和訓之短、非獨告我同流者、告之於諸士、以長傲(㊟且)遂非矣、予聞之、不得已而把筆辯焉、夫論語之為書也、昔者有齊論・魯論・古論之三、漢張禹合魯與齊之論為一、至鄭康成以魯論考之齊論・古論為之註、三論合以為一、至於後漢曹魏氣象萎薾之時、南陽有何晏者、為之集解、原夫聖道之行於世、有晦有明、蓋自周衰孟子沒、斯道晦盲、若夫濂溪周先生、生乎千五百歳之後、継不傳之正統、再興斯文已墜、誠天之所畀也、斯道之晦盲、至於斯時、煥然復明於世矣、周子傳之河南二程、二程傳傳、至於朱子、而斯文益明、朱子為四書集註、集註出後、何晏集解、靡一不泯矣、按翰林胡廣進書表云、自王道衰、異説蜂起、燔烈於秦火、穿鑿於漢儒、一切趨於荀且、夤縁故習鮮克正之、夫否必有泰、晦必有明、繇夫濂洛関閩之學興、而後堯・舜・禹・湯之道著、悉掃蓁蕪之蔽、大開正學之宗云云、此進書表者、天下名文也、恭畏未掃蓁蕪之蔽、不赴正學之宗、何下觜於此間乎、大凡四書六經之古書、經歳

月久、不幸有誤其字者、有脱其簡者、後之賢者患斯文之湮晦也、不改經字、而唯曰、其字當作某字、而取義於某字者、不遑枚擧焉、大學曰、在親民、▽(南)程子曰、(為頭注)「季安云、親民下有脱文、可以良本補」親當作新、而取義於新民、後生作文、不聞親作新、又曰見賢不能挙、ゝ而不能先、命也△程子曰、命當作怠、後學之作文、豈以命作怠乎、五十作卒者、亦取義於終卒而已、後之學者、製詩與文、何以五十字作卒字乎、(南)旦夫瓜作必、沽訓買、間訓異、子訓女子者、詳在集註與大全書、欲一一説其義、則予似好辯、恭畏雖眊於其學、請咨詢於識者矣、夫文字者載道之器、而牽於義趣於類、則雖一字、含衆理矣、其為用也、要明其理、不能明其理、雖多亦奚以為、是故有釋門之徒、具正法眼者、能明其理、則以文字為古人糟粕也、我達磨大師不立文字、不立文字者、恐人之不理會斯自己一大事、而執滞於文字也、所謂得兎忘蹄、得魚忘筌者也、雖然學者若不深於斯文字者、何以有傳道受業解惑、而達其理之蘊奥乎哉、今恭畏之所學、僅為訓詁之學而已、學者(南)而泥於訓詁者、知道者之所以深耻也、韓吏部曰、小學而大遺、吾未見其明也、其斯之謂與、嗚呼恭畏拘於舊聞、一無新得、則何足以為人師矣、若夫口學語、則三歳童子也、是道得、若不自得、則八十老翁亦何解其惑、而知其至道之妙乎哉、予平日見人之不分秦奉、不辨刀刁者、非特告之童蒙之在吾門者、己亦恐有此誤、使其人聞之、欲其誤之不顯於外矣、想夫有庸流者、使之告恭畏、恭畏不攻之於庸流之不遷善悛悪者、而攻之於予之欲盡忠補過者、何其惑之甚乎(南)哉、我今説集註和訓之權輿、昔者應永年間南渡歸船、載四書集註與詩經集傳来、而達之洛陽、於是恵山不二岐陽和尚始講此書、為之和訓、以正本國傳習之誤、當是之時、東山有惟正、東福有景召、二老時之名衲、而同出於不二之門、匪翅精此二書、人以博學多聞稱焉、我桂庵老師從二老而聞義殆熟矣、大明成化年中、我桂庵老師南遊大明、在蘇杭之間者七年矣、於斯時也、覧倪士毅四書輯釋・曹端之詳説・其餘註釋粹者數部、猶有至理之未得者、咨決於學校諸先生、其理彌熟矣、歸朝之後、結草廬於薩州麑島、緇素之從而學者、不知幾多人矣、其(南)中有一月渚、達其奥義、我一翁老師在月渚之門、聞義熟矣、至於章句訓詁之末者、予亦久随侍於一翁師、頗解其義矣、今也、恭畏(南)尓忘己

量之所稱、欲指集註和訓瑕疵者、蠡而測海、蚍而撼樹者也、甚矣、恭畏之不安分也、(補且)且復未理會文字、而欲汲汲於名者、非貪而何、禦人以口給、勃然而變乎色者、非瞋而何、不覺己學之卑陋、而有欲上人之意者、非癡而何、闇梨而不離貪瞋癡者、釋門之一罪人也、爾不聞黔之驢乎、黔州元無驢、有好事者、船載以入放之山下、虎見其形之厖然也、以為將噬己、而蔽林間窺之、既而聽其一鳴甚恐之、近出前後則僅蹄之而已、虎喜計之、以為技止此耳、因跳踉大嗥、而断其喉、噫形之尨(補厖)也、類有德、聲之宏也、類有能、向不出其技、虎雖猛、疑畏卒不敢取、恭畏爾其形尨(補厖)、其聲宏、而出此躁妄之言、人皆知爾之技止於此、若不出其言、人皆恐而畏之、自今已往、猶未之思而出此躁妄之言者、被虎嗥也不難矣、熟觀彼之行履、為轉法輪乎、為摧法輪乎、振錫於東西、求一識於公卿之門、幸有得識者、自負其才、以為我學已至、矜己之能、蔽人之賢、匪翅講顕蜜二教、雖曰聖經賢傳、强其所不知以為知矣、其亦謂國無人乎、往往與人商論、好己(補之言)〈言之〉勝、欲及怒於人者、水中之蟹、而不啓蒙於己者、井底蛙耳、恭畏恭畏、吾嗟爾之不知、尒以不知為(補知)〈、則爾之所説蜜教亦以不知為知、然則酌仁海之清流而掘其泥、以陷後生於濁流之(補中)〈中〉矣、爾今以恭畏為名、而其行不恭畏、我今説二字之義、爾傾耳聽之、和從不逆、謂之恭、懼而心服、謂之畏、夫名者實之賓也、其言悖而其心不服、豈復可謂當其實乎、無其實者虚名也、恭畏年踰五十、惑虚名於華夷、可羞之甚也、戒之戒之、出乎爾者、反乎爾者也、尒以蜜為宗、若約其宗深秘而不出斯不知之言、誰敢侮爾、古曰、禍福無門、唯人所召、今我卑詞、使爾罵且辱者、爾之所召也、書以贈焉、慶長十五年庚戌十一月日、雲興散人(補于)書於正興室内、府士本田助丞所蔵古本、書於之下、作隅正興古寺、今從古刊本、題曰恭畏問答、而収其中、蓋門人如竹所刊也、

文之雖陽居釋門、然其實則自任朱學、山崎闇齋所謂南浦自謂信之、亦尊佛云是也、而有功於(爲新)宋註未行之時者、多如此類也、今厭繁冗、亦足証當時、故載原文焉、如砭愚論亦可併讀、知時人專依清家點也、十六年正月猶董正興、十日、朝　松齡公於柁城、　公賜之宴、賀正禮也、凡居正興十五年矣、先是　大中公城于麑府、徙

而治焉、謂之御内、迨　龍伯公（即是貫明公、）徙富隈、使　慈眼公居〔御内、後〕（爲之）至　公築今府城、姑為廢宅、於是〔命創寺其址〕（爲公壞其宅就創寺焉）、招文之居焉、（爲茲）愈崇〔信之〕（爲其德）、恩眷日隆、

▽（爲）而命其寺△因　二公所居址、（爲遂）摘其〔両號〕（爲字）曰大龍寺、

二十年、得黄石公素書、乃王氏直説、而昔人所寫本也、又得朝鮮板宋張商英所註本校正補訂、別為騰寫、施之倭點、潤六月跋焉、元和三年正月　公詠歳旦、文之賦詩奉和之、

山河帯礪約相親　天下一無遺佚民　不動干戈邦内静
老翁幸遇太平春
游藝依仁和氣新　農工億兆悉稱臣　蓋時蓋世年雖富
持獻吾君不老春

三月　公如江戸、文之送　駕、皈自京泊、四年正月公賁臨寺、文之為詩恭謝焉、（爲日）

白髪紅顔傳酒盃　上交不諂絶纖埃　若非三顧及諸葛
二月晩梅誰問来

二月朔、　公復臨寺觀梅花、二日晩歸鞍、文之賦詩十餘首備　英覽焉、蓋　公之招師、在使士大夫皆就受程朱之學、有以所欽式焉已、（人物志、住于薩建長寺云、誤也、）文之為教、（爲施）各隨其材、（爲機）有問禅意者、則曰、吾宗無語句、無一法授人、然不以言語文字、豈能示人也哉、又有問儒典者、則曰、若論本分、雖佛祖語、尚不足學、況外典乎、於是儒生退而謂文之碩儒雲衲、去謂知識高、竪法幢、大揮祖道、匪但三州隣近緇素仰服其德、若夫中山王及其大臣、亦慕其德風、至致之書饋紫伽梨、凡我　藩公承覇府旨、每通簡牘於西土外國、輒必使文之起草往復、諸有功於世、可謂偉（爲旦）勤矣、元和六年庚申九月中旬示微疾、晦日召聚門人、屬之後事、趺坐而歿、得壽六十七、（或六十五、）臘四十五、葬于〔柁城〕（爲加治木）安國寺、法號前建長文之玄昌大和尚禅師、所著有南浦文集六卷・聖蹟圖和鈔・日州平治記・砭愚論・決勝記等、或梓、或寫、尚行于世、門人受業者不遑擧數、如竹・學之・平田純正・河野通宣之屬最聞于世、學之、名玄碩、嗣董大龍、學之歿、門人一溪、名守榮、代嗣、一溪歿、門人日東嗣、日東歿、不門、名慈宣、代嗣、日東以上、世継祖業講程朱學、府下聽徒、連綿弗絶、宣遊備前、嗣法無聊松琴寺主、文之法脈、至宣異流、如其學術、亦（爲遊）當蕃山、唱王氏、學於備藩之時、則島津久竹等憾非文之學、亦應

由〔此焉也〕、自文之歿載歷七十、志士協然尚欽其徳、元禄二年、後醍院宗□半左衛門・竹内益祐助市・吉富□□為左衛門・江川□□傳右衛門・笭原政□新左衛門・宮里正□孫之進・伊地知重英助右衛門・野村盛豊勘兵衛等會慈宣於大龍、議造文之肖像、乃六月、命佛工鳥井□□称次郎兵衛、臣△後曰如見、▽宮城疑此也、彫刻之、既而告成、二十日安置于寺、明年六月、慈宣撰之行状、亦蔵于寺、如竹・學之等各自有傳、

16 ▽ 納環瓊先生著策記

凡物有形天則斯從、民人有思神明斯應、故雖聖人賛幽明前民用之、霊器不免隠顕趨舎之期数也、我祖師友賢黄先生、福建道連江縣之人也、避乱所劫倭賊、本朝永禄庚申年、来寓隅州加治木久矣、曾從邦君源宰相義弘公、朝覲於山城国伏見営、屢遊洛陽、時當今有憂虞之事、猶豫未決、召賢而筮焉、太有霊驗、上悦命近衛関白左大臣信尹卿、以賜五大聖図影壹幅・神箸壹箇・紅錦壹端・黄金若干両、且照高院道澄受朱子筮傳、復詔拜先生之号、称環瓊、後命義弘公将移賢於洛下、義弘敬諾矣、賢慚敢忘義弘君舊恩、而共立以固辞矣、君力進而不聽、遂適從帰国、君感貞節與采三百石、慈息二閑栄宗續其統、屢筮有應驗、時以為専徴所移、麗府小臣侗及愛甲喜春等従遊門下拾餘年、臣竊知易道玄遠不可至、不敢慢筮焉、及間翁没筮蓍之方漸微也、其玄孫上源氏知家傳寶器、或時香火耳、延宝戊午庚申之際、薩府之南區三有火災、當火甚急、自抱一箇逃避、聖影及詔書盡焚失焉、年十一月、我邦君左近衛中将光久公、聽新義易傳始自本邦、而今将晦弊命侗及喜春父子纂修、臣不堪重責、謹按傳記、君道必先於立教、立教莫重乎經術、經術以四聖經傳為首、嗟偉哉邦君知治道之先務也、邦君雅未講易学、聰明稽古、賢才格物、明倫正位乎、家人箴敬、惕若乎、乾九君臣賡協以交天地之泰耳、目明闢而續日月之離、是於易道可謂善用乎、苟如此而開後生之学、郷学與起士将俱効用、達物宜於虚中、兆民皆顒〻然、仰蒙邦君右文治、斯臣所以不可固辞也、是年二月、臣復従述職、侍薩伊集院、春亦送君駕来焉、相共勘合易傳、語及上原氏所蔵宝蓍、余云、吾嘗不忍先師遺宝湮没於無聞、冒昧當此行、聞兄将送君行、欲相策為国器、私借上原氏而載来焉、春云可也、廼擬合以聞久胤・久輝両相公請収納、春既得令還郷而説上原氏、呈奉本部、既而君駕留伏見邸、飛劄遠送依奉邦君、大悦命喜入久甫、載内閣之宝籍還発徳

音、借臣預知卜筮之事、臣恭奉日焚香敬修、蓋惟先生之知
両君、以彰　両君之治、上天以肇其天也者何矣、傳云、天何
言哉、叩之即應於非蓍何也、又云、天道無親常與善人者、其
是之謂乎、向賢従　義弘君之述職、来伏見共蒙　至尊之至澤、
今　左将君紹明世復来伏見、而納其器開後人之先務、即可知
物有期也、嗚呼其人已歿其器殆危、遂至文獻不足、忽所以有
此挙、記其始末使後人足徴、而黄家之青亦不泯者、如史謂伯
夷泰伯於孔子同類相照是也、又以可謂亀従、筮従如臣等亦蒙
鈞命、謹誌字名乎篇末、即可謂附麒尾者哉、

延宝九年辛酉三月丙子侍山城国伏見館邸

大原林齋王貞衷侗民謹記

飯野士江夏由緒書

一我等先祖江夏友賢事、　惟新(義弘)様伏見御詰被遊候時分御供仕
罷在候、其節　帝王様御不例之事御座候付而、友賢を　内
裏江被召出、周易之占可仕旨、依　勅命蓍を取、御病元之
様子奏達仕候ニ付、急度御快氣被遊之望(由カ)候、因茲　近衛関
白様江勅諚被遊、五聖人之圖壱幅・紅錦壱端・神蓍壱箇・
黄金等拝受仕候、其上環瓊先生之位を被下、照高院如雪親
王様周易御相傳被遊候、　内裏御暇仕候刻、　従如雪親王
様餞別之御歌二首御自筆ニ被遊被下候、于今頂戴仕候差出
申候、如雪様御書弐通御座候、壱通鹿児島江夏仲左衛門所
江御座候、壱通ハ末吉之上別府市左衛門所江御座候、写壱
通差出申候、

一友賢事帝都江可被召移旨、　惟新様江勅命有之候ニ付、則
可差上旨　勅答被遊候得共、友賢事　惟新様御高恩を奉忌(忘)、
同輩(カ)ニ相立申候儀、道ニ違申候段、遮而御謝申上候得者、
貞節之志を　睿感有而、則　勅許被遊候、其節　惟新様御
意被遊候ハ、　勅命を相背候段如何ニ候間、必可奉随　勅
諚旨御意被遊候得共不承候而、終ニ御供罷下申候、依之
惟新様眞実之忠義御感被遊、高三百石被下候、

一延宝九年之比、前之　中将様従　内裏拝受之神蓍御所望被
遊候砌、大原林齋江被仰付、右之趣文書ニ書記、神蓍ニ相
添被召上候、其節神蓍上原五左衛門江預ヶ置申候、彼五左
衛門事、我等祖父源左衛門弟自得二男ニ而御座候故、易相
傳可仕通申ニ付、源左衛門より易書相添借置申之由候、依
之五左衛門より差上筋ニ文記相見得申候得共、友賢嫡家之
儀ハ私方ニ而御座候、右條々林齋江被仰付候文記ニ委細相

見得申候、

一惟新様飯野江御在城之時分、友賢事御供仕飯野江居住仕候、我等曾祖父二閑事ハ友賢嫡子ニ而御座候、其後　惟新様栗野江御移被遊候刻茂御供仕候、我等祖父源左衛門事栗野ニ而生れ申候、其後帖佐・加治木迄御供仕罷移申候、友賢事者加治木ニ而相果申候、二閑事者御用ニ付鹿児島江被召移候、二男自得も同前移申候、源左衛門事ハ二閑嫡子ニ而御座候故、加治木江罷留、　中納言様江御奉公仕候、我等代迄加治木江罷在候得共逼迫仕、加治木御暇仕、只今飯野江罷在候、申傳候大抵如斯御座候、以上、

丑四月十九日　　江夏慶右衛門印

17の2

上別府市左衛門ニ向付(問カ)候処、挌護不仕由申出候ニ付、慶右衛門ニ問付候得者、祖父源左衛門より此写請取申候間、江夏仲左衛門方へ有之御書之写共、又者市左衛門方江有之御書之写共然与覚不申候、七八年前ニ市左衛門方へ右御書之儀相尋申候得者、見失為申由申候而、無之候通、寅四月廿七日、飯野愛(曖カ)より被申出候、

17の3

写在飯野士江夏慶右衛門

態用一筆候、其地堅固之由珎重ニ候、此邊別儀無之候、我等作事如形成就いたし候、　惟新於上者　同船可有哉と待居候処、老衰之故無其儀之由、萬端落力候、猶期後音候、不宣、

三月十六日　　如雪

友賢老人

17の4

在飯野士江夏慶右衛門

友賢老人淑装之催日已近、祗今泥両篇之詩以予与之、不堪感激、率取緝(韻カ)末之二字、聊報其志而已、

かりそめの別なからもしたハるゝ
袖のなみたや瀧のしら糸
別行ミやこの名残わすれすハ
春ハ来てみよ花のさく時

如雪

17の5

族譜

吾宗黄氏江夏廼廼顓頊之後裔、陸終之末孫也、早歳因蒙難之故、到于日本遺失族譜、今特誌世有名者与其近者、以為後世

子孫之證云、　永禄第三冬至吉旦　友賢誌　玉盛明人継世人
清者、　玉明同継世人豪者、
友賢蒙難到于日本、号環溪先生、　栄宗友賢子、生日本、栄
秀継世　栄春（二男）　栄守継世、　栄元（子）　老号斎名圃竹、　△

（中表紙）
「
漢學紀源　巻之四
」

1（別紙、㊞ナシ）
「木からしに波路分くる唐人の
ふねも入江やたのむ山川　家久
冬の夜のねさめかちなるさむしろに
聞こそ馴れ山川のおと　【島津下野守】久元
散かよふ木丶の紅葉をさそひきて
にしきをあらふ山川の浪　【兒玉筑後守】利昌
山川のうきみす鳥の聲ことに
たひのまくらハさめかての床　【三原飛彈守】重長
山川の流の末ハひろくとも
こふりやとめむ水のしら波　安綱
山川に風の吹ちらしたる紅葉はを
落ちくる瀧の花と見るらん　目圓
瀬を浅ミとまる木の葉もさそふ水

ありとはかりに山風の吹
我を残す冬の山川風さへて
紅葉やせらの錦なるらん
山川のうつゝの床を旅ねにも
おもひしれとやおしの一聲
寒夜の嵐はけしき山川に
うかふ紅葉の色や妙なり

「八木丹後守」豊信
「五代勝左ヱ門カ」友政
「平田安房介カ」宗衡
「國分左京亮」友積　」

（別紙、鳥ナシ）

「惟景元和戊午仲冬初六其、　國君家久公催勝遊、而開錦帆、来着于江南山川之津矣、就夫當地官之役者、従前月加御寢殿之修理、而縷金銀、興比屋之壊、而日々致洒掃、時々勤拂拭、奉待　主君多日也、幸哉臨此節、御光賁有之、於是商買(賈カ)者歌于市、民生者抃于野、皆是聖主賢臣之徳也、仍予漫裁卑詩二韻、以呈上主将幕下云、其首者以奉暢　御遊覽之萬乙、其次者以祝　御太子之壽域萬歳者必矣、

伏請一哂　　正龍文岳拜上

君乗遊興海南邊　斯日黄鍾風物鮮　紅葉浮江新似錦
吟行至樂在山川

又

天下譽名當出群　美容太子徳香薫　時哉冬至陽来復　萬歳嵩呼資始君

為題山川　御歌會有之也、　」

漢學紀源巻之四目次

正龍第三十七
（頭注「以下無」）
南門第三十八南浦門人
大龍二世學之第三十九仝屋久
如竹第四十仝
竹門第四十一如竹門人愛甲
喜春第四十二仝山口
治易第四十三仝、東郷重經門人伊集院
俊矩第四十四治易門人

▽鳥以下未稿△

漢學紀源巻四

麗藩　伊地知季安子静撰

正龍第三十七

薩州山川、日本極南、而地接西土、匪啻琉球及諸南島貢舟輻輳、外國海舶亦所来繫也、於是乎、明德元年、吾怨翁公(元久)新一廢刹、留僧虎林(爲森)将渡明國、而為開山焉、所謂正龍寺此也、後擇儒僧世掌簡牘、(爲傳二三世、至僧)〔二世直宗本八、三世遠山久公、四世祖心相承董席、至五世〕郁芳、名春本、山川人、夙入浮屠、受戒正龍、緇服雲游、遍参名衲於諸州、久寓京師、研精禅機、競辯之徒、與之商量、動摧詞鋒、明應中皈薩府、稟學桂菴、綜究内外、永正元年補正龍寺、與桂菴及巣松等、唱和為娯、門徒日衆、(爲有)〈月溪名崇鏡(爲者)〉、特聞于世、大永三年、相國鸞岡名曰瑞佐、之使(爲於)于明也、訪郁芳於正龍、一見崇鏡、襟懐清朗、(爲乃)字曰月溪、為偈與之、巣松和其韻曰、三星圏繞廣寒樓　影印(爲印)空江玉兎秋　八萬四千翻水偈　夜来(爲東)依舊聽餘流、而後月溪代郁芳董正龍席住職、(爲子)天文永禄間、與巣松・代賢等唱和、月溪歿、弟子問得代董正龍、住持(爲於)天正慶長間、(爲自)郁芳〔以来(爲下)〕世世相継承桂菴學、以新註和訓・家法和點等之書、莫不聚徒教授、以備簡牘(爲通事)〔用〕焉、於是天正二十年、豊太閤使細川幽齋(藤孝)来巡三州、省寺社田、時如正龍寺、問得具陳自古儒寺備海舶来之状、(爲乃)十二月幽齋特聞、賜寺田五町四段如故、十九日授書諭之、(爲裁)(爲示)(爲問)間得大喜、(爲為)乃構茶室、恭招幽齋、獻茗謝恩、由是問得▽(爲禅餘)△愈授子弟以四書新註等、初新註之入本邦也、未有和訓、東福岐陽首注和點、以授徒弟、而迨桂菴回自明國、以所會得規其乖誤、頗加(爲註)〔修(爲精訂)正〕、以至文之、文之亦間改正、以弘藩中、問得等所授亦此本也、是歳、洛陽藤原惺窩(爲其)名彝、又名肅、字斂夫、播州細川人、冷泉為純第三子、以永禄四年生、年七八歳投東明長老、削髪為僧、名彝首座、後遊洛陽、領妙壽院云、謁　神祖於名護屋、遊觀西海、(爲薩)是年七月、幽齋来〔于薩州〕、按惺窩集載代人和幽齋巧夕詩、此云西海、疑既同遊薩〔州〕乎、(爲ナシ)文禄二年夏、往謁　台德廟於江戸、秋皈于洛、悼四書新註未有和訓、欲遊學於明注之倭訓、本集作讀性理書、悼世無善師、今從如竹説、忽到筑陽、浮舟入洋路、遭暴風、漂到鬼界島、即今硫黄島也、(爲此)所作詩歌〔載其(爲多載)〕文集、▽(爲)今収採左△

もろこしへわたり侍らんとて、つくしまでくたりし時、しれる人のもとへよみてつかはしける、

なれてうし人の心を月にはなにおもひいくへの山のおもかけ

その時船を鬼界がしまにつなぎて、

やまと哥のあはれかけゝり目に見へぬ鬼の嶋ねの月の

夕浪

おなじき時、

薩广がた八重のしほ風告やらんあはれうき身はおやだにもなし

▽(爲)けふりたつ澳の小嶋やいにしへのおもひのいろをなほ残しつ、△

見よいかに雲路の鳥ハとび消へてかへるゆふべの山もありけり

欲渡大明國、遇疾風、而到鬼界島、

三人此地謫生涯　二士賜環一士嗟　若是浮遊天外去

波間鬼界即神楂(爲今)〈按平語、治承元年六月、相國清盛流成經・康頼・俊寛於鬼界島、詩云三人此地謫是也、明年十一月大赦、成經・康頼(爲得)〈赦歸、〉俊寛(爲而)不與焉、亦二士賜環、一士嗟云此也、又東鑑云、正嘉二年九月、幕府宗尊流平内左衛門尉俊職於硫黄島、昔治承中、祖父康頼流於此島、又成經等所祠熊野廟、亦在硫黄島、〔見〕明應六年、桂菴所著新祠記、據此、所謂鬼界為硫黄島(爲ナシ)明矣、今隷薩州河邊郡、〕既而回棹、冬泊山川、亦〔所作詩歌載于左〕、(爲作詩歌)

山河季安いへらく、こはさつま國山川かもさ〈かならねと、海路(爲た)の題のまへにのせ、如竹の翁の、惺窩山川に来れるよし〔を〕(爲ナ)いへるにもあひぬれば、かゝる時のうたならしと、こゝに拾ひてかうがくに備おきぬ、

世をもすて世にすてらるゝ身なれハやさしてハうとき山川の水

海路

いつしかに行とも見へぬ奥つふねあとなき波の末のしら雲

薩まかた雲にほえけん犬もはや梅さく庭の冬の明ほの

其在山川也、訪問得於正龍寺、聞其授新註倭訓於弟子等、大異乎心、假而玩讀、無所倭點不稱其義、乃問童子、皆對曰、吾藩文之和尚所點本也、於是惺窩特歎伏曰、今將渡明、亦惟無他求之也已、乃請問得、(爲盡)悉寫其倭訓本及家法和點桂菴所著、等留滞久矣、三年春猶在寺、

而為詩曰、

僧龍蟠處鎖巖扃(爲局)　吟向東風地亦靈　雲外欲昏鐘色濕

小樓春雨碧溟溟

〔頭注「本集此題、與吾藩旧説不合、恐有誤乎」〕

杏壇春暮事吟遊　今日関西有孔丘　傾蓋論交非邂逅

三生石上舊風流

三月聞母訃音、悔遠遊久不侍嘗藥、為詩曰、

歸養計遅情已空　参商千里隔西東　吾生不幸虞丘子

慟哭無端樹々風

而〈居〉未幾、寫本竣功、去適筑前、始唱宋説、(爲註)季安聞諸又木加右、嘗客筑前、覩州之儒醫青木甫意所著書云、惺窩之弘宋學於世、粉自筑前、則貝原篤信等亦私淑之云、推〔前〕時與事、應〈必〉(爲因)(爲ナシ)在此歸途也、故註(爲時)備考、既而回洛、前此播州赤松廣通左衛門尉寵信惺窩聞其講

説、至是愈感、于時慶長二年、朝鮮姜沆来寓赤松氏、一見惺窩〔識量宏博大奇之〕（為大奇其識量宏博）、於是惺窩與廣通謀、新寫四書五經、傚和點例、加訓字傍、請姜沆跋、以證其事、則其與姜沆書曰、赤松公（為今）令予言於足下、日本言儒者、唯傳漢儒之學、而未知宋儒之理、四百年来不能改之、予自幼無師、而獨讀書、自謂漢唐儒者、不過記誦詞章耳、決無聖學之見識矣、唯韓子有卓〔立〕（為ナシ）、亦非無失也、若無宋儒、豈後世誰紹其絶緒哉、然日本闔國今既如此、而一人不得回狂瀾於既倒（為例）、故赤松公今新書四書五經之經文、使予以宋儒之意加倭訓于字傍以便後學、日本唱宋學之義者、以此冊為原本、足下叙其事證其實、跋諸冊後、是公之素志、而予至幸也、足下計之、（見惺窩集及其行状、）姜沆未嘗（為曾）知其得諸山川、乃為之跋、以弘于世、讀者咸稱惺窩功無比焉、由是聲聞大振都下、三年遂逃釋氏、立儒一家、廣通乃遣男女、侍奉其側、四年、石田三成召惺窩、惺窩欲往而不果、五年三成敗死、廣通亦自殺、是歳、林羅山年十八、前此清原博士等所講四書、唯學庸依朱子章句、（按文明十三年、吾桂菴師及伊地知重貞謀梓行章句於薩州甕島、）〔以来〕（為而）迄慶長五年凡百二十年、又延德四年、師再板行於府下桂樹院、九年矣、則博士等所講朱子章句、亦應此両次板本也、而如論孟、猶信古註、惺窩〔既雖尊信集註〕（為尊信集註、既雖如是）、猶避忌諱、未敢聚徒、然羅山乃是年始讀四書新註、八年遂聚徒弟、講論語集註、外史清原秀賢聞而娼疾、乃奏　朝曰、自古無勅不得講書、廷臣猶然、況於俗士乎、請必行罪、事聞　神祖、　神祖哂曰、講者為奇、訴之隘矣、九年、羅山愈慕其徳、就學惺窩、迨惺窩下帷授徒、洛陽諸生聚稟者日益衆、時會掖救如竹、學法華於本能寺、乃其徒勸偕如竹就學新註、如竹對曰、如新註學、行於吾藩者百有餘年矣、今與其挹流於此、孰若径回國近尋其源、乃辭洛陽、歸乎薩藩、入文之門、受程朱學、研精覃思、凡八年矣、按惺窩少文之五年、如竹少文之十五年、羅山少文之二十七年、皆竝其時、而如竹每往還掖救、必泊山川、既詳聞惺窩嘗寫新註・倭點等於正龍寺、而歸洛之状、（惺窩来泊山川、蓋自文禄二年冬迄三年春、年三十三四之時、而時文之年四十許、如竹則二十三四歳之時也、）故洛諸生雖尊惺窩、不肯従學、皈受文之、以傳門人愛甲喜春、喜春名季定、日州志布志人、以慶長十年生、受學如竹、貞享三年年八十二、而採所嘗聞如竹説話、以著右趣（為傳）、皆實録也、今季安稽諸惺窩・羅山文集〔等〕（為ナシ）、粗叙年序、以載于此、抑程朱學、自文明中桂菴學明而皈、

首唱諸吾藩、以國字解朱註例述倭點法以来、倭訓本多（高點）行於藩、則元龜寫本之類、詳見前篇、而未必如惺窩與姜沆書明矣、然海内儒者、既信其説、往往尊崇惺窩為儒宗者、二百餘年于今也、故近世諸儒如塚田虎等、以博識聞、亦猶皆謂程朱學渡於　神祖時、惺窩・道春學得其教云之類、不遑悉辯焉已、愛甲喜春以惺窩先生為甲州信玄儒臣、今按本集、播州赤松（高巻）廣通之誤、無可疑也、又天和三年、長尾某所梓行羅山訓點四書（高巻）尾、亦近代南浦創加訓點、羅「浮」復潤色之云、（高南浦）後六七年（高復）元禄三年、大竜寺五世不門著〔文之〕行状、亦言是事、而四書倭訓（高至）師所嘗注、如羅山點、皆踏師塵云、則喜春説與之合矣、又近代得能通昭所著西藩野（高與）史云、惺窩將往學明、發舟筑前、洋中遭風、漂〈鬼界、還入坊津、時（高到）會桂菴反自明、講朱註於一乗院、乃大驚、曰是我所求道也、乃從受學、（高而）悉寫四書五經大全程朱書、以歸洛陽、首講説云、此等盡通昭取口碑、▽（高）不探載籍△故誤傳聞、其云桂菴、則末徒問得之誤、一乗院亦正龍寺之誤也、

2（中表紙、（高）ナシ）

「

伊勢貞昌復前川為善牘標註

」

韓退之ト柳子厚ハ唐ノ文ニ名人也、柳公權ト顔真卿ハ書ノ名家也、為善ノ文トテハ、イマタ挌別見及ハス、手蹟ハ諸手鑑ニ多ク見タルコトアリ、細真ナト美コト也、貞昌ノ如此愛敬セラル、人ナレハ、其才德モ想ヒヤラル、也、左アリテ為足モ畢竟ハ為善ノ吹擧ト見ヘタリ、

貫明公ト（義久）　松齡公ト（義弘）ノ御相談ニヤ、　慈眼公（家久）ノ侍讀ニ大内家ノ遺老門司謙柔ヲ三百石ニ召抱ハレ、桂菴流レノ文之ニ大竜寺ヲ建テ召オカレ、明国ヨリ帰化セシ汾陽理心ニ五百九十七石、同キ明人ノ江夏友賢ニモ三百石下サレ、御学問ノ顧問ニセラレ、此朝鮮人ノ前川為善ニモ百八十石、安岡為足ニモ百石下サレ、名高キ御家老衆ノ貞昌ナトヲ始トシテ、如此書牘ニモ拜呈・貴酬ナト、アテ、、闕字シテ　公ト呼ハル、コトトモニテ、其時代材德アル人ヲ敬重セラル、風俗想ヒ知ラレタリ、ヨク〳〵心ヲ注

ケ、古来ヨリノ御政事深ク仰キ慕ハル、コト也、

2の1

※

客春二月廿三日之芳翰、三月十六日落手、四月初二日之恵書、五月十日又至、開緘宛見　公之面、欣然々々、嗚呼公之能大矣哉、文追韓柳、筆兼柳筋顔骨矣、有餘力則披之、喜目慰懐而已、　公是朝鮮人也、遭亂邦之憂、而成擒来於我薩摩州、

國君知　公之才美、而親

（頭注）「所ノ字ハ當在皆字上、後倣此」

君邊者、無内外、所人之皆羨也、且復　公本雖在麑府、今也移於加治木之新府、而擧秀才、門益榮、名愈發、斯榮幾千萬年矣哉、今　公有權門之威、如予至愚之輩、雖可相背、如此至遠境、寄書以問客中之安否、是亦道之心厚故也、抑天下道行、政日々新、故諸侯・大夫・士庶人、皆勵學業以欲志聖賢之道、當于此時、我國君亦冠於諸侯、其芳聲也不可勝數、以為如　公高才、遇知於世、用力於當世者、非幸宜也、因茲觀之、均遇呂望之周文、遇子房之漢高、　公之同邦、為足老先生亦雖其器大、人未知之、常所　公之訴也、嗚呼時哉、先生自去歳至今春、在東都、而時々陪従

（頭注）「遇字當在周字上、而下遇同此」

君邊、以形其才、以故承命、将移麑府、先生之榮達、亦筭日可待、令斯文告先生者、所任　公之舌頭也、季秋歟初冬歟、迎来歸鞍、日取手笑談、日何日乎、萬般期後音耳、恐懼不宣、

季夏初二日　　貞昌九拜

拜呈　為善尊翁

貴酬

※（標注）

「此状何レノ年ヲ詳ニセス、然トモ寛永八年九月、兵庫忠朗ニ加治木拜領ノ比ヨリ十二三年迄ノコトニハ疑アラシ、貞昌ハ本姓有川ナレトモ、伊勢與三郎貞興ノ跡ヲツキ伊勢氏ト為リ、兵部少輔ト称シ、　貫明公ヨリ　慈眼公ニ召付ラレ御家老ト為リ、江戸ニ定府シ居テ、治乱トモニ勲功莫大ナルコト世人ノ知ル所也、　慈眼公ノ朝鮮ニテ門司謙柔ヲ御相手ニシテ学問シ玉ヒ、又ハ大竜寺屋形以来文之和尚ヲ師トシテ学問ヲ励ケミ玉フ時モ、皆貞昌等モ共〳〵ニ精学アリシトソ、後ハ林道春ニモ出入シテ書經ナト聞カレシコト、道春ノ序ニ見ヘタリ、勿論理心其外友賢ヤ明人トモノ学才アルヲ愛シ、朝鮮人

ヨリハ此前川為善・安岡為足ナトヲ隆ツトヒ、交通セラレシコト此文ニテモ想ハレタリ、　寛陽公(光久)ニ折角御学問ヲスヽメ上ラレシコトトモ、御異見状ナトニモ明ケシ、為善ハ寛永十一年加治木東衆中帳ニ六十二石トアリ、後麑島ニ移サレ、寛陽公ニ伴讀シ、詩作ノ法トモ教授シマイラセ、御切米六十石ニテ江戸ナトニ詰ケル処、寛永十四年六月、御加増アリテ百八十石拜領セシコト、其年十月廿九日御老中下野守久元等ノ御曳付ニ出タリ、　慈眼公御連哥ノ席ナトニ折〳〵召出サレ、漢語ニテ一句ツヽ仕タルモノ間〳〵見ヘタリ、池深水猶清、千林楓似錦ノ類、皆其句ナリ、孫ノ名ハ休宅ト云シコト大概記ニアリ、今城ヶ谷ノ前川善蔵トノハ其後ナラン、安岡為足ハ同邦ノ人ト此状ニアレハ、亦朝鮮人ト見ヘタリ、豎師ニテ三十五石麑島高帳ニ見ユ、元和六年、百石以上ハ四分一ツヽ、以下ハ三分二ツヽノ上地アリシ寸モ、為足ハ上地ナシニ賜ヒシト也、寛永五年十二月、江戸ニ詰ケル砌、六十石御加増ニテ百石ニ召成レシコト、亦御引付留ニアリ、本ヨリ元和ノ比ハ鹿府士ニ列セシヲ、如何サマ一往何方ニモ移居レルカ、此状ハ又麑府ニ移サル、前ノコトト見ヘタリ、尤寛永十三年九月ノ鹿府屋敷ニハ、下屋敷三畦為足トアレハ、其ヨリ以前ノ状ナルヘシ、養子ハ神左ヱ門ト云タルコト、亦大概記ニアリ、万治二年、御引并シ竿ノ帳迄ハ神左百石ヲモテリ、此状モ安岡氏ヨリカ前川氏ヨリカ出タルモノナルヘシ、只二家ノ什宝ノミナラス、寛永中ノ御家老ニ如此モノトモ世ニ遺レルハ、寔ニ国家第一ノ重宝ト云ヘシ、幸一昨日柏原某ノ持参シテ、貞昌ノ手蹟カ予ニ監裁セヨトノコトナリ、疑ヒモナキ文筆トモ、貞昌手帖也ト愚答シオケリ、多年予カ編集セシ西藩儒林傳ニモ補ヒ入ント如此寫取リ、句ヲ切リ和点シテ、粗心ニ覚ヘシコトトモ標注スルコト尓リ、

天保四年巳十月十八日　伊季安　」

（以降ハ爲ノミニアリ）

光空謙柔斎安意、豊前小倉人、父曰浮道亦六、永禄二(ママ)庚申十月九日生、三歳喪父、四歳遇継父、九歳師僧恵海於潮若院学、十一歳母罹狂乱、因起請願巡歴東南北西海諸寺諸社、二十七歳二月廿日、渡于筑紫到麑府、三日(月カ)赴飯野、三日、以大内遺老始見忠平公、舎於迫田壹岐宅、二十日、舎於松岡院、六月二十日、従公如肥後、十月十三日従駕回、二十八歳三月十四日関白西征、四月十七日、

与京師戰于根白、六月二十四日謁白鳥山、告禱百十日、八月十五日公亦夜謁、有詩歌興、十六年四月二十六日、禱公如京讀大般若六百卷、凡六十一日、三十歳四月十八日、復讀大般若、六月十八日竣功、公乃賜書労之、慶長三戊戌正月、勝祠諸神於吉田佐多浦私邑、侍讀家久公、十九甲寅四月十三日、死于江戸桜田□「邸カ」名心巖常意居士（后改安□□□）、

3 御書物入日記

惣目録

左傳　三十巻　大平通載　四十三巻二巻不足
選詩　六巻　二程全書　十五巻
劉向新序説苑共　六巻　文選　二十五巻
唐詩正音　八巻二巻不足　史略　七巻
楚辞　四巻　東坡　十四巻
近思録　仝　石川集　四巻
通鑑　十三巻　企斎集　十巻
宋鑑　卅六巻　資治通鑑綱目　卅二巻
御製文集　四巻　唐鑑　六巻
妻程續集後集共　五巻　煎燈新話　二巻
中庸　一巻　漂海録　二部共　六巻
陸宣公集　五巻　詩人玉屑　仝
詩傳　九巻　詩大文　二巻
南華眞經　十巻　昌黎文集　十八巻
礼記浅見録廿一巻　杜詩　十四巻
左傳　廿七巻　大明一統志　廿四巻
聯珠詩格　七巻　朱子節要　七巻
書經大文書集　十一巻　性理大全　廿五巻
春秋　五巻　三蘇文集東坡老泉餘濱　十五巻
白氏文集　十六巻　李白集　十四巻
前漢書　二十巻　春秋大全　十五巻
古文眞宝　六巻　朱子節要　八巻
五礼儀　八巻　小學　四巻
柳文　十四巻　詩太文　二巻

右書物、藤原少将朝臣忠恒朝鮮國平伏之辰求此本、送日本國安置此地云々、

唐記新到本十二巻　翰墨全書　十七巻
琉球新到五經共廿九巻

慶長六箱(箱カ)辛丑同月仲冬六日

琉球ヨリ到来本
四書共　十一巻　唐詩新到本　三拾巻安意記之
碧岩録　六巻　漢記　八巻
山谷　十巻　新到五經　廿四巻

右、此紀源四巻者誠之草稿ニ而、糺方之便計ニ如此書綴置、引書相成書藉折角借入方手を廻し置折柄、去ル子秋伊兼誼子出立ニ付、桂庵碑文之綴方佐藤先生へ相願砌、桂庵傳計書写遣筈之処、親類ニ病人有之、晝夜不得寸暇、無是非義此儘差遣、萬一も撰文被受合候ハヽ、尚案(市宗カ)なと被仰談見合相成候て書拔(ハヽカ)候而、御遣可給旨ニ而登せ候處、四冊共一齋へ被遣候由、然者存外褒詞ニ而得益事不少候ニ付、写置度迚被留置候得共被召出(後脱カ)、多端ニ而其義難被及手ニ付、致成就候上、一部ハ写遣呉候様被相返候也、

4

如竹翁傳

鳩巣直清著

翁薩摩州人也、不知何姓、又不詳其名、自号為如竹散人、人亦以此称之、或曰、薩摩州南海上有小嶋、曰役島、翁島中舵工子也、翁自幼削髪為僧、既長至京、居本能寺、學法華之教、然心不樂、嘗自京師視(帰脱カ)其親族、時同州人釈玄昌文之以文学有名、先是朱氏四書、始傳於東海、猶未盛於世(行脱カ)、玄昌首以四書集註、授其徒於薩之城下、翁方赴京過城下、一聞玄昌講朱氏之説、大説曰、吾固謂世有此也、果然於是盡発(廃カ)其學、而従玄昌学焉、遂為儒、為人質直少文、不妄笑語、其學不務博、尤精四書、不好詩賦、慶長中、翁為家貧、往至東都求仕、故泉州刺史藤堂侯聞翁有學行、遣使聘之、翁始至見侯於邸、乃曰、鄙人不知忌諱、今當備顧問、職在盡言、願君侯容之、不然請由是辞焉、藤堂侯曰、君能如是、所以吾敬君、若夫佞諛之徒、吾豈乏人哉、翁由之常在侯(侯カ)左右、多所裨益、居無何藤堂侯卒、嗣君不好學、翁遂行反于薩、盡出其餘禄、以賑親族郷黨之貧者、又浮海適琉球國、琉球師(王脱カ)事之、琉球小夷、不知礼義、及翁至而教以人倫、然後其俗稍々嚮正、始知自別於禽獸、翁居琉球久之、不樂遠就異國、乃去帰薩、又盡以餘禄與其親族郷人、如自藤堂氏反、前後頼以全活者為多、其後来寓居大坂教授、不数歳而還、以慶安明暦之間、卒于薩本邑云、翁在大坂、大人與之相識、為全説(余カ)翁之事頗詳、翁雖逃佛帰儒、然竟従俗不長髪（當時自称

儒者皆祝髪)、又不畜妻子、其来大坂、年近八十、猶能強力講書、不以祁寒大暑廃、嘗聞翁自道其事藤堂侯也、嘗講已、因言曰、人所以異於禽獸者、以行此道也、苟不行此道、其何以為人、譬於禽獸、君侯是虎狼也、人実畏之、臣等是狐犬也、人実侮之、畏侮雖異、其為獸一也、公笑曰、君之言、得無太過乎、当時聞者莫不驚愕、翁直言多此類也、君子之事君、直(也脱カ)言極諫、亦要合於礼、若翁此言、其有激也歟、然於所謂礼者亦或過矣、蓋自中世以来、天下靡然以勢力相勝、不言是非、不論曲直、惟勢力是視、故上之人専以威刑制其下、而人臣奉命共職之不給、其積成(威カ)約之漸、雖使龍逄・比干復生、言不可出諸其口矣、何者勢不可也、夫桀之於二子、距其言誅其人、然天下之人、皆以言為忠、以不言為諂、自忠義剛直之士不顧距與誅焉、則勢無不可言者、豈與今之時比耶、若藤堂侯、以好武之君蓋世之雄、能容強直之臣、受盡言如此、嗚呼亦奇、矣(侯カ)可謂善用其勇者耳、翁在琉球國、有梁沢民者、蓋中國人流寓其士(士カ)者也、又知翁而敬之、名翁所居曰顧天庵云、

十二庚申(年脱カ)正月二十日寫之　　伊安

我高虎尊君、詠一首和歌、見示親友、々々亦有和歌、道春先生取歌末々一(之カ)字、為韻賦唐律、以称賛之、予也一日候華第、侍尊君之末席、而傍觀之詩、素雖非我之所解、豈徒可黙乎、叩借険韻以供芳友一笑云尓、伏乞笑擲惟幸、如竹九拜

歌曲情深更吐奇　胸襟洒落見情詞　無名野草沾恩露　赫々風声誰不知

僧如竹、名日章、号養善院、又称顧天庵、自号如竹散人、隅州掖玖島安房村人、姓泊氏、父為舵工、以元亀元年庚午生、少文之十五年、自少入本仏寺為僧、既長至京、寓本能寺、學法華之教、然心未樂、当此時藤惺窩皈自西海、講四書新註於洛陽、洛陽緇素多受業者、如竹同寮僧勸共学之、如竹以為此學本出於薩藩、挹流乎遠、則不如皈國近尋其源、乃辞洛陽、還就文之受程朱学、居之八年(惺窩以下、拠喜春説)、理学大進、為人質直少文、不妄笑語、学不亦博、不好詩賦、務精四書、慶長中又游諸州、浴温泉於摂州有馬、會藤堂侯相亦同浴焉、如竹與之傾蓋、及言朱學、勢相大感其有學行、徑帰勢藩、欲必薦之其主高虎以輔治教、然而以為、與軽陳實却失其事、不如且黙待

問便能薦之、以故隠実、泛語人曰、此行何幸得觀天下之至宝、人問其状、則曰、苟得此則國家善治、何可軽以語汝等哉、不敢語之、事聞高虎、高虎乃召親亦問之、又不敢告、強之再三、乃具告実、因薦厚聘之、高虎乃悦、遂遣其相、復如有馬、以聘如竹（温泉以下、季安聞諸本田親孚）、於是如竹始至勢藩見高虎、而告之曰、鄙人不知忌諱、當備顧問、職在尽言、願君侯容之、不然請由是辞焉、高虎曰、君能如是、是所以吾敬君、若夫佞諛之徒、吾豈乏人哉、遂為創寺使如竹居之（創寺事拠浦波）、由是如竹常侍左右、多所裨益、寛永元年上邸江戸、梓行家法和點、此明應十年、桂菴所著述書也、二年九月、初文之倭訓四書新註、而未盛行於世、至是如竹跋其巻尾、命中野道伴鋟諸梓、今世所謂文之點此也、

5 四書集注和訓、近世其説惟多矣、予之授童蒙者也、傳之於師也、中野道伴翁請鋟諸梓、予也所傳差訛而懼有違師説、以故辞而不許、翁請之不已、於是不得固辞、使人謄寫之、應于其請也、世之觀者是処是之、非処非之幸也、

寛永乙丑季秋吉旦散人如竹書于武州江城

寛永拾九年壬午年本能寺前藤田庄右衛門開板

6 四年十一月、又跋周易程傳本義、亦梓行于世、此即文之在伏見時、所倭訓也（慶長四年二月）、凡和点周易新註、以此冊為原本云、周易程傳本義未有和点、讀者往々苦之、以故吾文之翁旁加和點、以示門弟子也、今也雖恐我家醜之顕外、而欲幼学者之易曉、故壽之本以廣其傳云、

寛永第四丁卯仲冬吉旦　　散人如竹書

六年九月、初文之在世、使如竹謄写其所著詩文集、於是又命道伴梓行諸世、（或云、如竹過山川得之、此説非也、可觀跋知、但惺窩過山河得四書点本、恐誤事也耳）

7 南浦戯言、前建長文之之老師（薩州人）之所作也、諱玄昌、南禅大明祖九世之遠孫、而桂菴翁四世之的（嫡カ）孫也、老師生于日州南郷外浦、故自名南浦、又東福竜吟菴之門葉也、故其軒号雲興、蓋取于龍吟雲興之義也、或曰懶雲、或曰狂雲、皆其義也、老師在世之日、以所自著之詩文、使予謄寫焉、然詩與文混雑、而不分其部類、

不定其巻帙、辞世之後、予始表章之、又編次之、別為三巻（文集一巻・詩集一巻・戯言一巻）、今壽之於梓、以遺愛於後昆云、

寛永己巳季秋下澣末裔

七年十月、藤堂侯高虎卒、嗣君高次不好学、如竹遂行（按浦波云、或隠岐侯、或藤堂侯、未的知何侯、有世子凶暴而数殺人者、其父憂之、語寛庵曰、寡人聞薩其旧邦不世乏賢、願以傳之、寛庵乃遣如竹行、世子聞其将来、豫語人曰、吾何受教、却饗之而已、未幾如竹進見世子、世子曰、叟不遠千里而来、亦将何以教吾乎、吾常好勇、惟武是励、如竹對曰、子之好勇、不間断矣、則國中其莫善焉、願君大之、世子大悦、乃従如竹講義、如竹毎講称勇誘導、居之三年、遂至善格其非使為善君云、今附于此、以備異聞、但寛庵後此九年立嗣、恐傳聞誤）反于掖救、盡出其餘禄、以賑親族郷黨之貧者、又寛永九年（十年六月明使来）々六十矣、聞明人秀才来于中山、浮海適琉球國、乃師秀才、講究四書詩書、理学精熟、國王師事之、先是夷俗未知礼義、及如竹至、教以人倫、時西土人梁澤民流寓中山、甚敬如竹、名其居曰顧天菴云、然後其俗稍々嚮正、始知自別於禽獸、如竹居琉球、贈郷里親族書誡云云、

8

態一筆ニ申候、各之身持夜白恐遣（念カ）ニ存候ニ付申入候、

一御公義方御奉公、何事に不寄専一候、

一親にこうこふの義にいしやう（「孝行」）を（「衣裳」）進上申、うまきもの（「美キ」）を

もとめ（「求」）進上申をこうこふとおもふ（「思」）なよ、親のはらを立

さる様ニ仕候事専一候、

一人ハわるかれ（「悪」）がし、我壱人よかれ（「善」）かしとおもふ心あれ

ハ、其ばちにて我か身をあしく（も脱カ）なるものにて候、

一人はよかれかしとおもふ心あれは、其ことくにて我身

もよくなるものにて候間、其心得専一候、

一大酒をのミ、ひるねを不仕候事専一候、

一壱年のはかり事ハ春にあり、春にもの種子をまき付不

申候得者、年中の被下候ものなく候条、種をまき付候

事専一候、

一壱日のはかり事といふハ、よひ（「宵」）からあんし（「案」）候而、何の

しよく（「稼」）を仕候とおもひ候而、辰の時より出立仕候事専

一候、

右之条々、能々心かけ専一候、

六月十三日　　本琉球より如竹印

屋久島安房之（にてカ）

沼与（沼カ）右衛門殿　　沼弥（沼カ）兵衛殿

同太右衛門殿「左イ」　　同善兵衛殿「左衛門イ」

同勘「甚イ」兵衛殿　　日高茂兵衛殿

同八左衛門殿

居之三年、如竹不樂遠就異國、乃去帰本島、又盡捐餘禄與其親族郷人、如自勢藩反、前後頼以全活者為多、其後又往寓大坂、従游者衆、教授未幾而還、新木（本カ）佛寺居之、十七年正月、愛甲廣隆自志布志適掖救島、師事如竹、受程朱学凡六年、六月初、伊勢貞昌贈島津久慶書曰、願足下勸寛庶覃精乎學、為人君者、修身治國、不依聖学、不能長久、若赫奕鳴世信長・秀吉、亦猶不保二世、可不慎乎、如日新君（忠良）・伯囿（貫久）公聞而知之、至貫明公・松齢公觀而知之、皆尊聖學、毎事遵理、以治邦家、國人懐之、誠是為先務、願足下以時告之、於是國老相議贈如竹書、使召侍講（一説、公在江戸、會水戸義公、吾欲学儒、今世師誰、義公曰、莫如如竹、故有此事）、乃此月、如竹随門人廣隆等至麗府、創一寺於上廐地、号本佛寺、以授如竹、錫之禄二百石（清水盛香説、未知其拠）、使入侍經筵、且教授群士焉、十八年四月、寛庶反自江戸、如竹常出入帷幄、講説四書等、多所匡弼、十九年正月、寛庶如江戸、六月請還養痾、五日、久元（島津）・有栄（山田）傳命許之、二十年六月、公至自江戸、前此如竹赴召、二十一年四月、寛庶如江戸、如竹得告之掖救以疾故也、時廣隆亦従、正保二年正月公在江戸、復上麗府、自是如竹在府下、侍講於公、且教授士太夫久矣、三月喜春辞同（回カ）、四月十五日、自寫朱晦翁所著不自棄（棄カ）文教、其徒弟讀以有戒焉、又一日侍寛庶講孟子、至斉宣王曰、寡人（之カ）三囿、方四十里、民以為大、何也、乃慨然而告公曰、方今君侯為囿於吉野・谷山等数所、匪啻四十里、豈民不為大焉乎、寛庶怫然改容、毎講極諫、多如此類（得能通昭説）、則河口静斎所謂活所如竹、抗直不撓、不愧乎古人云、亦此也、既而如竹功成名遂、乞骸骨還時、時國相島津久通奉旨召如竹、而傳之曰、賜叟年俸以養餘齢、如竹拜命乃辞之曰、嘗所久饒裕、既足以保老軀、願無受俸、久通莞爾而哂曰、叟之所言如聖人、然如竹正襟而對曰、自少欲一見称聖、而工夫經傳者久矣、然

未嘗寸毫有庶幾焉、今執事苟賜褒言之至如此、則於彼可(叟カ)謂幸也、久通有赧色云（拠盛香説、浦波亦載此事為皈□、然則似去勢藩時之語、未知孰是）、時法華徒多願永置此寺、代以居之者、如竹不可、乃請壊沽曰、城闉置寺、恐不亦便、(宜脱カ)且二百石則両士禄也、不如以食良士二人、有命許之（浦波作去勢藩時之事、而勿以愚為開山、於此願壊與貧士、是所為君侯願云）、故悉得其□云、又其居教授也、為士大夫所敬重、或饋之金、如竹皆無所拒、悉持還郷、人或黠之、初掖救之為地也、民居近海、堀井皆鹹、衆苦之久矣、迨如竹還、悉拍(捐カ)其所蓄金、傭工役衆、碎巖鑿地、引泉於明星山、以通民間凡数町、島人至今皆受其賜、謂之用水川、又遭饑歳散粟救衆、門人微餘不不(衍カ)尽與之、如竹問其故、門人對曰、復欲進師、如竹曰、視人餓死、安我独生、遂盡散救、時會寛庫開倉廩、多給島民、得以不死云、又掖救山宜杉樹、古来偽言伐之為崇、(祟カ)人無敢伐者、以故欝然焉、如竹以為、斧斤以時入山林王道之一也、乃登山上禱伐、数日下而諭之曰、無憂矣、必入斧斤、神告叟云、前宵使斧倚樹下、明日不倒、則神所赦也、其皆従之、於是始得入斧斤、遂為故事、至今材木不可勝用者、実如竹之

（頭注）「其所恒言不及仏語皆事儒教」

功云、又教諸産業及洒掃等、至今居民遵守其教、如律令

（頭注）「人物者為卒于州本邑誤耳」

焉、如竹晩年得近思録曰、假我数年、卒以学之、将亦到

（頭注）「遺言葬河滸永壓災殃」

至處、惜哉、吾既老矣、明暦元年乙未（或作二年丙申）五月二十五日（十五日トモ）、卒于安房本佛寺、年八十五（或云八十六云）、葬村鎮之下小叢□□巒、法号養善院日章大徳、

散人如竹

為客多年受世塵　皈来生喜故郷春　只今天下泰平日　茅屋解衣安此身、起承一本作、多年為客交世塵、皈来樂生故郷春、

人慕其徳、需之書筆、必書格言、或其為詩亦所鑑戒也、今間所存、採載于左、

讀勸学文有感　相良稽斉家蔵　　如竹九拜

小壮不学腹空虚　後悔老来無讀書　鞭背生蛆馬前年何如是得府中君

義利

利出私情害万端　義循天理樂而安　是非得失分霄壤相去其初一髪間

仲春之吉　　如竹書

寶暦三年、和田平右ヱ門秋存之任掖救、有登久遠山思
如竹詩、

臨海隣山樹自榮　老僧住此一心清　釈門何意不言佛
千歳惟称儒學名

和如竹翁試筆詩

（頭注）〔以下九詩一文欄外頭書ニ之ヲ掲ク〕

卷舒詩語帶霞新　不覺景光垂暮春　任官差吾汚塵垢
恰君物外潔其身

仝

有客来尋自遠程　新来同賞慰吾情　風棲（樓カ）修造属君手
羨見文章不日成

慶長十四年己酉正月廿一日也、

一雨沛然、喜叢林受潤捃摭法華妙文、綴野詩二章、以呈
如竹翁、

文之

霎霈敷空撥不披　春来十日蜜雲弥　叢林卉木皆鮮澤
一雨何因能化之

数日陰雲今已開　全衆悦豫暖風催　雨之所潤無人測
暢茂一切枯槁来

和如竹翁之芳韻以求菟裘之地云、

文之

夕陽江上曬漁蓑　芦筆（華カ）湾辺点不波　早晩随鷗我皈去
扁舟日々飲無何

送如竹翁帰枌寺

文之

把卷多年吹杖黎　一朝何計告離騒　不唯僮僕歡仰去
足識庭松亦指西

和如竹翁請（詩カ）

文之

講罷残經詩挿濃　文章自有一家風　使人景慕是何事
尽是十年辛苦功

慶長十七年壬子也、

和如竹試筆詩

文之

破衲製麻巾製紗　寒風於我更難遮　法華會上無塵事
一炷兜楼遠辟邪

9

暑往寒来、寒風侵膚、柴火煖身、呈一書欲問安否、則便
難逢、企跬一歩、欲扣高門、則老脚不堪、見白雲孤飛、
徒渇望咨嗟夕何夕與君一相萬（對カ）、語而笑、〻而語、思之外
無他事餘面既不宣、頓首、

小春初九　　養善院

拝上　　如竹（花押）

白濵重昌老大人閣下

外ニ一通知覽第ノ本可載也、其内ニ詩モアリ、

元和丙辰

和如竹翁試筆詩

自他迎歳未傳觴　先喜誦詩滋味長　為會純圓甚奇妙

不頃（須カ）刮垢又磨光「本ノマヽ」

藤堂侯相、當作勢侯藤堂氏相某、不然則下文勢相勢藩等「伊欠」

之字、無出所安頓、

10

愛甲喜春者、日州志布志人、名季定、一名廣隆、俗称諸兵衛、又称平左ヱ門、別号玄徳、後改喜春、以慶長十年乙巳生、少如竹三十五歳、為人質直、澹然寡言、寛永二年乙丑、年二十一矣、慨志乎（然脱カ）孔氏之道、師都城常徳寺（于カ）（今竜泉寺）主（十三世）僧泰岳、讀書四年（按南浦文集、呈常徳泰岳翁、以問二嚴小疾詩云、當年一入鬻正皤　未遂拜顔春已過　乍次憑君委傳語　二嚴悩気頃如何、蓋慶長十四年己酉春也、以是考之、泰岳亦出於文之門、可慨（概カ）知也、奉和トアレハ弟子ニ非カ）、又学医於津田曲（衍カ）桃庵、十二年乙亥九月、悉受其禁、十七年庚辰正月渡益救島、適安房村、事如竹於本仏寺、受朱氏学、六月、如竹應徴至麑府、喜春従焉、二十一年甲申（十二月改元正保）春如竹疾、請告還、喜春又従省疾、正保二年乙酉春如竹疾癒、三月往上麑府、喜春約復従之、暫辞帰省、如竹為詩惜別、今採載左、

愛甲氏廣隆、其号玄徳、日州救仁院志林人也、其為人也質直好學、澹然寡言、先是五六年前、遠航海訪予於海島茅庵、其志在欲聞朱夫子四書新註之義、雖予不解其義、感其志之不浅也、不得社（杜カ）口、胡説乱道者、半年其功未畢、予有官命至於麑府、去歳之春（寛永二十一年甲申）、有采薪之憂、請命帰海島、於是廣隆欲問病安否、再見訪茅庵矣、今茲春之初（正保二年正月）病漸平癒、而企麑府行、廣隆亦約麑府到、告別棹皈舟、感離別之懐者不少矣、詩非予之所解、而豈敢黙乎、綴野詩一絶、述志之所之、奉餞行色云爾、

分袂春風江畔春　天涯万里布帆新　請君燈下尋書義

再會難期衰老身

正保乙酉暮春　　散人如竹再拜

前後随侍受業六年、四書新註及小学・近思録・孝經古文・太極圖説・韻鏡等頗皆通焉、又請学易新註、如竹曰、吾之学易也、不如江夏氏、汝必學焉、因喜春又学易於江夏二閑、乃明人黄友賢之子、而愛(受カ)程朱説於父友賢、以不墜家声者也、慶安四年辛卯十月二日悉受其傳（筮蓍及擲錢之占法）、於是喜春年四十七矣、又就川越重能受暦書七巻、又断易法受之井上織部、洪範六巻得之島津図書、示視(現カ)劔学諸東郷重□、博綜衆技、而常業医、名声鳴世、初其先従得佛(忠久)公就封、自相模宗邑（愛甲郡）徙於本藩、至祖織部、世列士班、属伊集院抱節移戍福島、迨太閤(閣)西伐、封秋月種実於福島、去皈志林、寓于大慈下、棲遲逝世、父新兵衛孤貧業農、至喜春憤発、好學碎礪積年、於是承応二年癸巳二月十二日、自陳閥閲、請復旧班、地頭島津久茂以聞於寛陽公、既而未幾如竹死矣、門人雖多莫出喜春右者、別府助員（式部左ヱ門）・平山久行（久馬）・白尾國長（金左ヱ門、老号自安）・長谷場純昭（伊角）等、亦称其為人、俱皆薦之、乃万治二年己亥正月十七日、遂命為侍讀、従如江戸、十八日又復邑士、皆久茂承旨、使邑正命之、

10の1

預貴翰相届令拝見候、先以中将様[延宝巳後ノコト也]益御機嫌克御座被成候、次貴老御堅固御勤仕之由、珎重ニ奉存候、然者御訴之儀ニ付被仰聞候之趣、委曲得貴意候、別府式部頭殿・平山久高(馬カ)殿よりも書状相付承候、長谷場殿相談為見合可申候、将又其地私宅女更病者共御座候、乍御太儀毎ゝ御見廻御薬可被下候、奉願候、私事も無為に罷出候、尚期後日候、恐惶謹言、

八月廿日　　白尾金左衛門(国長)（花押）

愛甲喜春様
貴答

※（頭注）
「此状季春被成候後ニ候ヘハ、年間少しハ可為已後事」

10の2

態用飛札候、愛甲平左衛門此度江戸へ可被下召列由御意候間、其旨可被申聞候、定而儒書御讀せ可被成御用ニ而候ハん間、其意得仕候様ニ可被申渡候、太守様御発足二月四日ニ而候、是又為心得候、恐惶謹言、

萬治二年己亥

正月十七日　　嶋中務「本ノマヽ」
志布志　　久義「茂」「ヽ」（花押）
曖衆御宿所

10の3

昨日次飛脚ニ而申越候通、愛甲平左衛門儀此節御赦免被成候由被仰出候、旁以忝仕合ニ候、就夫急度参上仕候様ニ可被申付候、恐々謹言、

万治二年己亥

正月十八日　　嶋中務「本ノマヽ」
久義「茂」「ヽ」（花押）

平田伴右衛門殿
上村六右衛門殿
床次少左衛門殿
山田七郎左衛門殿

凡挙於庶人者、給一人月俸、積功増秩為例、然喜春家本旧勲、至父零洛（落カ）、寓於寺門、亦喜春（今脱カ）以儒医立其身、何功加之、久茂以告公、公乃嘉之、特命給三人月給、二月四日、従駕発本府、自阿久根公駕船泊于軍浦、凡可七日、時公観山海献美樶浦（在薩州出水、乃脇本湊也）親賦一絶云、陽光徹海煙　花樹護村辺　見説樶之浦　晴山不譲連、而使程菴（姓氏未考）召喜春於前、亦為詩、即賦七絶、吟遊春日此他郷　海島山河多景彰　樶浦風敵（蔵カ）漁戸夕　百花乱落野村香、於是喜春乃因喜入久甫（五郎兵衛）等求見于公、國老伊勢貞昭（兵部）以聞公、公曰、既召舟中助於顧問、且使為詩、更何見之、為喜春拜命、因久甫等拜恩、三月二十八日至江戸、恒侍帷幄、以儒被用、暇則来往浅羽氏等（三右ヱ門）友善、屢通書問矣、三年庚子四月十三日従公発邸、五月二十八日至本府、七月十一日、地頭久茂命授宅邑、其書云、

10の4

一筆申候、愛甲平左衛門就御赦免ニ、屋布之儀去年雖被申出候、後日可致相談被申（とカ）候、明合之地於有之ハ可被引渡候、恐々謹言、

萬治三年　七月十一日　　嶋中務
志布志　曖中　　久義（茂）（花押）

而身寓府下、門人益多、乃久茂及島津久竹（図書）・島

津久年（主計、後帯刀、久元）此等、亦出於其門、貞享四年丁卯九月、次子仲次郎歿矣、喜春哭之慟曰、村（材カ）学如彼苗而不秀、噫天喪予、自今行後、其興（與カ）誰講斯文乎、乃乞骸骨、去還郷里、後府下猶多慕其徳時書問者、

10の5

猶々山田殿事願相達、昨日御目見首尾能相済、結構成仕合至于吾等令怡悦候、将又桂庵和尚墓所之儀、出付（書カ）見難相達候ハヽ、明年頃ニハ山田殿早々可被差越候間御申達候ハヽ、可令承達候、以上、

一筆令申候、弥無別条御入候半、然者四書新註之一巻、慶菴和尚之遷化被成候所、又者廟所等究而為存衆無之候間、御覚候趣委細被書付給度候、及口傳候儀共、即正院主へ御傳候ハヽ、追而委曲可承達候、返々頼入候、此旨可（為脱カ）申達如斯候、恐惶謹言、

五月　　嶋津主計（帯刀忠雄入道睡雲）

愛甲喜春老　　久年判

10の6

一筆令啓候、寒気甚敷候、弥堅固候哉承度、然者當年爰元へ可被差越様ニ承待居候得共、無其儀候、来年江戸へ之御供被仰付罷上候得ば、明年迄者致對面間敷与残念ニ存候、随而者桂菴和尚墓所入念相尋候へとも為存人無之候間、御報ニ委細御書付可給候、恐々謹言、

十二月二日　　嶋津圖書

久行（竹）（花押）

愛甲喜春老

※（頭注）

「【朱書】

無杁（格カ）山田氏御目見に月日相糺候ハヽ、年号亦可考也」

※

10の7

【朱書】

諸家由緒抄

一志布志之住人山田七郎右衛門年頭ニ罷出、御太刀進上之儀ハ無之、御目見迄を被仰付候、綱貴公御家督追而以後如仰付儀ニ候事、但七郎左（右カ）衛門自分之願ハ無之由候事、

【朱書】

按、綱貴公御家督貞享四年七月廿七日ニ而、其後追付と有之候得ハ、元禄三年十二月朔日、山田へ御目見被仰付、翌四年未正月より茂年比（頃カ）御座所へ被召出候欤、然し此十二月二日ハ元禄三年ならん欤、可糺

10の8

なり、

猶々韻鏡傳授之儀、久敷約束にて候へとも、互ニ無手透延引ニ打過候、以上、

一筆令啓候、甚寒之節弥堅固ニ候哉承度候、我等儀も無別条罷過候、然ハ去冬被差越候時分、文之和尚四書新註ニ点御入之儀、又桂庵和尚入唐之儀共委細書付可給由約束申候、當年中にも被差越候ハヽ、其節可申談与待居候へとも無其儀候處、我等儀も来春ハ江戸へ致御供候間、其内相伺被遣度候、将又大龍寺住持不門比日大学之講談有之候、過分之聽聞衆にて、一段之事候、雖然文之一流之学ニ而無之、残多存候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

疑貞享二年

十二月十三日　　嶋津圖書

久行(竹)（花押）

愛甲喜春老

御宿所

不門、名宣領、五世住職、為中興、以元禄七年七月十九日死、按貞享乙丑、應島津久寧等之請、不門講大学、事見竹内助一森羅集、此云、頃日当在其時、且不門師備前岡山松琴寺開山無抑参和尚、受其學、故此久竹云非文之一流之学是也、蓋岡山之学、専柄用熊澤了海、世所知也、以是考之、不門亦信王陽明良知之學者乎、

10の9

猶々何とそ爰許へ被差越候ハヽ、相尋申度儀候(共候カ)と、老人ニ而候得者、被差越候儀者成間敷候哉と残多存候、以上、

一筆令啓候、久敷物遠打過候、弥堅固ニ候哉承度候、我等儀(茂カ)を去秋病気以来于今草卧有之、時々致登城相勤仕合ニ候、雖然漸々快方ニ候間、可易芳意候、「本ノマヽ、」然者先年於江戸ニ御方へ笠致傳授候、其節被遣候書付慥ニ致所持置候、供物等之書付置忘見出不申候間、委細書付可給候、恐々謹言、

三月八日　　嶋津圖書

久行(竹)（花押）

愛甲喜春老

御宿所

10の10

一筆令啓上候、從圖書様被仰下之御状再三拜誦、奉得其意候、先以御父子様御勇健ニ被遊御座之由、恐悦ニ奉存候、然者先年於江戸笠傳授被遊候書付置忘為被成之由被仰聞候、依是笠并擲銭傳授之巻物一巻指上申候、此方へ者残置候間、其元へ被相留候様ニ御申上可被下候、拙者事今一度御當地へ致参上奉拜貴顔致候(度カ)得共、老涯不称意徒送光陰計候、万端可然様ニ御披露奉願候、恐惶謹言、

五月四日　　愛甲喜春

嶋津圖書様

御与力衆中

10の11

一筆令啓候、乍時分暑気甚敷候、弥堅固ニ候哉承度候、然者先年於江戸笠致傳授候節之書付置忘ニ付、先頃申越儀共候故、笠并擲銭傳授之巻物一巻此方へ可為置候由ニ而被差越、過分ニ存候得与見申候之處、供物之置所瓦器ニ何ゝを入候哉、旁前見候へ共、覚不申候間、乍御六ケ敷儀委細書付差越頼致候、恐ゝ謹言、

五月晦日　　嶋津圖書

愛甲喜春老　　久行(竹)判

御宿所

元禄十年丁丑八月十六日卒、年九十三、葬大慈寺、法号文嶺玄德居士、本寺主僧太極嘗所名、而為詩以讃其号曰、

經史花聞樂老年　青山依旧屋頭前　平生無倦仲尼道　日月高照萬仞巔、所著有四書私鈔十二巻・易新注私鈔五巻・蒙引本草四巻・諸家脈法拔萃一巻・家訓傷寒論一巻・医海南針集三巻・針灸(灸カ)明弁二巻・家傳医方集要十巻等、皆蔵于家、喜春授子玄昌、孫季堅・季寛及國老島津久竹等、又府人橋口春盛・大木壽碩・中島三春・安藤隆雲、末吉人白尾桃庵・窪田春碩、高岡人入田新助親方・入田八兵衛氏方、

入田親助、名親方、家世日州高岡士人、父名親普、称用右ヱ門、貞享二年乙丑五月二十八日生、自少好學業医、受之於愛甲玄昌玄經(季カ)、與志賀登龍友善、宝暦十一年五月三日死、年七十七、法号功学良忠居士、

入田氏方亦高岡士人、幼字八兵衛、自少好學為医、号爽中、又号常元、後還俗称才右ヱ門、生於正德四年、以安永二年六月二日死、年六十、法名松雲永鶴居士、

蓋喜春季里弟子也、

種子島人上妻壽庵・勝岡人田中鉄右ヱ門・秋目人丸野藤太・久志人原田長庵等、又琉球人亦多出於其門者、而島津久竹等受易筮法、季寛秀才、専学其儒、他人蓋多受医者、未悉改(攷カ)焉、生子季經、

愛甲季經、号玄昌、喜春之子、生于寛永三年丙寅八月、初称勝兵衛、受學於父、紹業医術、改号玄昌、遊學東都、来往浅羽氏等（称三右ヱ門、其答喜春書言、玄昌屢来往）、不墜家声、元禄十三年庚辰六月、新建見性庵、十六日落成、乃実(奠カ)父肖像、託主僧万安掌香火焉、因損(捐カ)銀二百銭、永資其工料、自記其事於厨子下云、三男二女、男長季堅・次季寛、自有傳、次季東、女長嫁邑人坂元氏、次適府士家村氏、季堅称諸兵衛、生于慶安三年庚寅、少祖喜春四十七歳、受業於祖為医、元禄五年壬申七月二十九日、先父祖歿、年四十三、生男季里、自有傳、季東称助八、亦受祖業居志林、生子玄貞、継業、

愛甲季寛、称助次郎、玄昌次子、以寛文五年乙巳生、少祖喜春六十歳、為人英敏好學、自少受業於喜春、八九歳、自講勸学文、稍長善属詩文、又善書、喜春奇之以為英物、必後有所為、将使之游学於京師鉅儒之門、益成其材、以為天下之器、貞享四年丁卯九月渡自福山、舟中罹疾、四日蚤死、年二十三、葬松原山、法諡月澗宗吟居士、所著有大學、

愛甲季里、号玄碩、後改喜春、初名季澄、小字勝兵衛、乃季堅之子、以延宝六年戊午生、少曾祖喜春七十三歳、少受家學、年二十而喪喜春、遊学麗府（寓于上町）、受書於志賀登竜、以医仕江戸邸、元文元年丙辰、宥邦(継豊)公擧為侍医列於府士、世々句(勿カ)絶、賜宅一區於府下、後事慈徳(宗信)公左、寛延三年庚午三月十五日歿、年七十三、葬松原山、法号大心正通居士、生子喜碩、季俾業医蚤死、有一男、曰新右衛門季雄、見于古註者流下、

粤我慈父愛甲喜春老者日州志林之産也、従少時雖有欲知道之志、門衰家微、思而空渡日、已一朝果然棄其作業、二十有一天、而始披巻讀書、焚膏油継晷、凡ゝ而無倦、称(稍カ)治壮歳乎、周流于四維、而就有道、以窮其道、略通到易暦医之三道、以医而鳴于世也者数十年也、當此時乎、何患不足哉、故其澤流于子孫以潤家門、先生之所以有功于家者不可勝計、此非家之為中興者哉、加之信佛重法、

欽前大慈大極和尚之門下求法名、故号文嶺玄德居士、道号之記在嫡子之家也、壽考九十有三、元禄十一年八月十六日烏終矣、當此時也、見性(浄カ)禅菴殿當經歳月久遠、而頗頽廃壊也、於是予請住山萬安和尚曰、新脩此寺郷、願容移壽像於此寺、和尚亦感我志乎、欣然許容之也、信生前之大幸何如之哉、故撰良辰而經(営カ)栄之、依旧製以為之、元禄十三庚辰六月十六日既成矣、即日為入佛者也、向後借檀力不加脩補、永難保此寺、雖檀力(弱カ)弓菴主、亦無如之何、於是白銀二百目為造料納之者也、叨不費之非修節已新、雖作之難矣、欽祝遠太云尓、

元禄十三年庚辰天

六月十六日烏　直子

玄昌記之

11

余八世祖文嶺君之像、在日州志布志龍興山中見性菴、初君之歿也、庵方廃地(圮カ)、故子玄昌葺而窶(貧カ)焉、襯銀貳佰銭於其主僧、永以為香資云、爾来久遠、彩飾侈剝、余欲新之、乃私於官求巡察部當其地、是歳四月、獲往謁像、時豊後人来客於邑、幸佛工也、便命新之、遂能儼然至復其旧、於是五月十五日、請本山主席、、和尚、行供養法、君乃本邑人、姓愛甲氏、諱季定、字玄德、自称季春、文嶺其法諡也、為人聰敏、精力超倫、信朱氏學、再適掖救、受業於如竹先生、勉励講究、以高第(弟カ)聞、又學易於黄自閑、習医於伊兼政(伴カ)(津曲淡路守入道桃庵)、皆通妙理、最博禁方、鮮治不驗、万治中、寛陽公辟為儒医、特加寵遇、晩年致仕、帰老本邑、以著書為樂、如其治小児咳息方、今尚家傳此行、邑人會患此疾、多求余療、余雖非医、依法治之、立得效者八九十人、各謝実庭、則工料亦足以辨焉、聞者或(咸カ)曰、嗚呼君逝百三十餘年于茲矣、猶自能新其遺像、抑非良医豈如此也乎、且時疫於邑、又會佛工至、如天府有祐之、是先徳之所招乎、将又追孝之所致乎、可謂奇矣、此亦不可不記、乃併書板以置像下、使後之復修者以有知焉、文政十一年戊子五月、本府横目助愛甲季鳳謹誌

12

奉挽鳩巣先生四首　　河口子深(静斎)

魂去帝郷雲路遙　空台風雨夜蕭々　西階忽設周人奠
南國徒労楚客招　名託山川千載在　身随艸木一朝凋
従来天意称難測　忍使斯文長寂寥

先生未葬、是月十五夜風雨、

大梁當日訪鄒枚　匹馬翩々奉檄来　東府衣冠堆上第
西園賓客擢多材　三辞繾綣丹心盡　一病支離白髪催
嘆息絃歌今絶響　帳前銜涙徒徘徊

先生以辛卯歳與三宅深見、三公同徴、乙巳擢侍西城、戊申以病力請散秩、不幾卒于官、

一代龍門帰九泉　幾人負士共凄然　還憐野祭走三老
自恨冢(家カ)廬違六年　落日牛羊登古道　秋風禾黍對新玕(阡カ)
帰家悵望山中夕　腸断白楊深樹煙

先生之葬、門人在府下者畢来執紼、葬先生于大冢(家カ)之地者、恩地継美・伊東貞展力最多、至于治壙及區画諸務、則飯室良卿躬服其労焉、既窆、本村保正・芝崎某約奉洒掃、護視甚謹、其人云、自葬以来、村中男婦相率致祭、瞻拜者不絶、

講誦不因老病休　著書豈是為窮愁　高岡鳳逝簫声歇
空谷玉埋虹気収　文子垂終猶奕々　笑談臨去更悠々
英霊寧逐西風散　知伴三間(マ)遠(マ)遊

先生自丁未感支疾、侵尋不愈、及今八年、然講書率生徒不異常時、至八月初五日、猶臨席講近思録、病中著太極図述・駿臺雑話等書、皆易稿再三、手書楷正、未嘗告憊、属纊之夕、光遠與與(衍カ)継美・貞、同検遺稿、有佐渡國菅廟記一篇、艸本備具、其浄書乃十月十日所繕寫、半篇未就、此為絶筆、蓋以疾作不能完也、然文辞典重、字画厳蜜、不類死期将近者、可見所養之深、又聞之貞曰、先生當言吾当含笑□(入カ)地、易簀之日、談笑如常、果符雅言、唯速召親姻及諸弟子、至則已無及矣、翌日将歛、光遠與飯室・恩地・集堂・伊藤・児玉五子拜辞永訣、以是時竊窺顔色不變、睟然如生、眞所謂金玉也、於是始信先生實為異人、顧平生親炙之浅、追悔無及、嗚呼悲哉、登龍翁曰、嘗鳩巣先生を見るに、状貌顔色甚うるはし、笑へる顔童子のことし、童顔と云ふ、幼にして顔老大のことき ハ好相にあらす、

又曰、先生宮室を卑し、物の玩好なし、駿臺の宅、玄関と見へたる所三帖敷、其次二帖敷の小座敷あり、其次書院六帖敷あり、又曰、先生を臨むに温和にして詞寡く、笑ふ事まれなり、笑ふ時三歳の童子のことし、鬢ハ後下りに刺て身の長中下なり、

先生諱直清、字師礼、一字汝玉、幼名順禅、称新助、号

鳩巣、又号滄浪、又号古愚、命斎曰静倹、万治元年戊戌二月二十六日、生於武州谷中邑、享保十九年甲寅八月十二日、卒於北郭駿台私第、享七十(年脱カ)有七、

13 吾黨小録

吾黨小録者、録鳩巣先生門人也、先生務實而不務名、天下莫不聞、而今有此録者、豈門下之士自喜其盛耶、曰否、蓋憂其衰也、東武之盛、百有餘年、宜学士・大夫列第相望、左提右挈、相與講先生之道、而謹守之、而任斯文之重、以綱常為已責者、独鳩巣先生而已矣、其他雖有二三可称者、(率カ)牽才弱質、凡無以発二程夫子之遺文學子、曰之無可也、先生勃興於北地、七十之年、竭其精力、欲庶継往開来之旨者、未嘗少倦、宣群材輩出、前唱後和、成德達材、以廣先生之化于無窮、而篤信其師、不汨異教者、独所録諸人而已矣、其他朝来而暮去、陽附而陰背、雖累千万、曰之無亦可也、尖以天下之大、而唯有先生、以先生樂育之功且久、而唯有此諸人、寥々如此、豈非吾道之衰乎、然先生所以得於己者、不以時之用舎為汚隆、而況又以人之従違為軽重哉、固不待論、而予所憂、載名于此者、以今日觀之、則所謂篤信其師、不汨異教、無可疑、而安知他日情移志変、不免下喬入幽之(讖カ)識、幸其不然、亦偸惰委靡、無所奮起、使吾道衰之又衰竟幾於泯、則可勝嘆哉、故具其名氏、編為此巻、使得一々指名而議之、以考早晩之異同、凜々若嚴師之常在其上、負其初心者、亦當愀然而悔悟、此録之為助、豈浅鮮哉、若夫諸人拠已成之質、日就月將、高飛而遠擧、為一世之偉人、以能踵先生之迹、則豈独先生之道盛而已哉、蓋亦天下國家之盛、可由是而致也、其為吾黨之光也大矣、而予編此亦與有栄焉、豈可不勉哉、享保十六年五月十九日、白河河口光遠叙、

14 吾黨小録

芦世輔(芦孝七郎)、名德材、奥州人、仕仙臺侯、為人有大志、夙游京師、事尚斎先生、先生深称之、後見鳩巣先生、先生常以為奇才、當世希出其右者、其詩文高古、絶無俗気、亦可以見其所養、其居距仙臺数十里、號東山先生、別号畏斎、

飯室良卿(飯室内蔵助)、

集堂大輿（集堂小大）、名厚、阿州人、仕於本國、其先為大姓、當三好氏領四州、有集堂伊賀者、拠土地有勇名、闘死葬於學山、其家遂衰、大輿其後也、因自号曰学山、大輿為人温厚、不與物、忤口未嘗言人之過、称為長者、向学最力、

送児玉図南帰薩州故里詩一首

征旆行々去不留　涼風蕭颯歳云秋　滄溟雲黒鯨吹浪
古渡月残容喚舟　腰下泣龍佩劔鳴　駅辺立馬賦登楼
南中親友如相問　為道夢思感昔遊

右送児玉図南帰薩州故里

鳩巣老人援筆于駿台之草堂

児輩各賦詩贈児玉子之別途、亦不忍點（默カ）ニ、卒（ヽヽカ）賦一律以印印寄、

匹馬蕭々辞武昌　陽関三疊断人腸　驛樓對酒知何夕
驛筆題詩復幾章　明月山中星照劔　青梅林下雨沾裳
早聞君到難浪上　従此舟行向故郷

鳩人老人漫書

家児図南、将往東都、老父倉卒賦俚言一章、恭奉寄室公鳩巣先生案前、伏祈斧政、若俯恵和章、幸莫犬（大カ）焉、久仰清風未接顔　空嗟千里隔江山　夢馳東海文瀾上
身老西洋野岸間　固陋終無陪教誨　残喘祗有益愚頑
祈君速賜瓊瑤勺（句カ）　願荷仁情解苦艱

麑府野老倪金鱗拜具稿

薩州倪老丈、因令胤図南東行役、以詩見寄老者、年傾材腐、不料辱毎眷之厚、遂和其韻以謝、」

知心何必在知顔　不恨秦呉隔海山　眼下闇投明月贈
病中座對白雲間　虚名千里誤君聽　懶性百年羞我頑
麑府故人如相問　為言眠食幸無艱

別賦一絶、謝其所恵画扇朱墨、

白扇飛霜墨吐紅　遠来両品共席珍　研朱点易知何日
先有清風生掌中

七十七老翁相愚（古カ）室直清拜書印印

送倪図南君帰郷二首

其一

江都一別路漫々　分袂匆々涙未乾　此日送君陽関曲
如逢駅使報平安

其二

此日整装芝邸居　相逢清話十年餘　関山長道皈郷遠

更寄平安尺牘書

室洪謨拜

印

送倪図南丈自東関帰郷、伏祈斧正、

江東野草緑萋々　鞭馬、風帰海西　客館門前相別後

渺茫、水望将迷

島間鷗拜艸

三月晦日、圖南倪君来別、翌旦賦此送之、

昨日一盃酒　送春又送君　倚欄悵望々　千里夕陽曛

河光遠拜艸

14の1

昨日忝奉存候、分袂之情千断萬緒難候□別而老母沈痾之病ニ付、以参上不申□海奉存候、近年之中御出府遂雑(雅カ)盟度至願已ニ御座候、餞作ニ而も進上仕度奉存候へとも、待巻無暇、是又精神労し、何々も不任心底匆々之仕合、僅献一絶□仰貴評而已御座候、以上、

四月初吉

光遠頓首(河口静斎)

圖南倪老兄　■榻下

□胡椒壺一枚家翁より進上仕候、俚言□相添候、

殊御笑端之至候、妻方より旅□器數件進申度由ニ候、何事も病床□之仕合、御免可被下候、両親以下能々申上度□御帰郷以書中速ニ可申上候、以上、

右表之本書、図南より五代之孫児玉宗之丞致所持居候事、

丙寅十二月記之、

児玉図南（児玉宗四郎）、名一鳳、薩州人、仕於本國、其先武州名族也、薩州公遠祖諱忠久、建久年中始封於薩日隅三州之地、関東故家、多随之而遷者、児玉氏其一也、自是五百餘年、世為君臣、未嘗他従、図南父宋固(宗因カ)翁、号金鱗、有学行為國人所重、既老而図南嗣業、及壮辞親、東遊學於鳩巣先生之門、五歴寒暑、材大進、為人胸次廓落、不修辺幅、人皆愛慕之、其詩文可觀、学書於高玄岱、傳其筆法、至於敬師親友、懇篤有古人之風、蓋亦國俗然云、

伊東知量（伊東貞右ヱ門）、名貞、長州人、其伯父恭節先生養之為嗣、先生名儀字邦達、為一時名儒、鳩巣先生為銘其墓者也、其家世已具碑中、此不復著、知量夙承家訓

克省、厥德厚重、有老成之器、再世不仕、

多田維則（多田儀八郎）、名儀、京師人、不仕、尚齋先生高第弟子也、東遊師事鳩巣先生、天質端慤、動由規矩、為人所憚、号豪齋、

山宮源允（山宮源之允）、名維深、生於江府、其父在庵以医仕亀田侯、而嗜學耽古、一時名士多所交遊、原（源カ）允自幼聰明、詞翰両妙、未冠名動縉紳、称為神童、年甫十五、委贄於鳩巣先生之門、踰三載、而西遊京師、従尚齋先生、号翠漪、

中村子晦（中村玄春）、名明遠、号盈進齋、幕府医官、以精其業、擢侍第三城大夫人、鳩巣先生近患支疾、服其屢効、為人明爽、善著文章、辞理條暢、經義一本於先生之説、

河守國華（河守宗太郎）、名季実、遠州人、参（系カ）出於藤原姓朝比奈氏、朝比奈者駿河國主今川氏長臣也、今川氏滅、其族遂散有沿大井河而居者、東照廟時、以膂力過人、仕於覇府、後晷載宝器、輸於東武、至豆州三石、舟沈喪其載、恥奉命無状自殺、其子孫没、不復顕、各為農家、至於國華、累世以耕田為業、志操過人、質朴有守、享保癸卯春負笈遠来、舎于先生門下十餘月（日カ）、躬炊而食、専心講習、既帰郷、其志不變、屢以書相問、」

恩地堯弼（恩地善三郎）、名継美、姓橘氏、其先河州人、生於東武、侍於先生有年、當一仕于越州村松、未幾退而間居、

住吉弘辰（住吉忠蔵）、幕府士人、

井戸方懋（井戸平左ヱ門）、幕府先隊騎士、射馭之暇、讀書攻文兼嗜書画、実當世武人中難得者、号甘谷、

愛甲季平（愛甲仲兵衛）、薩州人、仕於本國、亦上世自鎌倉西遷者、季平與図南同郷友善、信先生之教、雖公事不暇、屢侍講席、薩州諸士、猶有日高為純・志賀弘毅之徒、慕先生之風者頗多、今不悉録、

薩邸與知量・大輿及光遠寓居相趾不遠、故結為一會、三五日必一相聚、期相與切磋、録中諸人唯此数、

鳩巣文集載送愛甲季平帰薩州故里詩

故園南望路漫々　帰興不愁海陸難　何日風帆飛彩鷁
幾回明月上金鞍　赤関古道荒烟合　丹浦行宮返照寒
別後相思如見雁　為書数字報平安自注略此、

塚田亮仙（初名長沢、善助、後及（又カ）改今名）、信州人、侍先生

受教、今帰郷里、能文、号旭嶺、

尚以此度日高氏御使ニ御越被成、不存寄叮而得御意、大慶難申盡候、早速私宅へ御見廻候而、緩々致閑談候、来春迄も御滞留可有之欤と大慶不少候、先可申進御両親様御息災ニ而、日夜御侍奉可被成と御大慶察申上、不及申候得共、御孝養専一ニ奉存候、将又當地ニ御入之時分、御申きかせ候孟子千乗之事、頃日門弟中と講習之時分致孝(考カ)究候所、弥集註之説ニてハ難通有之ニ付、拙者考之趣相調置申候、日高氏迄進候而相成ニ而御心得置、其元へ御達候様頃日甚兵衛殿へ申談置候、委細ハ甚兵衛殿より可申参候、以上、

前月三日之貴翰、當月上旬日高甚兵衛殿御持参居而、急度拝(致カ)見候、先以貴様御事御無吳御勲(勤カ)被成由承之、珎重存候、只今論・孟・左傳御講談之由、其御地士中御為一段之事ニ存候、御持疾之疾指出御難儀之由、去共御快方ニ相成候由、先々致安堵候、追而寒気罷成候間、随分御保養御懈被成ましく候、次に老生事、児玉・愛甲氏御存知之通今程手足共不叶ニ罷成、日夜卧蓐高■ニ罷在候、最早「癈」人ニ罷成、死を待罷在候はかりニ御座候、何とそ近年之中貴様御在江戸も候ハヽ、今一度得御意度候、明日も難量候へハ、再會も難期候故、一入御床しく存候、被思召寄御状被下、殊更唐書冊子五巻被贈下、御深志不浅忝存候、先頃も御状被下候處、右之通手不叶ニ候故、御報さへ不申入背本意候、餘り御無沙汰ニ罷成候故、ふるひ〳〵如此自筆ニて草々及御返報候わけ茂見へ申ましく候、尚期後音之時候、恐惶謹言、

十一月十二日　　室新助(鳩巣)直清（花押）

志賀武兵衛様
参

猶々此間餘寒も退而和暖候、花も漸咲申候、都下賑は布、玉歳霜月、朝廷大嘗會御執行、久癈(廃カ)事も御再興、是分難有恐悦仕候、くれ〳〵とみを殿死去可惜事、母儀之愁傷可申様無之候、其外百家町中歎是候、去年已来物故被致候衆も多ク、就中歌所之武者口(小)路實陰卿ニも急ニ御逝去ニて御座候、惜しき御事ニ御

座候、

山田四郎右衛門殿より御状被下、返書相認申候、乍次手呈一書候、其後久敷御便も不承候、如何弥御堅固御暮、御家内御無事御迎春察入申候、都下無吴事、拙宅皆〻無為越年仕候、老拙も當春七十二歳罷成候、衰懶仕候、持病之痔疾再發度〻致難儀候、先ハ無事ニ如何開講儒書(例カ)・神書・本艸可様習門生中も諸國より参會、堂上方(之カ)ニ會等、遂(逐カ)日内外多事打過申候、従此も折〻以書中も不申入候、御物遠打過申候、御念息善蔵殿ニも御学問御精研と察入申候、去冬ハ嚴寒倍于常年候、例寒ニも甚御座候、御持「病之疾(咳)喘」も御起り不被成候哉と御噂申遣(出カ)候、橋本典膳殿方も定而便(使カ)へ被聞被成候や、冨王女之御事、去秋産女子、産後急症にて被果候、扨も可惜事、御聞候ハヽ、御驚可被成候、手前むすめ八百琴稽古も好師ヲ失ひ悲歎仕候、世変難計事苦御座候、忰も無事学問勉メ申候、娘八百も冨王殿より大ゆるし三曲迄被教候、形見ニ不懈くり申候、愚妻も宜御心得可申進旨申候、心事期不日(永カ)萬緒可申承候、恐惶謹言、

(元文四年)三月十一日　　松岡玄達

志賀武兵衛様　御中　　成章

登龍講談之聞書本田新右衛門親方被成置候本数冊、孫次郎方へ有之由可惜(借カ)見事、

16

尚以御両親様はしめ御専様方へ能御心得可被下頼存候、

伊集院半兵衛殿任御下り、一筆致啓達候、倍御無事ニ御勤(勤カ)仕之由珎重ニ存候、私儀無事ニ相勤(勤カ)申事ニ候、定而御咄も毎〻可被成と存候、於此方も頃日稽古之衆十二三人も有之候、最早年寄諸事不罷成候付、御断重〻申入候得共(共カ)候不得達、無是非咄申候、貴様御儀も二才衆せつき申候哉、一段ニ候儀ニ(候カ)随分御指南可被成候、人を取立不申候へハ、我徳無御座候、他之心得を以我心實を能知、かく不申候へハ、工夫も出不申候間、左様ニ御心得専用ニ存候、於此地ハ半分ハ弓、半分ハ柳弓、四分(何カ)一ハ學文、其外ハ一盃ニ而ふら〳〵と光陰を送り被申候、竹内傳兵衛殿日〻(ママ)六度宛中庸をよミ被申、長谷場伊角殿宅ニ而近思録よミ申候、中〳〵面白御座候、貴様御儀を其時節〳〵

ニ存出申候、おなつかしき御事ニ候、来春高輪御やしき
是非〳〵御懇望ニ而上洛可被成候、必〻待可申候、我等
も詰越之儀其元迄申越候、何とそ被仰上、御上洛待入申
候、御油断有間敷候、委細ハ久木田彦左衛門殿へ申談遣
候間、可被聞召候、恐惶謹言、

十月廿一日　　伊勢松浦
　　貞（貞由）（花押）

崎元休右衛門様

17

追而申入候、同氏權次郎へ手技之御指南頼存候、其
外諸事思召寄、御示頼存候、以上、
「貞享三四月早世、其已前ならん」

不拜面者両三日、頗如阻三秋、久雨濛〻不得開戸憐察、
本仏寺瘧気未去、比五三日之前減其過半朝粥、午飯亦無
進、日〻気疲体疲、何日平復如本乎、待公之問病而已、
伏乞照察、頓首再拜、

六月廿三日　　玄昌（花押）

〆藤崎公綱公　　大龍寺
　　九　　玄昌

18

「口切ナシ」
く此状詞申躰ニ候間、此わき和尚様へ状進上可申候間、
「訣」
可然様ニ御取合可被下候、申まてなく候へ共、成程御
心掛萬事御たつね有之事ハ不残様、今度御申被成、来
春御下國可被成候、家（我カ）〻いつれものためにて候、
一そふとう本そく爰元にて、伊藤なと前〻よりあつかわ
れ候かくを和尚へ御たつね、成ほとひしくづし被成、
「学」　「学識」「仏ニ入ラスト見ユ」
四人へ御状可被下候、新右前〻かくしきなはかりかね
「本田親貞ナルベシ、森有長ト俱共尾籠を致事アリ」
申候、為御心得ニ候、
一爰元しんせつの衆、浦川あたりの衆ハ今分ニ而候ハ、、
とゝき申事も御座候ハん、さて源介殿弥しせつニ候、
土持殿弥ニ而候、其外此いな物かと存候、左折（ママ）ハすな
のものりつ華ニたましをとられ法様（候カ）、大方かいせいか
と見得申候、前之十分一も咄被申衆なく候に、無一人
ハ与人ニかわり弥つとめらるゝと見得申候、爰元ニ而
者咄者二左に無候、間もなく出合候、重而細〻可申候、
まつ〳〵申のこし候、恐惶謹言、

八月廿一日　　有長（花押）
　　森嘉右衛門

竹内助市様
　まいる

輓薦嶋津甲斐居士

生死去来一夢場　心空何処不家郷　教他掉臂驀帰去
脚下現成宝閣楼

示諭甲斐居士諸春族（脊カ）

起念自他論各域　空心生死一如同　試将心念切推究
悲喜何曾在此中

貞享二乙丑仲秋十七日、柴雲（紫カ）鉄牛山僧書於維广堂、竹
内助一傳ニ入ヘシ、

州南加世田大浦有農夫、兄弟事母至孝也、予記所粗聞
成一律、摠是実語聊非空文、

可憐南畝両農民　孝友生知不問人　幸出同胞得同心
惜留慈母少慈親　弟兄代寝左兼右　定省何須昏與農（晨カ）
迎送設途休息所　往来宜夏納涼辰
炎天扇枕共労力　冬日温衾自以身　行負背間悲體瘦
卧爬痒処恐膚皺　家将数口雖無飽　米具長腰如不貧
二子風流猶有語　但従父訓未為仁

元禄壬申臘月中浣　無名氏謹識

韓公曰木之就規矩、在梓匠輪輿、人之能為人、由内有詩
書、是不可誣、爰有浦川邊（適カ）子、穎利之少年也、平生志學
孜々焉、今慈（茲）題端午風興、所賦詩一章、詞藻宏麗、而粗
有老成之典、公者所謂知人之為人、由有詩書者、後生可
畏予也自公之幼齢、締師資之約、教雖不厳見労力之有成、
欣々然仍和其韻末、寄玉机下、且以古人語告曰、學譬如
為山、未成一簣、止吾心也、又如平地雖覆一簣進吾往也、
守此語、夙興夜寐、務以不怠、拔俗之君子、豈在他乎哉、

軒渠　「大竜寺三代也」　一溪叟

後来可畏挙芳声　始見華篇詞藻清　努力郊墟燈火読
為山簣止勿陵平

（本文中ノ囲線ハ朱書ナリ）